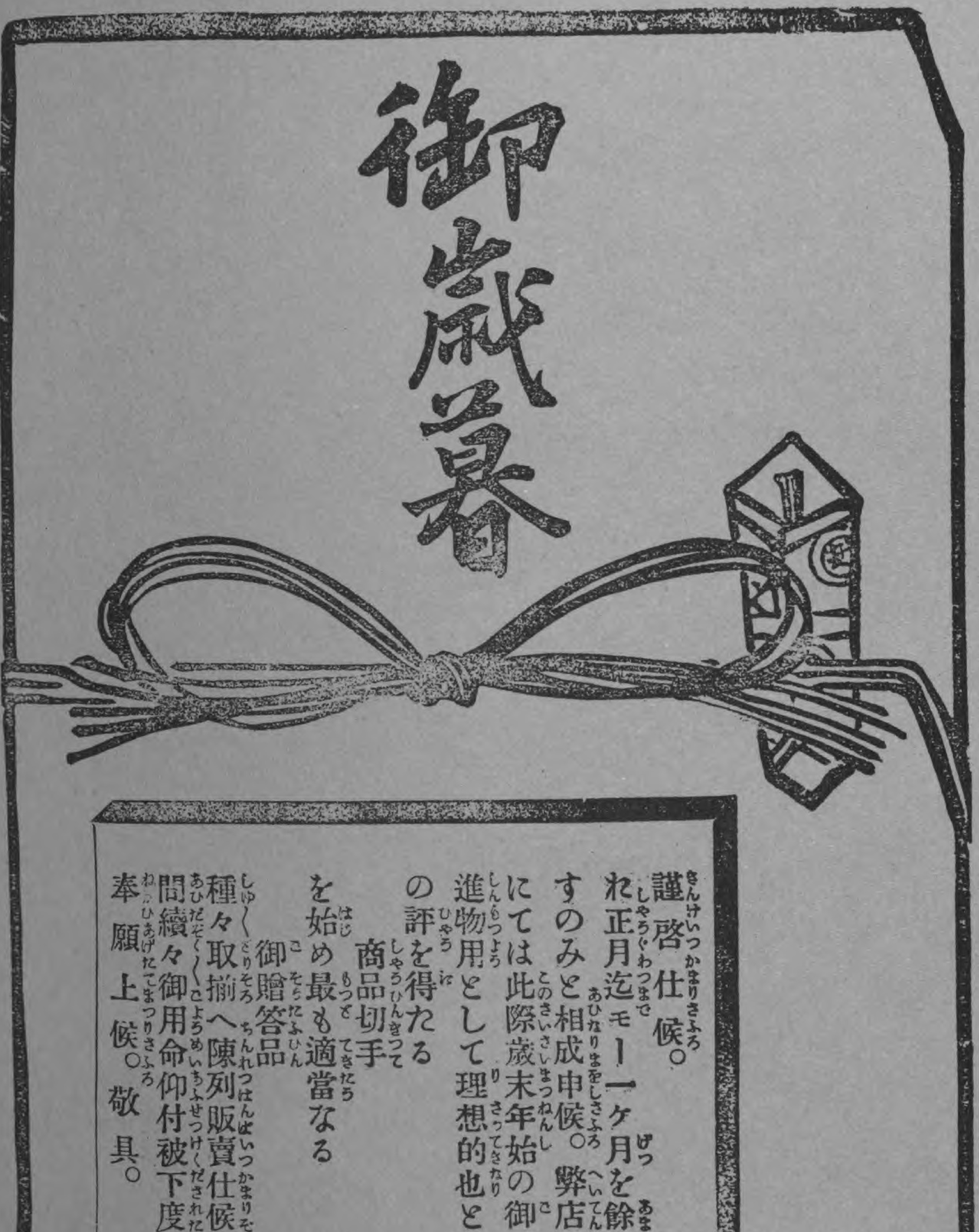
女鑑

第十七年第十二號




御歳暮
謹啓仕候。
れ正月迄モ一ケ月を餘
すのみと相成申候。弊店
にては此際歳末年始の御
進物用として理想的也と
の評を得たる
商品切手
を始め最も適當なる
御贈答品
種々取揃へ陳列販賣仕候
間續々御用命仰付被下度
奉願上候。敬具。
越
三越呉服店

女鑑　第十七年第拾貳號目次



真正美顔　高等化粧

クイーン白粉

クイーン水

◎本品ハ英國倫敦ヨリ輸入セル最新最良ノ原料ニ由リ純良ナル芳香ヲ加ヘ精製シタル化粧品ニシテ外國傳來的ノ陳腐ナル品ニアラズ壹度御試用ノ榮ヲ賜ラン事ヲ

▲此次販賣ハ至ル所ノ小間物化粧品店ニアリ若シ品切ナレバ直接ニ御注文ヲ乞フ

東京日本橋區新和泉町

本舗

三井花陽堂



本品は忝くも

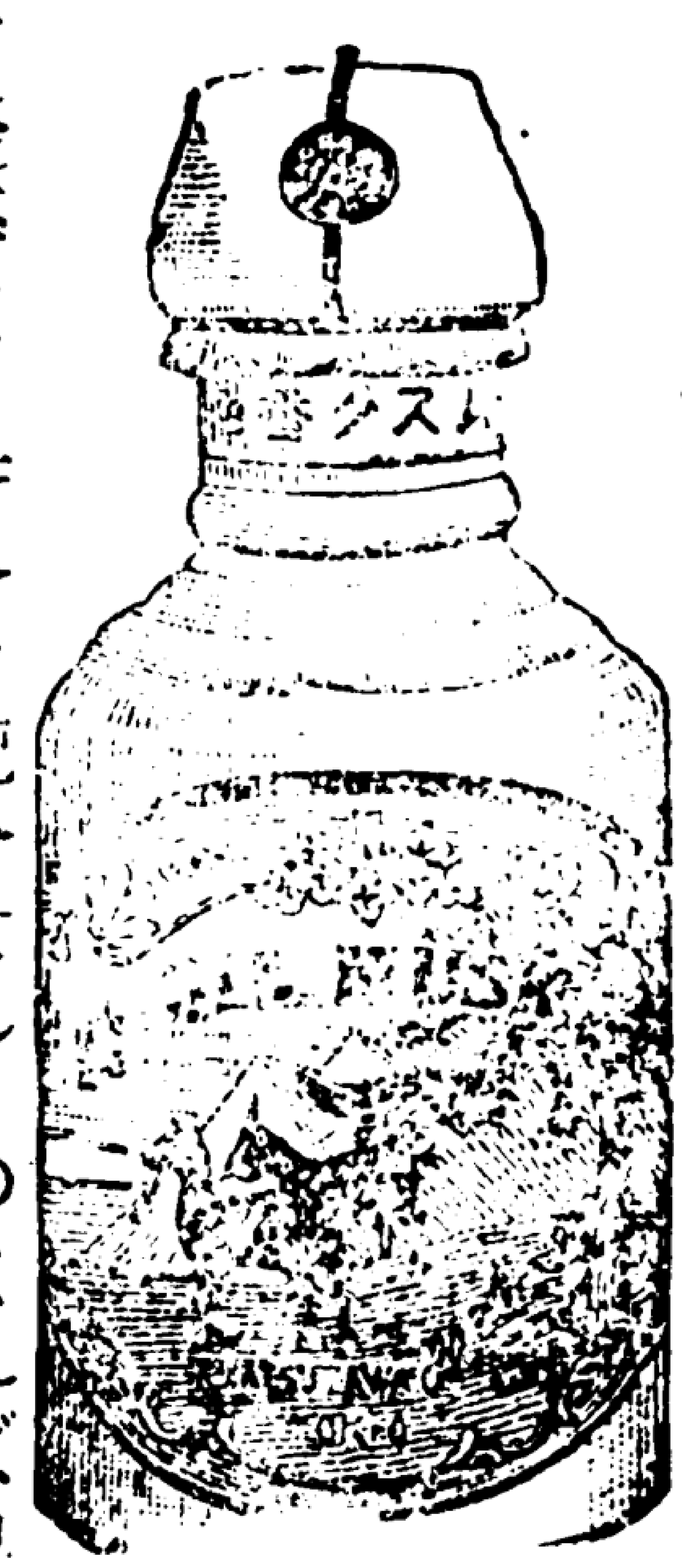
皇后陛下

東京勧業博覧會場へ御行啓の際獻上し奉り即時御嘉納の光榮を得たり

内務省衛生試驗所檢査濟

ムスク香油

定價　五十錢



一本品は最良の植物性原油を精製し更に毛髪の攝養上所要なる加工を施し尚麝等なる芳香を配合せしものなれば他に比類なき模範的香油であります

一本品は一度び御用ひあれば忽ち髪の毛さらりとし艶黒く麗はしく其上優美なる（バイオレット）の芳香を保ち紳士淑女の一日も缺く事のできぬ香油であります

一本品は毛髪の發育を大切になさる御婦人は申に及ばず男子方の散髪用として無比の佳品で有升

一本品は市内到る處藥小間物化粧品店にて販賣致し居升御最寄にて御需めを乞ふ

○若し品切等の節は端書にて本舗へ御注文あれば東京市内に限り壹瓶以上何程にても直ちに御届け申上べく候

ムスク香水
ホーサン石鹸
本舗

東京日本橋區本石町四丁目

松澤常吉化粧品部

山茶花



東京砲兵工廠技手

日野清三郎君案出

新案登録



戦利廃棄弾丸
薬莢で出来た
真に趣味ある
戦利好紀念物

ナイフ
ペン軸

宮内省
御用

玉寶堂

取次御望みの方には御相談に應ず



○刺繍用器具
幷に材料
○袋物器具
幷に材料
○摘み細工材料
○[illegible]用材料
幷に木型
其他御婦人用美術技藝品一式
地方御注文の節は代金引換小包郵便にて御送申上候

……切取線……

此切取線を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞幷に定價表無代進呈す　（女鑑）

東京市本郷區弓町二丁目
倉持商店

東京市浅草區下平右衛門町十九番地柳橋通り
第一商會

此のせきばんはかるくてきれいでよくかけて子孫にいたるまでこはれる事なし

壹枚に付金九錢
ふちなし金七錢五厘

發賣の御方様へは割引いたし升



連理の枝



右 男爵徳川厚君 同夫人里子君
左 子爵大河内輝耕君 同夫人國子君

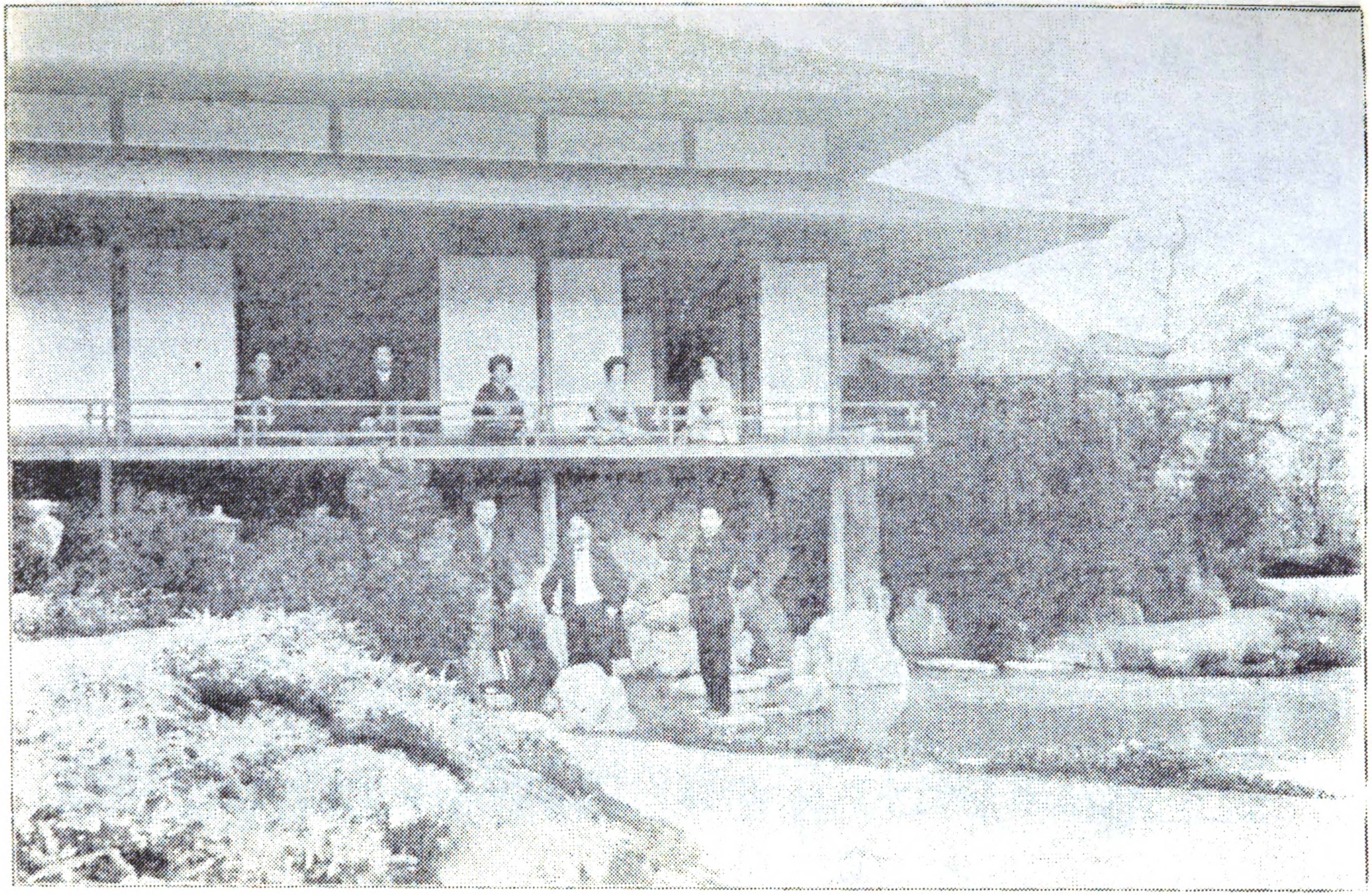
社交界の貴婦人



右は木戸侯夫人壽榮子君　中央毛利公母堂安子君　左は大谷伯夫人籌子君

（[illegible]上）

南禪寺内の雅會



竹柏園小集

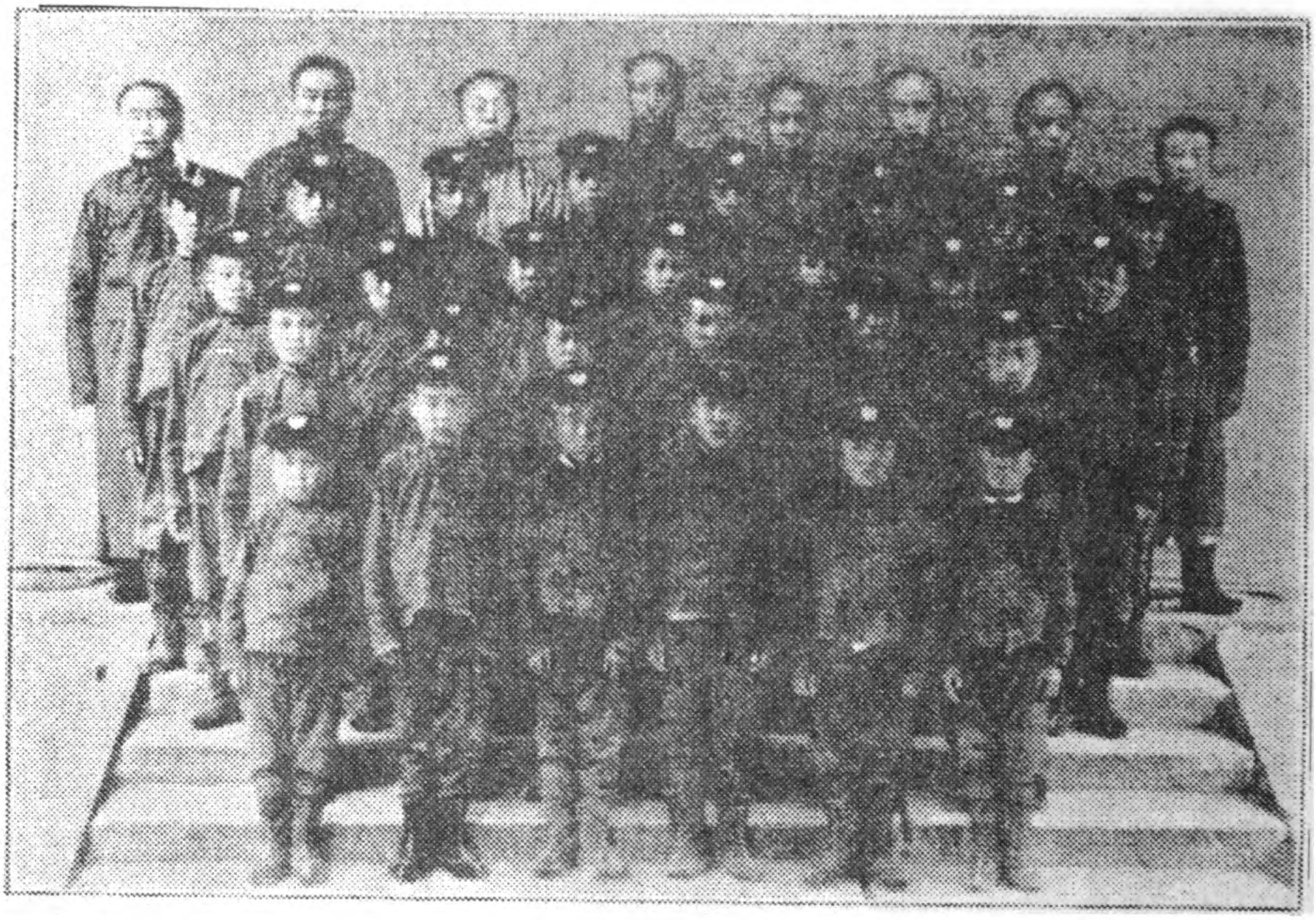
（階上左より二番目は佐々木信綱氏）

井伊家の後園

右より 井伊子爵令孫 直重君 八重子君 登美子君



蒙古の學生



崇正小學堂

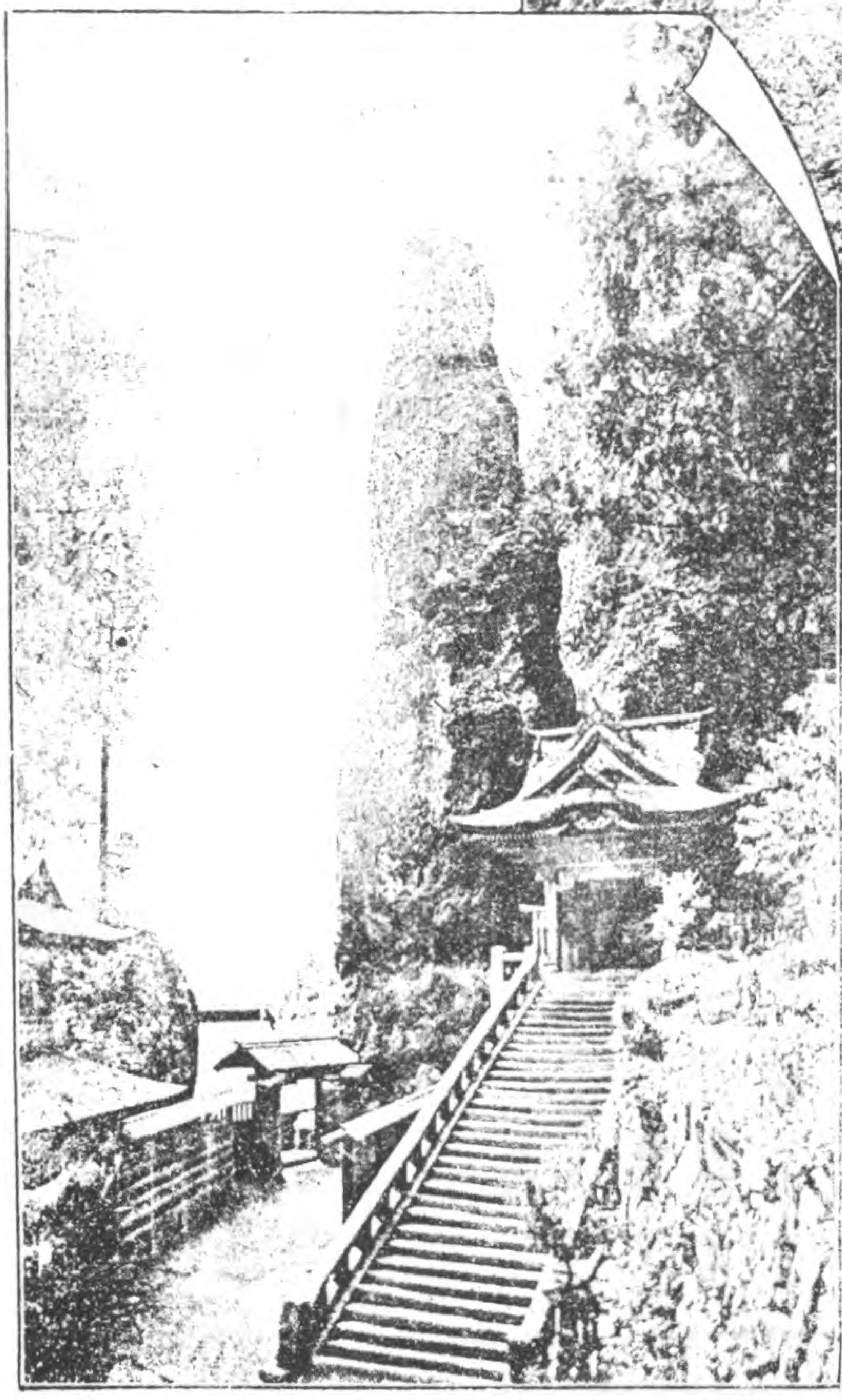


毓正女學堂

上州名所



妙義山の石門



榛名山の蠟燭岩

大日本淑女學會

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會にはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります。

▲卒業は二ヶ年で、會費も低廉でありますす

▲會員には講義錄の外『姫百合』と云ふ美くしい体裁の、利益になる女學雜誌を毎號無料て進呈いたします。

第五回新學期開始 此際入會者に限り**入會金全免**すべし!

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲絶潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

●詳しい**規則書**は申越次第差上げます

●東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

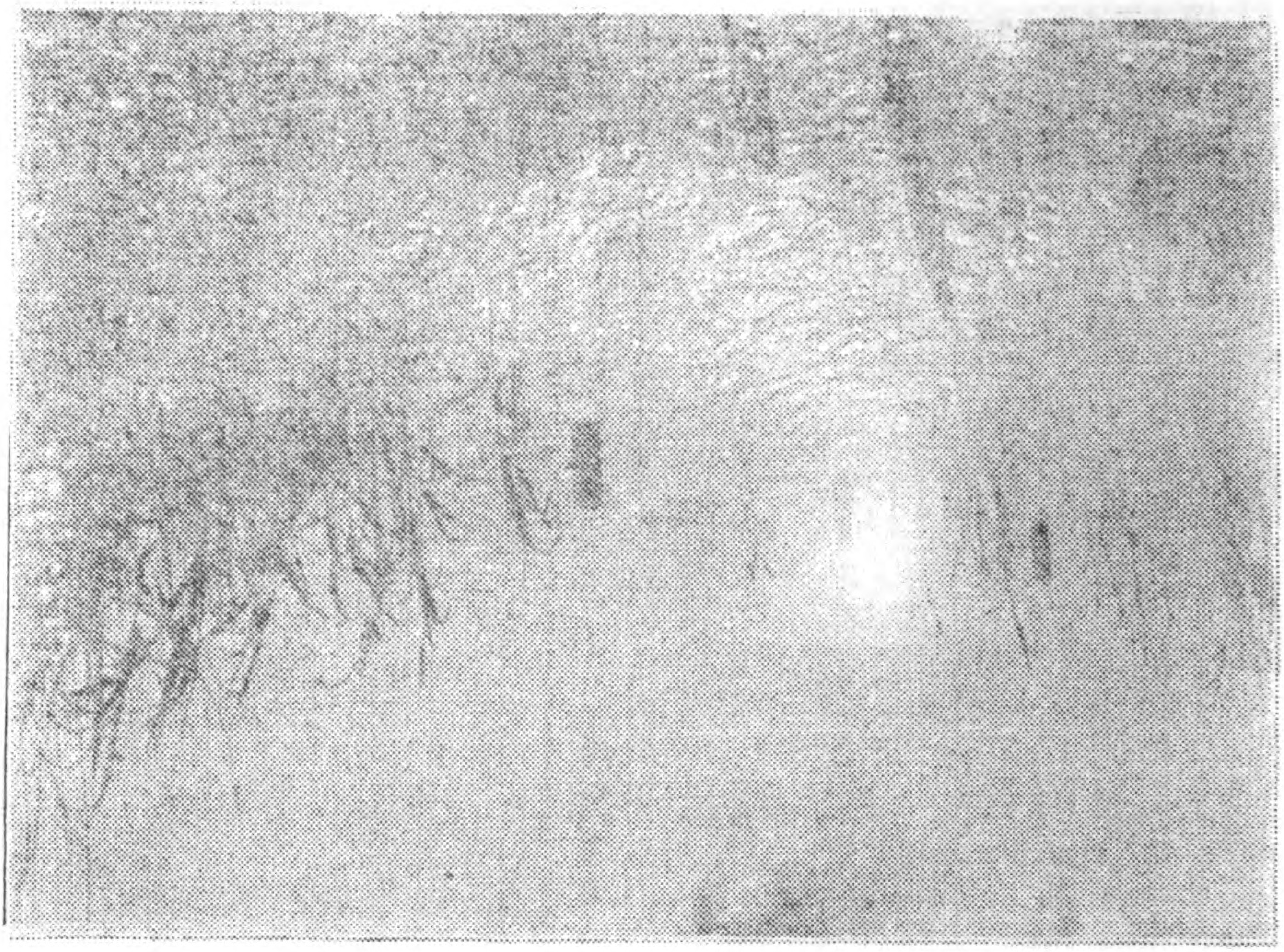
大日本淑女學會

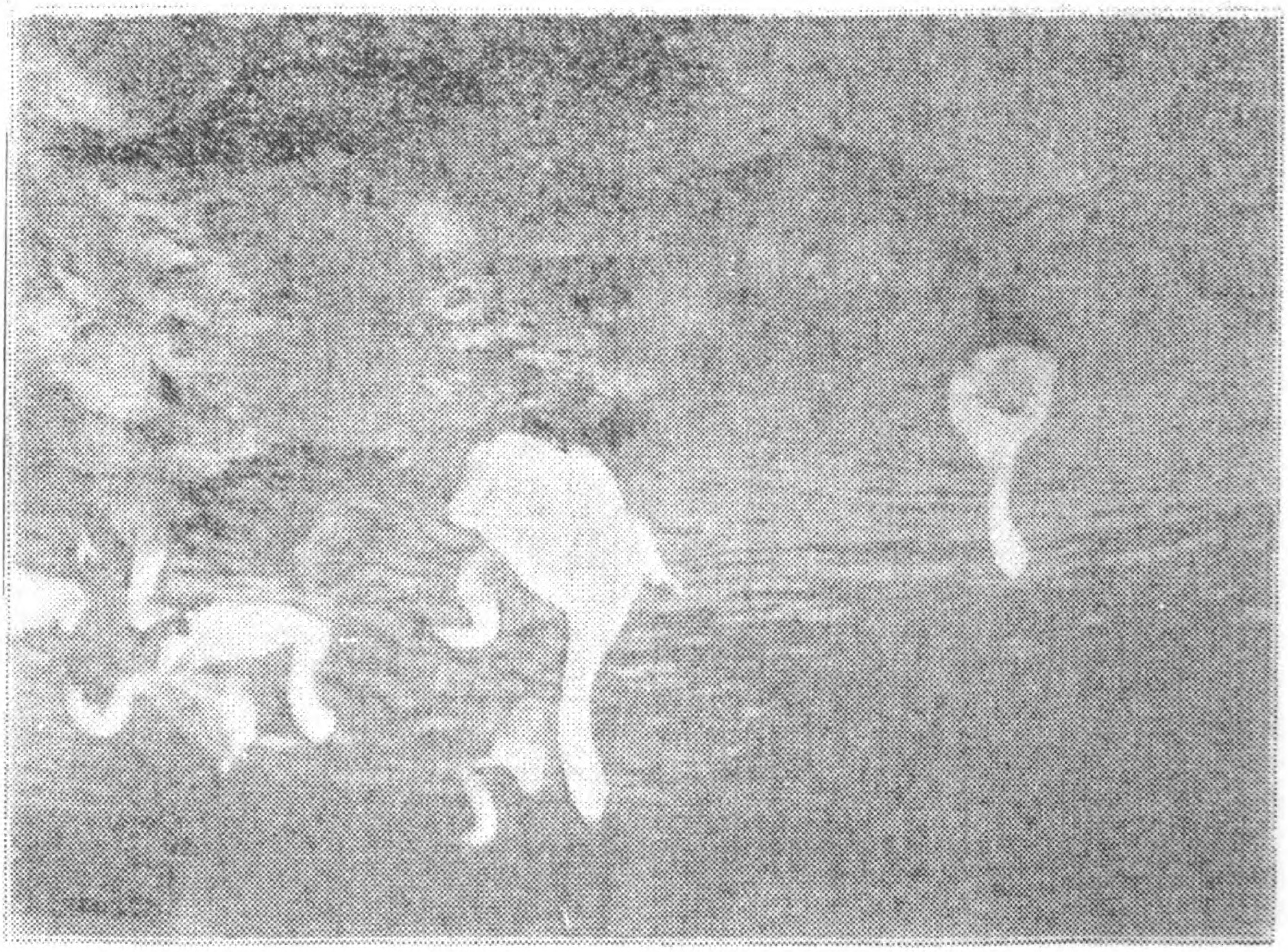
獨逸の幼兒風俗



溪水氏寄

冬の水





女鑑

第十七年第十二號

年の暮

落散る葉にも音なくて　人目も草も枯れはてし
年のをはりは何となく　物のあはれも覺ゆとぞ
しかはあれども越方の　いそしみ振も來む年の
その計畫もけふ見せて　嬉しきものとしの暮
唯常磐木のみどりのみ　色かと見れば軒の端に
いと美くしき山茶花の　一しほ目立つ咲ぶりや
たゞなみ風の聲のみぞ　音かときけば浦千どり
友よびかはし鳴く節も　折に合せておもしろし

（中川愛氷作）





主婦と常識

文學博士　市村鑽次郎

常識の必要であると云ふことは、固より男女を論ずるまでも無いことであるが、殊に一家の主婦たる者に對しては之が必要を感ずるのである、

現今高等女學校に於ける敎育の方針といふものは、事新らしく云ふまでも無く、他日一家の主婦として活動する時に方りて不便なく處理して行かれるやうに、之が素養を造るので、換言すれば婦人に、必須なる一般の學科を授けるのが目的である、

故に德育や體育も勿論であるが、智育の點に於ても片落なく平等に發達せしむるに努めるのである、けれども、如何なるものか婦人の性質といふものは、兎角一方に傾き易くして、圓滿に常識の發達を望むことが困難のやうに考へる、

殊に高等女學校より一層高い所の敎育。即ち專門の部に入ると、益々その方へのみ傾いて常識の發達を遮ると云ふよりは、寧ろ之を缺ぐ傾きがある、尤も婦人とても、學術なり又は技藝なり、何か一種の專門を以て世に立たうとする者、或は已に之を以て立つ者は、固よりその專門に浮身を窶して熱中するのは結構で、吾人も亦之が必要を認むるのであるが、之と同時に一家の主婦として常識の發達が必要であること

は非認が出來まいと思ふ、

要するに一家の主人即ち男子たる者は、各自その執る所の業務は多種多樣で、一々此に明示し盡すことは出來ないが、兎に角中流以下の人は左樣でも無いが、より以上の男子は、大抵有つて居る所の職務が單に一つ位で無い、縱ひ一つにしても下流のやうに簡易で無い、之に向つて力を盡さねばならぬ責任を有つて居るから、中々家事に關する些細な事までも注意を運ぶことは出來ないのである、

依つて内部に關する即ち家庭内の事を整頓處理して行くのは主婦たる者の職務であると思ふ、殊に男子が職務の爲に非常に多忙であるとか、若くは專門の學術或は技藝家で、身心を之に捧げて居る時などは、迚も家事を顧みると云ふやうな餘地は毫も無いのである、而かもその時に當りて、一家の主婦たる者が餘り專門的に流れて、常識が不十分であつたならば、如何であらう、到底圓滿に家政を整理することは出來なからうと推察せられる、

前に予が所謂專門的といふのは、必ずしも特殊の學科や技藝等を指すのでは無い、例へば、裁縫、割烹、交際若くは、讀書等を言ふので、是等の中何れか其一に耽る者がある、その耽るといふ事は乃て溺るゝので、謂ゆる一方に傾いて專門に流れるからして、自然に家事一般の整理が疎かになる、隨分世間には斯ういふ振合のものも尠なくないやうに思ふ、否、往々見聞するので苦々しく感じて居る、

全體一家の主婦として執るべき必要なる任務は、先づ家事經濟を第一上手に繰廻して行くべきは勿論、洗濯、裁縫、兒童の敎育、衞生、庖厨、婢僕の監督等の事より、その他家事一般に注意を拂ふべきものであると思ふ、然るに現今學校に於て新らしき敎育を受けたる者の中には、往々前述の如く或一方に流るゝの結果、主婦の任務は、己が子女を敎養さへすれば、是を以て足れりとなして、裁縫その他の事は、總て

他人に命じて之を爲さしむれば十分である、又己は社會の或事に勤めて居るから、迚も家庭の事に心を注では居られぬなど、云つて居る者もある、

眼を轉じて、舊來の考へを有つて居る婦人を視れば、主婦たる者の任務は、最も裁縫に重きを置き、庖厨の事を第二となし此の二つのものさへ出來れば能事畢れりとなし、その他の事に就ては深く意を注ぐ者が少ないやうに思はれるが、

右は兩者ともに弊があるので、何れを甲とも乙とも稱し難いのである、兒童の敎育を大切に思ふのは結構で、是は即ち第二の我を造るのであるから粗略にしてはならぬ、又社交をするのも缺くべからざる事ではあるが、それらの爲に裁縫を廢し、庖厨等一切を他人任せにすると云ふことは甚だ好ましからぬ事ではあるまいか、予が見る所に由ればそれらをしたからとても、尙ほ十分に一家の食事の組立をする位の餘力はあるやうに思はれる、又如何に裁縫が克く出來、料理が滿足に調ふからと、云つても、兒童の敎養を懈つてはならぬ、然るに斯ういふ人は、己が兒童の學校に於ける成蹟や、或は萬一病氣に罹つた時など、その經過等に就ては餘り注意をしないが、是等は孰れも婦人の注意が一方に傾き過ぎる、その爲に此くの如き弊に陷るので、その害は同一で少しも擇ぶ所はないのである、

前段に述べたるが如く、若しも一方にのみ傾いて、家庭に必要なる主婦たる者の任務を空うすることになると、從つて主人たる男子をして後顧の憂を生ぜしむるやうになる、是の故に主婦たる者は、常に家事の全體に渉つて注意を拂ひ、たとひ自ら手を下さない迄も、一般に眼を配るといふことは必要で、而して片寄らないやうにせねばならぬ、尤も當今の高等女學校の敎育に於ても一般に婦人の常識の發達する樣に勉められつゝあるので、別に左樣いふ心配も無いのであるけれども兎角婦人の性質といふものは、常に或

方面に向つて傾き易いものであるから、餘程注意の上にも注意をしないと、或は主婦たるの任務を全うすることが出來ぬから、深く意を留めねばならぬ事と考へる、

予は曾て斯ういふ事を考へた、古今著名の政治家若くば大學者と稱せられし者がある、然るに其子孫たる者の中に、割合に名高い者が出ないが、之は如何なる譯であらうと考へたのである、併し之が原因は到底一二を以て盡すことは出來ないのであるが、若しも其原因が澤山あるとしたならば、正しく斯の事は其原因の中の主なる一として數へらるゝものであらうと思ふ、

例へば、名高い政治家と云ふやうな者は、始終國家の經綸にのみ力を注いで居るから、迚も自分の子女の敎育の事までも關渉して居られない、又著名の學者は、常に專門の事にのみ日夜腦力を費して居るので大切の吾子ながらも之が敎育を顧みて居る餘暇が無い、之が爲に是等の家に生れし子女は、不幸にも父親より温き敎育の恩惠を受ける時間が無いのである、若しも父親が其子女に對する敎育の注意が不十分であると云ふことが、その原因の一に數へらるゝとしたならば、此の弊を救ふに如何なる手段を執るべきかと云ふに、即ち一家の主婦たるべき者が其任に當らなければならぬと考へる、

併し主婦たる者が、果して斯の大任を擔ひ得る資格の者であつたならば、その爲に或は父よりも一層名高い政治家なり、又は學者に仕立てることも出來やう、縦ひ父を凌ぐまでゝなくとも、相當の者に仕上げるであらうが、若しも此の反對であつたならば如何であらう、云ふまでも無く其子女を愚にして仕舞ふやうに立至るのである、最早その時には臍を嚙むとも及ばない、依つて主婦たる者は、深く此に意を注がねばならぬ

普通世間では、最早中流以上にもなれば、何不自由なきのみならず、多くの召使等をも使つて居るので

あるから、何も彼是と家事萬端に注意をしなくとも宜いやうに考へて居るが、決して左樣で無い、成程多くの奉公人等を使つて居たならば、身體は樂であらうが、氣骨の折れることは一通りでは無い、諺にも、使はるゝ者よりも使ふ人と云ふやうに、中々上に立つ者の心配は豫想外のものである、

例へば、此く云はゞ彼の氣を損じはせぬか、彼を用ゐなば是は怨らんかとその苦心は察するに餘りあるのであるけれども、若しも主婦自身が、常識の發達が缺けて居て、前述の如く餘り專門的に流るゝ時は、良人に後顧の憂を懷かしめ、子女の敎養を謬り、延て婢僕までが輕侮の念を生じて怠慢に陷り、萬事萬端に行悩みを感ずるのであるから、吳々も主婦たる者は、一方に注意を傾くることを避けて、必ず全般の家事に就て行渡るやうに望むのであるが、それには常識の發達を計ることが肝要である、

女子敎育の價値

文學士　小林弘貞

近來世人が、普通中等の敎育を受けつゝある所の女子に對する希望を聞けば、賞讃の聲よりは寧ろ之が不足を責むる方が多い、何故に此く不足を責むるのであるかその原因は果して何に基づくものであるかと云ふ事に就ては、須らくその任に當る敎育者の考慮を要するのである、

予の立脚地より之を視察すれば、その多くの不足を告る聲の中には、なるほど當を得て居ると思はるゝ節もないでは無いが、他の半面に於ては又頗る誤つた批評もあるやうに考へらるゝが、今こゝに不足の聲を聞けば、當時の女學生は、既に學校に於て種々の事を修めつゝあるにも拘らず、更に實用に適はぬ、例へば、炊事を爲せても、物を濯がせても、又は賓客に應對させても、殆んど物の用に立たないのみならず、

實用上の葉書一枚すらも碌に書くことも出來ないのであるから、寧そ學ばせない方が宜い位で、生中勉强させた爲に種々の事を聞嚙つて生意氣になるばかりであると、

右は世人の女生に對する非難僅に一端を示した者であるが、此非難は敎育上より論ずれば大いなる謬見と云はねばならぬので、平たく云へば見當違ひの難詰と云ふべきものである、尙ほ一歩進んで親切に云へば、斯様な批評を女生の上に下さるゝ人々は、自ら學校そのものゝ性質を誤解して居らるゝからである、以下少しく其事を述べて見やう、

元來學校に於て普通敎育を施すと云ふものは、果して何が爲であるかと云ふに、言ふまでもなく現今の女生をして、將來各自、賢母として兒女の育成を掌り、良妻として克く良人を輔くる等、之を約めて云へば家庭の主婦たるに要する各方面の材料を供給するのが、即ち學校の目的である、決して區々たる細事までを敎ゆるものでは無い、

されば數學を敎授しては惱力の緻密を期待し、唱歌を授けては美妙の感、響動の思想を養成し、或は圖話を練修せしめては事物の觀察力を緻密ならしむると同時に指頭の働きを敏活ならしめ、又博物を授けては、分類の智識を助長するとともに自然界の美觀に接觸せしむる等その他種々雜多の學理を以つて、全身の各官能を十分に修養して、之を以て他日女生等が、何時如何なる職業に從事するも、また如何なる家庭を處理するに當りても、遺憾なくその時の狀態に應じて、豫て完全に發達せる常識を以て、之に當り之を處理せしむる人物を造るのが目的である

是に由つて見るときは、實に中等の普通敎育が期する所の目的と云ふものは遠くして且つ大なるものと云はねばならぬのである、然るに世の多くは此事に考が及ばないのか、或は思ひ到つて居るのか知らんが、

ひたすらに年少の女子を捕へて、最早何も彼も完全に出來得るものと早合點をして、大人すなはち世間の事に十數年來長けたる老主婦の業を以て之に擬がはんとする者があるけれども、是は中等普通教育の精神を誤解するの結果、その目的が前陳の如く遠く且つ大なることを解せぬからであると思ふのである、

乃ち吾人は現に女生の教育に從事しつゝあるが、その目的は即ち前述の如くである．併しながら吾人とても單に舊株を墨守するの一大弊害であると云ふことは認めて居る、故に家庭の如何なる細かな事でも、之を教授すべき好機會に接着した場合には、決してその好機會を逸すると云ふことは無くして導くの方針ではあるが、去とて只この區々たる些事にのみ屈托して、平素その事のみに齷齪はして居られぬのである、期する所は他日完全に常識の發達したる人物となるべき者を養成すると云ふ點に基礎を置くのである苟くも、世人が斯事を咀嚼たならば、女生に對する不足の聲も無くなるだらうと思ふのである、

次に近來頻りに女學生の墮落の事に就て大層八ヶ間敷攻擊非難せらるゝが、之に就て吾人の考へを述べて見れば、現時この東京のみに在る女學生の人員を數へても實に驚くべき莫大なものであらうと思ふ、又學生ならずして表面學生らしき風態をして居る者も隨分少なくないやうに見受けるが、世間の眼には何れも是も一樣に女學生と見做して居る、されば是等を合したならば其數の豫測は出來ない、まづその眞僞は兎も角として、多數の中には墮落の人物もあるであらう、何時の世何れの時代でも此の事は免れないのである、併しそれらは宜しく訓戒矯正すべきで、固より假借の餘地はないのであるが、

玆に一の注意すべき事は、一少女が嘗て某學校に在學せしも、不品行等の爲に退學を命ぜられ、その後に於て墮落の淵に沈んだ者があると假定すれば、世の新聞紙等は此の事實を捉へて直ちに某校女學生の墮落など、喧しく書き立てゝ、毫も現在その校に籍を有するものであるか否や等を審らかに取調べる事をし

ない、之は甚だ宜くないと考へる、のみならず、此くの如き記事は、實にその學事に忠實なる幾多女學生の名譽を傷つくるは勿論、風敎上にも喜ばしく無いのである、

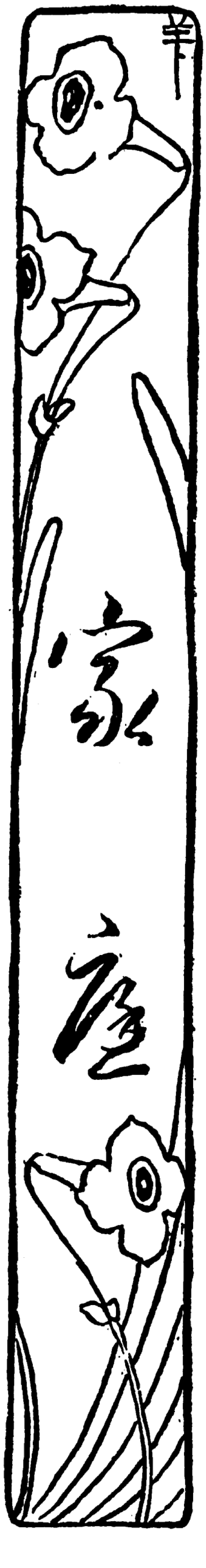
右等の事に關しては、世の操觚者を以て任ずる人々は、須らく愼重の態度を以て之が眞僞等を鑑別して筆誅せられん事を望むのである、

翻つて考ふれば、男女共に中等敎育を受ける時代は危險の最も甚しき時期で、何時如何なる外界の誘惑に陷らぬとも限らないから、之が父兄たる者および敎育者たるものは、寸時も油斷してはならぬ、常に警戒を嚴かにせねばならぬのである、

けれども現今女學生一般の趨勢を見ますれば、年に月に學藝を研究しやうとする希望が進んで來たので、從つて修學者の數も年一年と增加して來るから、實に女子敎育勃興の運に向つて居ると謂ふべきである、故に誰も彼も今日では海老茶袴を着けて學校へ通ふのが名譽であると云ふ傾きがある、

されば此の時に當り敎育に從事する者が、黽勉その職責を竭したならば、大いに女子の將來に於て、見るべき發展があるであらうと考へる、決して世人一部分の間に、女學生の墮落時代などゝ、サモ大業らしく叫び立つる聲に躊躇して、逡巡して進みかねると云ふやうな態度を取つて居るべき時代では無からうと深く信じて疑はぬのである、

之に關して一言地方の父兄に傳へたきは、前陳の如くたとひ眞僞相半ばするにもせよ、一たび新聞紙上等に女生の墮落を喧傳せられてからと云ふものは、恰も子女を遊學に出すのは、虎の穴か又は千尋の淵にでも投ずるかのやうなる畏怖心を懷いて、徒らに修學の時期を逸して仕舞ふものもある、之に就ては、子女を入るべき學校の撰擇は最も大切である、この撰擇さへ謬らなければ、毫も心配は無いのであるから、普通中等敎育の[illegible]を謬解せられないことを切に望むのである、



胃腸の養生法（承前）

醫學博士 長與稱吉

食物の滋養價

食物の滋養價を定めることは、中々容易な業ではないが、大凡左の五ヶ條の要項について、緻密な研究、精細な觀察を遂げたならば、大體のことは知れると思ふ。

一、各食品を分析して見て滋養分、含有の比例を知ること。

二、食物から發生する溫量を測り定めること、

三、食物の胃中に停つて居る時間の長短を知ること。即ち食物は食べてから幾干時間かゝつて腸にゆくか。如何に胃を勞かせるかを識ること。

四、食物の體內に吸收せられる分量（活用量）と、糞尿となつて體外に排泄される分量（死量）とを定めること。即ち腸內の生理的實況を視ること。

五、食物の調理法につき、側面的觀察をなすこと等である、左に順を逐ひ項を分ちて、説き出さうと思ふ。

一 食品の分析

（食物の滋養價を決定する第一要義）

食品を分析して見ると、其の中に蛋白質がいくらいくらあつて、脂肪含水炭素がいくらいくらあると

いふ事が分る。で、蛋白脂肪含水炭素等を多量に含んで居れば、其の食品は、含んで居ることの少量いものよりは、吾々の身體に効能が優るといはねばならぬ。

たとへば、牛肉百匁と、鶏肉百匁とを取つて、比較して見る。

品名	蛋白質	脂肪分
脂肪の少ない牛肉百匁の中には	二十匁强	七匁弱
脂肪の少ない鶏肉百匁の中には	十九匁强	五匁强

即ちこれに由つて見ると、鶏肉よりも、牛肉の方が滋養價があるといはなければならぬ。

けれども、其の中の含有比例が、偏頗つて居ては不可ない、即ち蛋白のみが馬鹿に多くて、含水炭素に乏しいとか、又は脂肪が多量で、蛋白質が僅かだとかいふ風に、其の含有比例の調和を欠いて居たらば、滋養品としての價値は少ないのである。是れは多數の學者が一般に是認て居る所である。猶ほこの事については後章に絮説する積りであるが、茲には唯、主要の成分が多量にありさへすれば、優等ものとして、一通り左の表を覽て頂きたい。

次の分析表は凡て百分比例を示したもので、たとへば、蛋白質が一二三、四とあれば、原品百匁の中に、十二匁と三分四厘あるといふ意味である。

甲　動物性食品

第一表　獸肉の分析表

注意！此には凡て「グラム」を以て示してある。一「グラム」は我邦の二分五厘に相當する。

品名	蛋白質	脂肪	水分	灰分(鹽類)
牡牛(脂肪多きもの)	一六、七五	二九、二八	五三、〇五	〇、九二
同(脂肪中等度のもの)	二〇、九六	五、四一	七二、〇三	一、一四
同(脂肪の少きもの)	二〇、七一	一、七四	七六、三七	一、一八
牝牛肉(脂肪多きもの)	一九、八六	七、七〇	七〇、九六	一、〇七
犢牛肉(同)	一八、八八	七、四一	七二、三一	一、三三
牛の舌	一七、一〇	一八、一〇	六三、八〇	一、〇〇
羊肉(脂肪多きもの)	一六、六二	二八、六一	五三、三一	〇、九三

豚肉(脂肪多きもの)	一四、五四	三七、三四	四七、四〇	〇、七二
同(脂肪少きもの)	二〇、二五	六、八一	七二、五七	一、一〇
馬肉	二一、一七	二、五五	七四、二七	一、〇一
兎肉	二三、三四	一、一三	七四、一六	一、一八
鹿肉	一九、七七	一、九二	七五、七六	一、一三

第二表　鳥肉の分析表

品名	蛋白質	脂肪	水分	灰分(鹽類)
鷄肉(脂肪多きもの)	一八、四九	九、三四	七〇、〇六	〇、九一
同(脂肪少きもの)	一九、七二	一、四二	七六、二二	一、三七
家鴨	二二、六五	三、一一	七〇、八二	一、〇九
鳩	二二、一四	一、〇〇	七五、一〇	一、〇〇
吐綬鷄	二四、七〇	八、五〇	―	一、二〇

肉類の話

肉類の一般性状

以上掲載の分析表は、何れも平均した處を示したものであるが、同じ禽獸の肉でも、其のもの丶部位により、動物の年齢により、又は牝牡雌雄の差、飼養の方法によつて、大いに其の優劣を生ずるものである。殊に鳥類の如きは一年中の時季によつて著しい變化がある。

一般に幼稚な動物は、結締織が少なくして柔軟であるが、老年つたものや、營養不良のものや、劇しく勞働したもの丶肉は、結締織に富み、非常に強靭く、滋養分に乏しく、從つて風味が不良い。

屠りたての肉類は、凡て中性又はアルカリ性の反應を呈し(アルカリ性とは赤色試驗紙を藍色に變ずるをいひ、中性とは變化せざるをいふ)且つ彈力性に富んで居るが、暫し時を經ると肉が緊縮つて來て硬くなる。これを『死後強直』といふ。

人間でも死んで暫くすると、同樣に強直を起す。俗に死ぬ事を「かたくなる」といふは、即ちこれを言ふのである。それから又少し時を過すと、漸次其の強直が緩解て來て、再び最初のやうに柔軟となり、酸性の反應を呈するに至るものだ(酸性反應とはアルカリ性反應の反對で、藍色の試驗紙を赤色に變ずるのをいふのである)

肉の軟化期は所謂腐敗の初期である。此の期に於て凡ての肉類は、最も美味を呈するものである。故に吾人は通常この軟化の初期に當りて、食膳に上せるのである。

然るに軟化が漸次進むと、其の中に種々な有毒物質を生じ、最早吾人の食用には供へることが出來なくなる、即ち眞の腐敗に陥つたので、肉が非常に柔軟になるばかりでなく、一種厭ふべき惡臭を放つものである。殊に魚類の肉は禽獸の肉よりも腐敗に傾き易い。



肉類の撰擇法

腐敗及其否を知る方法

肉類を攝取するに當りて最も肝腎なのは、陳舊か、新鮮いか、腐敗しては居らぬか、病獸の肉ではないかといふ事を鑑識ることであらう。殊に生肉の腐敗醗酵れ易い夏季に於ては一層丁寧に撰擇する必要を見る。

吾人は通常單簡な識鑑法として、左の諸點に注意を拂へばよろしい。

(一)色澤　新鮮なのは固有の肉色をもつて居て、一

種の光澤があるけれども、腐肉は光澤がなく、且ついやに紅みを帯び、又は暗褐色を呈して居る。近來狡猾なる商人は古い肉類を新らしく觀せかける爲めに、有害な着色料を塗るものがあるさうだから、大に注意しなければならぬ。

（二）硬度　新鮮な肉は彈力に富むも、腐肉は柔軟で肉にしまりがない。

（三）香氣　肉には固有の肉の香がある。即ち良肉は固有の香氣を放つけれども、腐肉はいやに醒臭くして不快の感を起させる。

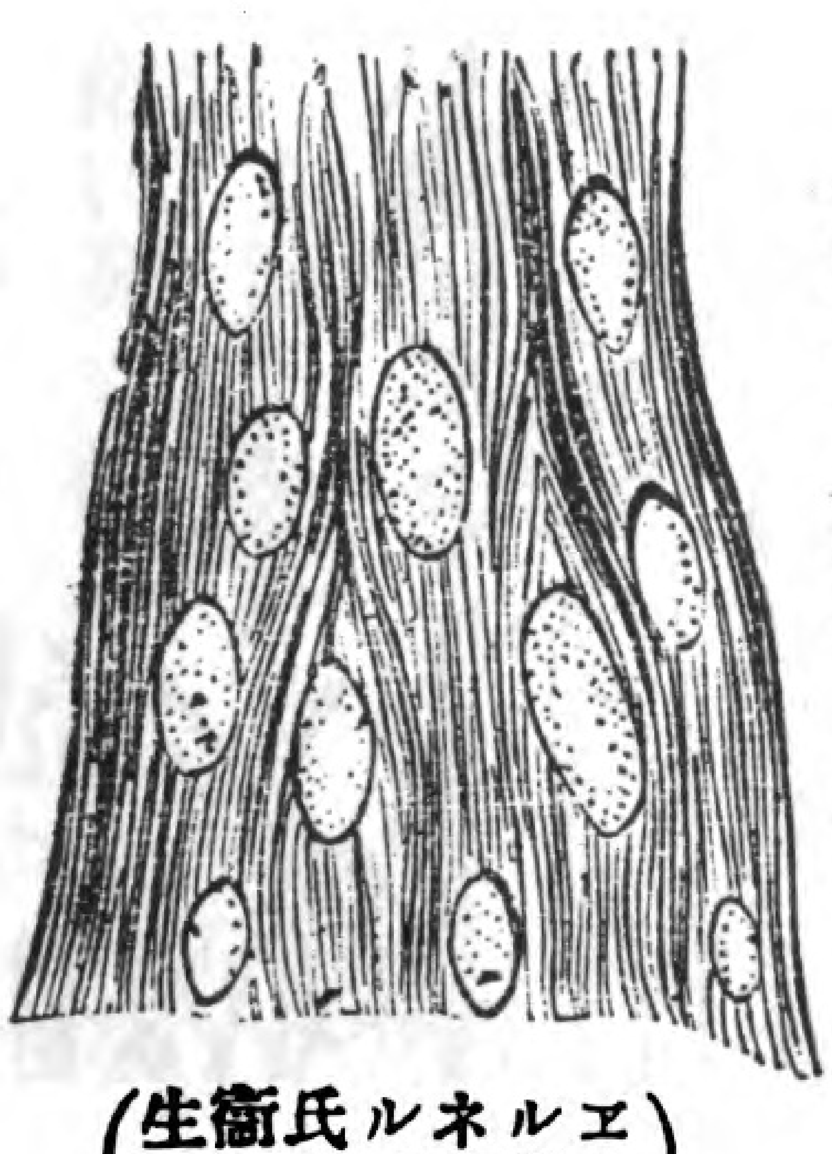
（四）乾濕　良肉は濕り氣が少く、腐肉は濕り氣が多い、且つねばねばして居る。大凡一日間、肉を曝して置いて、其表面が乾いて居れば良肉、粘液を生じ濕潤つて居れば不良の肉たる徴である。

其の他鳥類の肉にありては、新鮮なものは羽毛をひいても容易に拔けない。古いやつは易く脱ける。且つ眼球は生々して居て、美はしい光澤をもつて居るのもだ。

肉類と寄生蟲。。。。。。

一般に肉類は烹たものよりは、生肉の方が消化れ易いのであるが、肉類を生で食することは頗る危險である。是非焙くか、烹るかしなければ、往々其の中に包含れて居る寄生蟲を受けて、恐るべき疾病を釀すことがあるからだ。

寄生蟲の中で最も多いのは絛蟲で、次が旋毛蟲だ



豚肉内に生存せる胞蟲

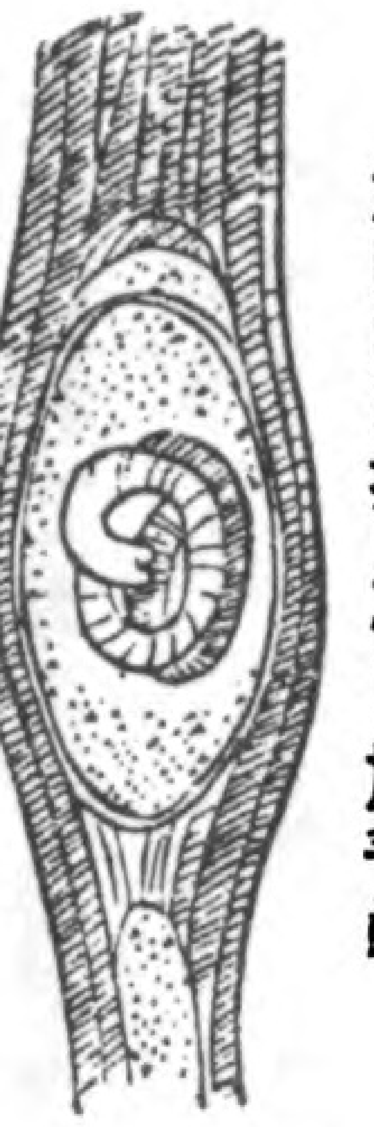
（エルネル氏衛生化學書による）

絛蟲は豚肉に多い、豚は糞便や其他の不潔物を食するからして、是等のものから自分の腸内に蟲卵を宿し、そこで發育して子蟲となり、筋肉の中や、其の他の部分に轉居して、囊胞といふ、圖の樣な豌豆大乃至蠶豆大の小胞を作つて、其の中に棲息して居る。之れを豚の『胞子』といふ。そこで吾人が此の恐るべ

き蟲卵を有つて居る肉を知らずに、生、または半熟で食するときは、直ちに吾人の腸内で發育し、成長して條蟲となるのである。

さて條蟲が腸内に發生すると、甚麽症狀を發するかといふに、主として不正の胃腸症狀――大便が下痢つたり秘結したり、又は腹痛を起したり、食慾が進まなかつたり、頭痛がしたり、又は胃部の膨滿、つかえ、停滯、全身の衰弱等を來すのである。

其他牛肉にも間々同樣の胞子を有つて居ることがあるから、共に注意しなければならぬ。



筋肉内に棲息せる施毛蟲

（エルス、ネル氏の衞生化學書による）

旋蟲毛は專ら豚肉内に宿つて居るもので、肉類の寄生物中、最も恐るべきものである。生し不幸にして此の寄若蟲を含んだ肉を食すると忽ち腸内で繁殖し終に子蟲は腸壁を穿通して、筋肉内に至り、茲に止まつて發育し、上圖の如く旋卷をなして永く棲息をつゞけ、色んな病狀を發現する。即ち

棲息部の筋肉は、膨脹又は浮腫を生じ、甚だしき疼痛を發し、熱發を伴ひ、頑固の下痢を起し、遂に生命を奪はるゝに至る――何と恐ろしいものではないか。

然し日本には幸にして該蟲が少ない。

少ないといつて安心はできぬ、本蟲は中々死滅し難いものであるから、豚肉を食する際には充分に熱を與へ、決して半熟のものを食つてはならぬ。

其他病獸の肉を食つて、不慮の災害に罹るものが往々ある。即ち破傷風、近頃喧しいペスト、脾脫疽放線狀菌病、結核等を患ふるものがあるから、充分に注意をする必要がある。

肉類中最も食用して可なるは牛肉。其他羊肉、豚肉、鹿肉、鷄肉、馬肉等である。以下是等二三の肉類について、簡略に說明しやうと思ふ。

牛肉　は其の質最も緻密にして、營養分に富み且つ一種の香氣を有し、味また脆美にして、人口に

媚び、消化の度も比較的速である。

同じ肉でも、肉の存する部位、年齢等により、優劣ある事は前にも言つたが、牛肉は、舌及股を第一等とし、肩及中肋を二等とし、胸筋及腹筋を第三等となし、而して年齢は、三才より八才までの間が最も良好である。年を老つたものは凡て、肉が強靱い。

豚肉　は一般に多量の脂肪を含有して居るのを以て、特徴として居る。牛肉より脂肪が多いだけ、それだけ消化が鈍い。けれども、消化の良否を論ぜず、身體を強壯ならなければならぬ場合には、這麼脂肪の多い肉を吾人は賞揚するのである。故に營養不良の人や、病後衰弱の甚だしい人には、適當の食餌といはねばならぬ。

本品には前にも説いた如く、往々寄生蟲を有つて居るのがあるから、攝取する際には必ず熟煮る事を忘れてはならぬ。條蟲の胞子も、旋毛蟲も共に、華氏の百五十度以上の温熱に遭へば、輙く死滅するものである。

馬肉　といへば、何となく下品な、いやな感じが起る――處が、滋養の効は決して他のものに讓る所がないのである。唯牛肉のやうに、肉纖維の間に緻密に脂肪を混じて居らぬから、從つて風味も劣り加之、牛肉のやうな香氣がないから、現今は唯僅かに、下層社會の食膳に上るばかりで、汎く食用には供せられないのである。

一體馬は食用よりは實用で、騎乘、または運輸の便に使役せられるのが主であるから、肥えた馬は容易に屠られない。屠つて金にするよりか活かして使つた方が利益になるからであらう。殺されるやうな馬は、多くは老軀用を爲さゞるものか、若しくは病に罹つて使役に堪へないものかであるから、這麼關係から馬肉は比較的滋養分があるにも拘らず、人に嫌厭せられる所以であらうと思ふ

鷄肉　鳥類の肉で最もよく食用されるのは、家鷄の肉である。家鷄には日本產のものと、外國產の

ものと、雑種のものとあつて、其の種類非常に多く從つて營養上の價値にも大なる等差はあるが、要するに上掲の表について見るが如く、獸肉と大なる差別がないのである。一般に肉の纖維が細少で質が緻密で、淡泊な味を有つて居て、消化し易く、營養品としては上乘のものである。然し近來この家鷄の種族にも、人間と同一の結核病を有して居るものがあるといふ、報告があつたやうだから大に注意しなければならぬ。

小兒は可愛くないか

ドクトル メヂチーネ 鈴木清義



誰でも自分の小兒の可愛くないと云ふものは一人もあるまい、可愛ければこそ自分の扮裝などには少しも關はないのみならず、設ひ他家等に於て菓子等を貰つても、自分は之を口にせずして持ち歸り而して可愛子女に與へるのである、斯樣な事は其子女が可愛からであるが、若しもその子女を慈しまなければ、迚もするものでは無い、之が即ち親子の情である。されど其父母たる者の可愛が

りやうが我見地よりしては、可愛くないのかとも思はる〻のがある。

その事は予といへども決して認めないでは無い、親としては元より無かるべからざる事で、尚ほ此の上にも慈愛を加へてやらねばならぬのであるが、予が今茲に云ふ所のものは、大いに其れに似て非なるもので、即ち予は予の専門より見たる所に依つて判斷を下すのである、即ち醫師の側から見る可愛がりと、又素人の側より見たる可愛がりやうとは大層趣を異にして居る點がある。例へば、素人の可愛がり方から行くと、假りに子女が泣けば、直ちに乳を哺ませるとか、或は菓子の類などを與へて其啼を止めやうとするのであるが、之を醫師の側から見れば、少しも其小兒を可愛がるのでは無くして、寧ろ其小兒の身體に危害を加ふるものと斷定するのである。

何故なれば、彼の嬰兒の如きは、身體の發育殊に消化器即ち腸や胃の腑と云ふもの〻發育は、幼稚と云ふよりは寧ろ不完全であるにも拘はらず、その啼くたびに乳房を哺ませるやうな事を爲るから、如何に液體の乳汁でも、之を消化するには多少の時間を要するのである。然るに其れも關はずに啼いたからとて、その度に乳房を哺ませますから、自然消化器の働きに影響を及ぼして、往々乳を吐くことがある第一此く其度に乳を與へますると、啻に其れが消化しないばかりでは無く、胃の腑の中で酸化するから從つて消化器を損することは尠なからずして、長じて瘤飲持など云ふ消化器病に侵され易いのである。是も子女の親から見たならば、慈愛を加へ不愍を増して勞はるのであらうけれども、醫師の側から見ては可愛がるとは云はない、同じ乳を與ふるにも、嬰兒の年齡や健康狀態等に由りて、凡そ一晝夜に何回、一回の量は凡そ何程、前後の時間は約若干と云ふやうに注意するので、決して啼く度毎に與へよとは敎へない、之は畢竟その嬰兒を健全に發育せしめたい、如何か無病息災に生立せたいと云ふ爲にする尚ほ重ねて云へば眞に其嬰兒を可愛く思ふからで

ある、然るに素人の方では、啼くからと云つて、委細關はず無暗に乳を與へる、之が眞にその嬰兒を可愛がる所の方法であらうか、その嬰兒の身體を損傷しても可愛がるのであるとは、此の上の不條理はあるまいと思ふ、

一體嬰兒と云ふものは比較的よく啼くものであるが、その啼く中にも、或は飢を感じて乳を求むるが爲に啼くのもあり、或は衣服の厚薄によりて寒暖の凌ぎ難い爲に啼くもあらう、或は衣帶を緊しく縛つた爲に窮屈で啼くもあらう、又繈褓などの濕つた爲に、心持が惡くて啼くもあらう、或は小虫等に螫されて啼くもあらう、此くの如く、啼くにも千差萬別あるのみならず、時としては吾人が放吟するやうに是と云つて別に苦樂の感も無くして啼く時もあるのであるけれども、世の多くの母たり又は乳母たり保姆たる者等は、此の嬰兒の啼聲と云ふものを研究して居ないから、毎時も同じやうに聞誤つて、直ちに乳を與へるのであるが、是等は少しく平素注意を拂ひさへすれば分かるのであるから、今より母たり乳母たり、又は保姆たるべき女子は、必ず之が研究を怠たつてはならぬ、併し外面の傷は誰の目にも直ぐ見えるのであるが、内部の疾患に至りては中々分かるものでは無い、依つて左樣いふ時には、成るべく速かに專門家の處へ馳せつけるが宜い、同じ病人でも殊に此の小兒の疾病は、大人と違つて特殊の技倆を要するのであるから、此の事も亦忘れてはならぬ、

既に誕生の前後より、稍固形物即ち菓子または果實その他の飮食物を執るやうになると、是また前の乳のやうに、泣く兒と地頭には勝たれぬと云ふ姑息の愛と、尙ほ一は親それ自身が所要を使ずるに不利なる所より、例へば、裁縫を爲しつゝあるに際りて若しも小兒の啼く時は、縱ひ食慾幾ばくならざるも直ちに菓實等を與へて之を騙し宥むるが如きである是も敢て惡いとは云はないが、餘り好いとも云ひ切れぬ、まづその害は前段嬰兒の部と大同小異であると云ふものは、嬰兒の運動不足なるに比すれば、幼

兒は多少運動の點が勝つて居るからである、

けれども茲に一の憂ふべきことは、幼兒と云ふものは兎角物に慣れ易き性質のものであつて、例へば一たび啼きたるが爲に菓實等を與へらるゝ時は、謂ゆる其味を占むるが故に、菓實等を得んが爲には殊更に啼泣し、若し與へられざる時は、一層聲を勵まして迫ることである、是に依つて見る時は、幼兒も中々侮るべからざる猾智を逞うするものである、而も之を吟味しないで無暗に其等を與ふるが、果して之を慈愛に富める親達の仕打と云ふことが出來やうか、醫師たる者が常に間食の弊害を説くのは之が爲である、此の間食の弊は單に幼兒のみでは無い、大人にも頗る此の弊のあるのは憂ふべき事である、

此の間食の事に就ては、是までの歸朝者および專門家は斷じて間食すべからずと說き、且つ之が類例として歐米の家庭を引證するものがある、けれども予が見る所に依れば、從來の諸說は少しく西洋に心醉し過ぎては居るまいかと考へる、何んとなれば、西洋と我國では、生活の程度は勿論、その狀態より物質に至るまで非常に相違がある、例へば、我國の食料品は總て淡泊であるが、西洋の物は一般に濃厚で謂ゆる腹持が良いものばかりであるから從つて間食もしない、又さういふ習慣になつて了つたのであるけれども、我國では今尙ほ一寸人が訪問しても茶菓子を出すと云ふ習慣になつて居るから、中々之は一朝一夕に癈すると云ふことは困難であるが、全く之を癈さないまでも、も少し之を減じたいものである、

これから追々寒さに向ふのであるが、それに就けて育兒上注意すべき事は多々あるのであるが、中に就て間食の事で云つて見れば、夏とは違つて物の腐敗する患が尠ないと共に、果實の種類も少くない、けれども尙ほ蜜柑、熟柿、林檎と云ふやうな類があつて、殊に幼兒は熟柿や蜜柑の類を好む、此も或程度までは身體の要求であるから大した害も無いが、それより以上になつては非常に害を及ぼすものであ

るにも拘はらず、往々世の父母たるものは姑息の愛に溺れて、否、幼兒が啼て威す所より、父母は害でありと知りつゝも、徒らに幼兒の求むるがまゝに是等を貪食せしめるのである、而して其結果如何と云ふに概して下痢病等を發せしむる者が尠なからぬが是等は決して幼兒を愛すると云ふ者では無い、即ち自ら幼兒を害するのである、

此くの如く父母の不注意よりして、自己の愛兒を無理に疾病に罹らしめて、その跡始末を醫師の處へ持ち込むのである、尤も醫師は人々の病氣を治療するのが天職ではあるが、斯樣に無理に拵へた病人を持ち込まれては餘り有難くないのである、一體醫師は人々の病苦を除き去ることが天職であることは前陳の如くであるが、或一部の人の言ふやうに、醫師と云ふものは、人の憂を喜んで多くの人の病に罹ることを希ふものでは無い、何うか人々が病氣に罹らないやう、さうするには平常如何に注意し、又は如何なる設備を施さねばならぬかと云ふやうな事を世人に指導するのが天職で、決して病人を取扱ふのみが目的では無い、病人を診療するのは、例へば、機關室に於ける機關が損傷した部分を修繕するやうなものである、己に修繕したものは疵物である、決して完全なるものでは無い、

以上は重に育兒上の食育に對する一斑を説明したのであるが、尙ほいさゝか體育上の事に就て話をして見れば、昨今のやうに冷氣が增して來ると、兒童に限らず大人も左樣であるが、殊に兒童の皮膚は柔軟であるから、如何に身體の發育力が旺盛であつても、兎角感冒等に侵され易いのがある、之に就て極端から極端を云つて見れば、中流以上の家庭では、若しも薄着をさせて風でも引いてはならぬと云ふので、綿入を重ね、襟卷を纏ひ、尙ほ其上に肩掛などを被ふて遣る、けれども之は甚だ宜くない、元より薄弱なる皮膚を尙ほ一層薄弱に導くから、此くの如き扮裝をした幼兒は、少し寒冷の外氣に觸れると直ちに風を引く、また中流以下になると、諺に小供は

風の子など〻云ふ事を偏信して、碌々綿も入らない長の短い衣服を著せて、殆ど秋の初めに風を引込んでから、翌年の春暖になるまで咳嗽の仕續けと云ふものがある、兩者は孰れも極端から極端に走つて居るので、謂ゆる過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しと云ふに能く當箝つて居る、之は大いに父母たる者が注意を拂ふべき價値ある問題と云はねばならぬ、

家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

第六　おぼえ

凡そ世の中に困ることは澤山ありますが、その中でも物おぼえの惡いのは最も困ることの一つでありませう。幼い時の賢愚は大抵物おぼえの良否で極るほどのことであります。家庭の事を取り扱ふにおぼえの良いといふことの必要なるはいふまでもないことでありますが、一家の主婦としては、他の家族の人々よりも一層その家の事項に就いての記憶が必要であります、夫は外に出ていろ〳〵自分の職務に盡しますから、とても家のことに就いて一々悉しくおぼえて居ることは出來ません。これはどうしても細君の務として正しく確りと記憶して居てそれ〳〵の所置をするやうにせねばなりません。昔から東洋では女が一家の祭祀のことを掌る風がありますが、これはつまり婦人が綿密で祭祀の年月日は勿論その儀式のことなど事細かにおぼえて居るに適するからおこつたことでありませう。すべて婦人は、男子よりも記憶力の勝つて居る傾がありまして此の事は婦人の精神の特色となつて居るほどであります。昔日本の歴史が絶えてしまつた時に稗田阿禮といふ人がよく覺えて居て諳誦した爲めに古事紀が傳つたと申しますが、その阿禮といふ人は多分婦人であつたらうといふことであります、心理上から考へても阿禮は婦人であつたらうとおもはれます、かやうに婦人は研きさへすれば男子に勝るほどの記憶力を發揮することが出來ますから、之を充分家族に應用して立派な家

庭を作るやうになりたいものです。先づ第一に一家の主婦はその家の年中行事を記憶せねばなりませんこれは大體極つて居ることでありますから日記帳の始に記しておくか、又は自分の居間の適宜の所に記しておき昔からの仕來りを妄りにやぶらぬやうにせねばなりません。年中行事は其の家々によつて違ひませうが、父母祖父母その外の家族の誕生日とか忌日とかいふ時に行ふ祝儀不祝儀などはその重なるものであります。是等は主婦たる人がよくおぼえて居てそれ〴〵の所置を執らねばなりません。

第二には一月とか一週間とか適宜に未來の豫定表を作つておいてよく之をおぼえ日々の行事を成るべくその豫定通りに行はねばなりません。何等の豫定もなく考案もなしにたゞ無意味にその日〳〵を送るのは動物の如き生活であつて決して美はしい家庭に於てなす可きことではありません。毎晩寢る前にはその日の出來事をくりかへして考へ之を記憶から呼びかへして日記に記入し偖て後に翌日の豫定を考へ朝おきたらその通りにちやん〳〵行つてゆくやうにすれば日々の生活に面白味が出來意味が出來てどんなに勵みになるでせう？。

第三には日々臨時に起つた事、例へば人が尋ねて來てどういふ事を頼んでいつたとか、どういふ約束をしたとか、主人にどういふ言傳をしたとかすべて時々刻々に起つて來ることをよくおぼえて居てもれなくそれ〳〵の處分をすることです。殊に親戚朋友等の交際に關し手紙を出すべき處へは速に出し、尋ねてゆく可き所には猶豫せずに訪問し、物をおくるとか人を遣はすとか、よくその時と塲合とを記憶し決してつい忘れて居りましてーなどの言ひ譯をせぬやうに生帳面にそれ〳〵の務を盡さねばなりません婦人の記憶は書物を讀んで地名や人名を覺えて居るのを以て滿足すべきではない。右に擧げたやうな日〳〵の生活に缺く可らざる活記憶でなくてはなりません。ぼんやりした細君が良人の留守に大切な言傳を受けながらごた〳〵紛れに忘れて仕舞ひ良人に少か

らぬ不利益不面目を與へる類は決して少くないことであります。それゆゑ主婦たるものは常に記憶力の増進に努めねばなりません。

記憶というてもたゞぼんやりと前のことをおもひ出したばかりでは學問上にいふ所の眞の記憶ではありません。すべて人は雨のそぼふるつれ〴〵なる日などにひとり机に向つて居れば陸續といろ〳〵のことが心に浮んで來るものでありますが、是等は前に述べた思ひ付きの働で眞の記憶作用ではありません記憶といふものはちやんと何時（時間）何處（空間）で自分で經驗したことであるといふことが分らねばなりません。「何時か何處かで見たやうである」などといふのは殆んど記憶としての價値はない。それゆゑ大事なことは時と處と事項とを堅く結び付けてしつかり心に印しておかねばなりません。すべて記憶の働には把住というて見聞したことを心に取り入れることと復現というてその把住したことを再び心におもひ出すことを再認というてこれは何時何處で經驗したことであると確かに認めることゝの三つの別があります。その中でも最後の働が一ばん大切であつて前の二つがあつても再認がなければ眞の記憶でないことは前に述べたとほりであります。

偖てかやうなしつかりした記憶力を養ふにはどうしたらよいかといふに第一には身體を健康にしていつも心がすが〳〵しくあるやうにせねばなりません又たとひ全體が健康でも目とか耳とかすべて大切なる感覺機關がわるいと大そう記憶を害せられます。第二には前に述べたやうに聯合の法則を應用して何かよく知つて居る事項を覺えんとする事項を結び付けておくことです。それと共に第三に大切なることは注意であります。何でもこれは是非覺えねばならぬといふやうなことには一心を込めて其の事を見聞するがよい。第四には時の許す限りくりかへすことが必要であります。併しいくらくりかへしても充分の注意なしにする勉強は何にもなりませぬ。第五には覺えることをよく整頓して次第順序を立てゝおく

ことです。大抵のことはその次第順序をたどれば考へ出されるものであります。

以上の外にめい〳〵よく氣を注けねばならぬのは人には物おぼえの流儀のあることです。例へば(一)目で見たことをよくおぼえる人と(二)耳で聞いたことをよく覺える人と(三)手足を動かし皮膚に觸れたことをよく覺える人と(四)是等のことの混合して居る人とあります。大抵の人は、目で見たことを最もよく覺えるものでありますが時としては、さうでない場合があります。それゆゑ各自に己れの流儀は何であるかをよく考へその一ばん覺え易い感覺



を用ふるやうにせねばなりません。併し誰にも通じて必要なことは成るべく多くの感覺を用ひることであります。即ち見ると光に觸れて試るとか聞くと共に實行して試るとかいふやうに、たゞ一つの感覺を働かしたまゝにせずに他と關係せしめておけば大そう記憶の助となります。昔の學者が「物事を覺えるには實行するのが第一である」と申しましたが實にその通りです。實行するには目も手も足も、時としては耳も口もいろ〳〵使ひますから最も確りと覺えられるわけであります。

又記憶は年齡と最も深い關係がありましてあまり

年が幼くても、又あまり年が長けても、記憶は充分でありませぬ。誰でも五六歳までのことは忘れ易くして生涯に渉つて殘るものは極く僅であります。又三四十歳から先になると記憶は餘程衰へ五六十歳から上になると青年の頃のことはよくおぼえて居て度々おもひ出すけれども最近に出逢つたことは直ぐに忘れて仕舞ふやうになります。それゆゑ青年壯年に屬する一家の主人主婦たる人々は老人が物忘れをしたからというて、決して笑つたりあなどつたりしてはなりませぬ。自分も年が寄れば必ずその通りになるのであります。そこで又自分自らも子供も、十歳以上二十四五歳までの間に、必要なる事項をよくおぼえて生涯役に立つやうにする覺悟がなくてはなりませぬ人は年を取つたから學問が出來ぬとか物が習へぬとかいふことはない。昔の人は五十六十になつて學問を始めたこともあるが、それは非常な人が非常に勉强して成功した例であつて、通常はやはり學齡時代から青年及び壯年の初頃までに一通りの基礎

を作らねばなりません。さうしておけば後に至つて何か特別のことを初めても成功し易いものであります。

記憶といふことは啻に過去のことをおぼえて居るばかりでなく現在の働も未來の仕事も皆記憶の助を假らぬものはありません。例へば吾々が今日いろいろの職業を執ることの出來るのは、前に經驗したり敎育を受けたりしたことをおぼえて居て、それに從つてゆくからであります。若し人に記憶がなければ何事も新奇であるから、事をする度に珍らしく新しくして進歩といふことはないのであります。然るに記憶力のある爲めに、過去何十年の間の經驗はすつかり自分の心に留つて、自分の用に供することが出來、之に基いて更に新しい經驗を加へてゆきますから、次第〳〵に進むことが出來るのであります。

未來に自分の爲る事も全く過去の記憶に制限せられて居るわけであります。即ち今まで讀書ばかりして來た壯年以上の人は未來に何かするにしても、ど

うしても學問に縁故のあることでなければ成功が覺束ないのであります。たとひ多くの中には今までの經驗をすてゝ新に異なつた事業を創めて成功する人もありますけれども、それは稀なることで、而もその仕事には矢張以前の記憶が大そう役立つて居るのであります。

その外記憶は人の生涯に於て頗る大切な地位を占めて居りまして、吾々の後半生の幸不幸は殆んど前半生に爲たことの記憶如何によることであります。例へば壯年の頃人を苦めたり動物を虐げたりすべて道德に背いたわるい事をしたものは、その時は血氣盛のために功名心や戀愛やいろ／＼のことの爲めに心がまぎれて何とも思つて居らぬのでありますが老いての後は身心ともに弱つて現在のことよりも過去のことを多く思ふやうになるものでありますから、前の惡事が盛に胸に浮んで來て遂には怨靈に取り付かれるとか幽靈が出るとかいふやうな怪事さへ生ずるに至るのであります。之と反對に前半生によい事をしておけば老いての後におもひ出す事は皆心地よいことばかりで心中はいつも春のやうにのどかに幸福の生涯をおくることが出來るのであります、之を見ても人は盛の頃に美事をのみなすべきであります。

婦人の衛生

疾病に就いての注意

楠田病院長　楠田謙藏

疾病があれば、必ず醫師の診療を乞はなければならぬことは云ふまでも無いのである、けれども普通の疾病では、何れの婦人でも爭うて治療を乞ふものであるが、時として某局部に關する疾患になると、如何も醫士の診療を厭ふの風があつて、爲に重體に陷らしめて取り返しの附かないやうな事をして、遂には掛け換へもない生命を殞すに至ることがある、是は實に思慮なき仕打と云はねばならぬ。

元來醫師と云ふものは、唯患者の不幸を救ひたいと思ふの外、決して他に念慮のないものであるから顏でも手でも又は足でも少しも差別は無いのである而かのみならず、婦人病の診斷と治療とには特別の智識と經驗とを要するものなれば、成るべく專門の醫師の診療を受くるが宜い、而して一たび自ら信じて一醫士に治療を托した以上は、苟めにも其指圖に背くやうな事があつてはならぬ、たとひ何如なる名醫で熱心に治療を施しても、もし患者の方で服藥やその他の所置を怠り、又は不養生をするやうな事があつては、決して十分の効驗を期することは出來ないのである。

よく世間では、當るも八卦當らぬも八卦と云ふやうに、是等に重きを置かないでも、兎角病氣が捗々しく快方に向はないと、常にさういう事には餘り耳を傾けない人でも、輙もすると心を動かし氣迷を起して、彼所の卜筮此所の御鬮と云ふやうなものを信じて、輕々しく醫士を取り換へ、甚だしきは服藥を廢して、單に加持や祈禱等に賴つて病氣を癒さうと試みる者がある、實に無謀の甚しきものと云はねばならぬ、例へば、單に加持や禁厭のみで全快を望むのは、俚諺の飲酒家が酒樽を見て醉を買はうとするのと一般、實に無理なる注文と云はねばならぬ。

予は絕對的に加持や祈禱等を排斥するものでは無い、けれども飲食せずして飽腹を期待するやうな行爲は絕對に拒むものである、そは云ふまでも無く生命を粗略にするからである、是等とは少しく違ふが病症の如何に拘はらず灸をすえたり又は按腹揉療治と云ふ事をするが、斯の灸や按摩は誘導法と云つて停滯して居る血液の循環を助くる所の療法で、至極結構の事ではあるが、之も病症に依るもので如何なる病症でも是等の療法が効驗あると云ふ譯には行かない、或病症に依りては却つて害があるのである、けれども一般に何んの病氣にでも効くやうに思つて行るのは、實に危險至極であるから、必ず一應醫士に問ひ訂してから行ふが宜い。

當時は婦人一切の疾病を治するとか、又は何々に特効あるものと稱し、新聞紙上等に誇大の廣告などがしてある賣薬は随分多いけれども、是等は悉く信を置き難いのである、何故なれば、元來賣薬と云ふものを其筋で認可するのは、必ずしも特効があると云ふのでは無くして、毒にもならねば薬にもならぬ即ち無効無害と云ふことを標準にして許可するものであるから是を以ても効驗の無いと云ふことは知らるゝのである。



予は醫が専門であるから、特更に右のやうに賣薬を非難するのであらうと思はるゝ方が無いとも限らぬが、醫師はもと／＼病を診斷して、之が治療の方法を講ずるもので、その治療の手段として薬や膏薬を用うるけれども、決して薬や膏薬を販賣するものでは無い、現今は未だ我國に於て醫薬の分業と云ふものが無いから、止むを得ず薬を調合するので決して其は醫師本來の目的では無い、依つて病の種類やその時々の模様によつて薬も亦異はねばならぬのであるから、何時も變はらない所の賣薬では効を奏せぬのみならず、それで治

すべき筈のものでも無い、それに唯婦人の病と云ふばかりでは、果して如何なる病氣であるかと云ふ事が分るものでも無く、又その容體をも究めないで無暗に服藥したからとて、迚も効驗のあらう筈のあるものでは無い。

是は當節のやうに寒い時には無いが、往々夏になると、海水浴や温泉浴に行かるゝ者が澤山あるが、是等も病症によりては大層効のあるものなれども、又病症によりては頗る害のあるものである、且つ熱海と云ひ伊香保若くは有馬、箱根等と云つても、皆それ〴〵湯の成分が異ふから、何の病にも効くと云ふ譯には行かないのである、依つて夫等へ行くにしても、必ず醫師に相談して其指圖を受けるが宜い。

婦人科の病を治療するには、往々大手術を施さねばならぬ事がある、昔時は手術の方法が拙なかつたのと、黴菌の侵入を防ぐことゝを知らなかつた爲に隨分婦人の生命を危からしめたのである、けれども最早醫術進歩の今日に於ては、通常の場合には概ね

生命に危險を來たす虞れは無いのであければ、萬一不幸にして、斯る手術を要する病に罹りたるときは速に心を決して治療を受けらるゝが宜い、若しも躊躇して時期が遲れると、折角治る病氣でも、手術が益困難となるばかりでは無い、時としては生命を危殆に陷らしむる事が少なくないのである。

若しも大なる手術を施こすに方りて、彼の麻醉藥を用うることがある、非常に之を嫌ふ人があるが、是は心を落付けて吸入さへすれば、甚だ輙く之に應ずる事が出來るので、如何なる大手術でも、殆んど知らぬ間に施され了りて、最早目の覺めたる時分には、安らかに寢臺の上に横はりて、自己の生命をさへ奪はるべき重き病は除き去らるゝのである、是の故に麻醉藥の吸入を醫師より命ぜられたる時は、少しも恐れ氣遣はずに之を用うるが宜い、さもないと醫師も手術を施し惡いのである。何故かと云ふに、患者が痛さを豫想して筋肉を硬ばらせ、又刀や手の觸るゝ毎に身體を動搖して、不便を感ぜしむるから

である、去れば患者は、寧ろ一時麻醉の中に手術を施して貰へば、眼前に痛苦を忍んで居るよりは何れ程安全であるが知れぬのである、尙ほ此の外に掲ぐべき事は澤山あるけれども、專門に屬するから筆を擱くことゝする。

庖厨と化學

農學士　佐藤源藏

東洋でも西洋でも、何處へ行きても此の庖厨の設けの無い家は一軒も無い、ソコデ此の庖厨で一番澤山使ふものは何であるかと云ふに水である、されば庖厨を掌る所の主婦たる者、縱ひ自ら手を下さないまでも、必ず之に關する知識を有つて居らねばならぬのである。

東京その他水道を布設して有る所では、ツマリ水を買つて呑むのであるから、從つてさう粗末にはしませぬが、堀井や筧などから自由に水を得る者は、兎角之を粗末にする傾きがある、是は甚だ不注意の事である、如何に自由に得らるゝからとて、總て物を節すると云ふ事は、單に水ばかりで無く、一家を整理する上に於て必要條件である。

吾人の身體でも、その主成分の三分の二までは水分である、此くまで大切なる水の十分の一を失へば直ちに病氣となり、若し十分の二を失へば生命を殞すると云ふものを、縱ひ器物を奇麗に洗ふにもせよ又は衣服等を濯ぐにもせよ、成るべく粗略にしてはならぬ。

此の水には硬水と軟水との區別があつて、その硬水と云ふのは、多くの石灰質殊に炭酸石灰質や硫酸石灰質などを含んで居るので、軟水と云ふのは其反對で、石灰質を含んで居ない水、縱ひ含んで居ても其量の少ないものを云ふのである。

庖厨で硬水を用ゐたならば如何なる結果を來たすかと云ふに、器物によりては其汚れの落ちないのがある、而して手の皮膚は甚しく粗糙るのみならず、

煮物の味までを減ずることは酷いもので、殊に茶の風味などは非常に害を蒙るのもある、彼の鐵瓶や湯沸しの内部に、俗に湯垢と稱するもの丶固着するのは、主として此の硬水中に在る石灰分が、熱のために化學的の變化を生じて沈澱するからである。故に多くの湯垢が溜る場合には、之を硬水性のものだと稱するのである。

硬水は此くの如く不都合の物であるは知れたが、之は如何とも爲ることの出來ぬものかと云ふに、さうで無い、或方法を施せば之を軟水に變ずる事が出來るのである、一體硬水中にある所の炭酸石灰と云ふものは、水中にある炭酸瓦斯の爲に溶解せられて存在して居るのであるから、硬水を熱して炭酸瓦斯を空中に放出させれば、夫れと同時に炭酸石灰は沈澱するのである、又硬水を熱する際に、少量の洗濯曹達を加へれば、是まで水中に含まれて居た炭酸石灰は、最早水には溶解しない所の炭酸石灰となりてその液中には少量の硫酸ソヂユームを殘留するのみである、是の故に、若しも食物を調理する所の水が硬性であつたならば、右の方法に依つて軟水に變ずるが宜い。

一體吾人が健康を保つには、平素如何なる物を如何程まで要するかと云ふに、蛋白質が百グラム、脂肪が三十グラム、炭水化物が四百八十グラム、是だけの食物を要するのであるから、常に庖厨を司るものは、成るべく價格が安くして滋養に富んで居るものを撰び用ゐねばならぬが此の食物も分けて見れば動物質と植物質との二種があつて、その動物質食物と云ふは凡て鳥獸の肉は勿論、卵の類も此の中に含まれるのである、植物質の食物とは、五穀蔬菜の類を總稱するのである。

まづ動物質の食物中で、何が一番多く吾人の庖厨に上るかと云ふに、本邦人の嗜好に適したる物では卵が最も一位を占めて居る、偖その卵は如何なる成分から出來て居るかと云ふに、卵殼、蛋白、蛋黄の三部から出來て居て、卵殼の内面には薄皮と稱ふる

二枚の膜があつて蛋白を包んで居る、蛋白は云ふまでも無く半球狀のもので、殆んど無色透明のものであるが、之を熱する時は全く白色不透明の固形體に變じてしまふ、之は蛋白質が凝つて、初め可溶解の有樣から不溶解の有樣に變じたのである。

その蛋白の內に又薄膜があつて蛋黃を包んで居る、此の蛋黃を包んで居る薄膜と、彼の蛋白を包んで居る薄膜との間には二筋の紐があつて、互に位置を保つやうに爲つて居る、であるから、如何に轉輾して卵殼の位置を變じても、常に蛋黃は黃色で上部に在る、此の上部の所に白色の點がある、此の白點から孵化を初むるのである、それ故に之が發育しかけたのに用ゐぬが宜い



卵を煮るのには水から靜かに煮上げて、卵の內部と外部とが一樣に熱せらるゝやうに注意すべきは勿論、蛋白が餘り凝まりすぎぬ中に蛋黃も煮えるやうにせねばならぬ、凡て食物と云ふものは、餘り煮過ぎると消化の惡くなるものなれば、卵も亦餘り煮えすぎぬやうに注意を要するのである。

卵を貯へて置くには種々の方法がある、けれども近時盛んに米國に行はる

、所の、石灰水の中に浸けて置くのが一番宜い、さすれば一年以上も保存に堪ゆるのみならず、決して腐敗の患ひなく、且つ調理に際しても全く新鮮のものと毫も異りは無いのである、而してその石灰水の調合は、生石灰二百四十匁に清水五升の割合に溶きて、一夜之を放置したる後卵を浸けるのである。

次に肉類の調理法は非常に消化に關係するもので生の牛肉が百四十餘の力で消化する時に、煮沸した牛肉は百の割合で消化するのみである、凡て肉類は右の如く生の方が消化し易いのであるが、之を調理すると、液汁が滲出したり、又は蛋白質が凝る爲に容積や重量を減ずる、けれども香氣を増し、温度を加へ、且つ寄生蟲を殺すためには、止むを得ず煮るか燒くかせねばならぬのである。

植物質食物の中では豆腐が第一で、大澤博士の研究に依れば、豆腐の蛋白質の消化率は、實に九十六パーセントであると云はれて、此く豆腐は滋養に富み、且つ廉價のものであるから、屢々之を取りて身體を營養するが宜い。

それに付けても水は缺くべからざる物であるから十分注意に注意を加へて貰ひたい。

家庭の所感

文學士　川田鐵彌

一口に家庭と云つても、それは中々範圍の廣いもので、例へば、女子の方面から云ふときは、裁縫、洗濯、割烹を始めとして、その他兒女の教育および衛生等の事に至るまで、凡て家庭内に屬するのであるが、茲には其内より一二お話をして見やう。

まづ第一は母親の責任に就て云つて見れば、現に小學校へ通つて居る位の小供に向つて、若しも座敷に針や硝子の破片などが落ちて居たならば、之は如何に爲るやと尋ねますると、十中の八九迄は母樣に上げますと答へたが、此の一事でも、小供を養育する上に就て母親たる者の役目が大層著しいと思はれ

る。

　幾ら學校の方で骨を折つても、家庭に於ける母親たる方々が、殊に徳育の點などは深く注意して貰はなければ、迚も教育の効果は見えないのである、それで何處の小學校でも、父兄懇話會などが組織せられてあつて、その都度、何か本人に特殊の習慣は無きや、通學の途中にて遊びは爲さゞるや、又途中に於て他の兒童のために苛めらるゝ事はなきや、若しも敵手があるなれば、そは如何なる人物であるや、本人は間食を好み或は之を過すことは無きや、學校の用品を粗略に爲さゞるや、若しも復習するなれば如何なるものが主に復習されるか、家庭の教へと學校の教へとが一致を缺ぐやうな場合はなきか、平常一緒に遊ぶ所の友達は如何なる種類であるや、毎に起床および就褥の時間は一定して居るか、或は何か衛生上特に注意すべき點は無きや等と、教師が心配して父兄に尋ねるのである。

　それにも拘はらず、現今のやうに學校の一方へのみ責任を負はせて置て家庭では夫程注意を拂はず、而して良い小供を持ちたいと考へても、それは恰も木に縁て魚を求むるの類で、如何に正直で影の口を開かない者でも、必ず其迂を笑ふに相違ない、如何も今日の學校と家庭との關係を察するに、一日之を温めて十日之を冷すと云ふ古語に當嵌る傾きがありはすまいかと、實は常に心を傷めて居るが、如何か徳育の點に就ては、何處までも家庭の隅から隅までを綺麗にして、朝夕小供に手本を示されたいと望むのである、但し綺麗と云ふことは、單に室内や庭園の掃除の事ばかりでは無い、所謂圓滿靜肅なる家庭を指するである。

　第二は日本婦人と云ふ廣い問題の上から、少し註文したいのは、一體我國の婦人は、口數が少なく愼しみ深いやうに思はれて、大層奥床しいのであるが何時までも斯の貞淑な美風を保たしめたいのであるそれと同時に今少し、日々の言語や動作に表裏の無いやうに注意して貰ひたい、之は少し極端の例だが

彼の俗に所謂井戸端會議と云つて、棟割長屋に住へる婦人が多勢に集りますと、隣家同士互ひに譽め合ふと云ふことは無く、徒らに他の短所を訐くのを以て快しとして居るのを見受けるが、之は大層殘念の事と思ふ、何故と云ふに、小供と云ふものは、何事に由らず兎角大人の眞似をしたがる計りで無く、大人の爲る事は萬事善いものであると考へて、直に覺えるものであるから、大人たる者は餘程注意しなければならぬのである。

全體小供の中から注意をして程好く育てさへすれは、自然に人を羨み嫉むやうな邪慳深い性質を取除けることの出來るものである、依つて希くば左に掲ぐる唱歌を、常に家庭で謠はせながら、之を守り行はせて貰ひたい。

人のつとめ　（四拍子）

一、貴き人のおこないは　毎もかはりはないものぞ
　己が心をともとして　日ごろの敎をよくまもれ
二、言づかひやお行儀は　幼いときよりあさゆふに
　習ひおぼえて眞心を　日々の務めにあらはせよ
三、目上のかたを敬ひて　目下のものをかはゆがり
　いつも互に讓りあひ　譽合ふやうに氣をつけよ
四、人の集へるその中に　じぶん勝手のたかばなし
　耳に口あて話すなど　内所ばなしはせぬやうに
五、お客の見た時なども　すなほに優しく機嫌よく
　人の話をよくきゝて　はなしなかばに口だすな
六、敎室廊下をあるく時　靴おとたかくせぬやうに
　戸障子杯の開たても　しづかにするが作法なり
七、立ては帽を右にもち　すわれば前に手をついて
　向ふの方に目を注ぎ　れいぎ正しくおじぎせよ
八、自分で物を始末して　人のものをもたいせつに
　公園などの花や樹を　折るは賤しきおこなひぞ
九、お宮詣りをする時は　手を二ど拍て二どおがみ
　お寺參りのその時は　お香をたきてゑかうせよ
十、起居動作しとやかに　はたらく時はいさましく
　心かたちも舒やかに　愉快にたのしく日を暮せ

固より十分と云ふ譯には行かないが、まづ朝な夕

なに之を歌はしむれば、自づと小兒の心は優やかになつて來る、是は予が幾度か實驗をなし、又現に實行しつゝあるので、その効果は大いに見るべきものがあるので、等しく世に奬むるのである是は少しく世人から非難を蒙るかも知れんが、そは予が甘受する所であるが、凡そ人として成功を期しない者は恐らく一人も無からうと思ふ、何事に關はらず自己の目的を貫徹しやうとするには、如何しても主婦たる者の内助の力を藉らなければ、迚も男子一人のみにて成功は期し難いのである、予も尙だ事業の半であるが、兎に角予が教育事業をして



今日までに導いたのは、是れ全く愚妻が半世に於ける内助の力多きに居るので、決して予一人の力では無い、今や愚妻は五人の小供を抱へて居るが、一人として他人の乳に便つた事は無く、嘗て一回の芝居見物も寄席へも顏を出した事は無い、而して自分の扮裝などには一向頓着はしないで、今も尙ほ六歳から二十近い塾生五十人計りの、頭の先から足の爪先まで、例へば、着物の綻び一つでも他人には命ぜず世話を致して居る、此の塾生の世話は丁度足かけ九年になる此の九年の日月は左程長いとも云はれないが、併し

その間に、一方には校舎を建設して、既に幼稚園と小學校とを開き、追つて開くべき中學校の設備さへも完成するを得せしめたのは、これ全く予に在りては妻の賜物であると、深く自ら信じて居る。

此く云つたならば、或は餘り自分の妻を推奬しすぎるとの誹りを買ふかも知れないが、若し予に取りて斯の妻女たる者が無かつたならば、到底今日の如く、縦ひ僅少なるにもせよ、予をして我國の教育界に貢献せしむる事は出來ないのである。

併し予が妻女は、素田舎の儒家に生れたもので、別に高等女學校等の教育を受けた者では無い、生家が所謂寺小屋をしたものであるから、父母の膝下と往時の學校教育とを受けたのみであるが、前述の如く育兒、塾生の世話等より家事一切を處理するのに忙殺せられて居ても、毫も曾て不滿の色を認めたことは無い、況んや不平の聲などの洩れたことは無いのである。

是の故に、予は予の事業に向つて、邁往直進して専心一意に教育に從事することが出來るのである、若しも此間に聊かなりとも、予の身邊に後顧の憂があつたならば、到底今日までの進行を見ることは出來ないので、夙く已に斃れたかも知れない。

依つて思ふに、世間で事業の發達成功を期するのは誰人も同一である、けれども夫には、自家の立脚地たる家庭といふものが確立して居なければ不可ない、單に夫妻が同棲したからとて、家庭が確立して圓滿であるとは云はれない、所謂夫妻は異體同心と云ふやうに、夫が社會の事に奔走したならば、妻女たる者は内に在りて家政を整理して、毫も後顧の憂なからしむるやうにする、之が即ち賢妻、母と稱すべきものである。最早さうなれば、夫妻の間は十分に平和が保たれるから、從つて禍を轉じて福となす事が出來るのであれば、希くは世の主婦たる方々は深く之を心肝に銘じて、理論よりは實踐躬行を先とせらるゝやうに望むのである。

處女の心得

阿久澤外記

處女の時代と云ふものは、生氣の勃々として居るものであるけれども、尚ほ未だ意思と云ふものが十分に確立して居ない、のみならず縦ひ新らしき教育を受けたりとても、世故に關るゝ時日が淺いから、自然物事の果斷辨別などの能力が鈍くて、たゞ情的の一偏が盛んである所より、往々自ら眩まして誘惑に陷り易いのであるから、最も斯の時代は注意の上にも注意を懈つてはならぬ、今左に聊か之が梗概を列擧して肘後の符に供すること〻としやう。

イ、自己の名を知られ、或は之を高かめんとして親戚や朋友に富豪や名家があらうとも、その名を利用するやうな事をしてはならぬ、若しも左樣すると自分の話を聞く人は、やがて自分を心性の卑いものと蔑視さるゝものである。

ロ、兎角妙齡の時代には、己が心氣旺盛なるに任せて精力を過勞することのあるものだが、それは宜しく無い、何せかと云ふに、處女時代に精力を勞し過ると、如何してもその結果として早衰を招くもので、その事實は決して少なく無い。

ハ、凡そ男女を問はず、若い時分には鼻を高めたいものだが、常に自己の智識を誇り顔に喋々するのは、やがて自己の無智識を、知らず〳〵自白するのであるから、凡そ如何なる場合でも、自己の意見を發表するのは、少し控え目にするときは、大層奥床しくて、その人の品性も自づと高く見えるものである。

二、時間を浪費すると云ふことは、老若に拘はらず良くないことであるが、殊に妙齡の處女に在りては注意を要すべきことである、併しながら適度の休息はするが好い、それは時間の浪費では無いのみならず、蓋し攝生の要義である、此に一つの注意すべきことは、縦ひ何事にか手を觸つて居ても、他人が一時間爲すべき事に二時間を要しては、これ乃ち

時間の浪費であるから、成るべく節約と云ふことを忘れてはならぬのである。

ホ、處女時代には、往々神經過敏に傾くもので、從つて主我的、即ち自分の思ふこと、爲ること、行ふことの凡ては決して惡くは無いと固く信じて、毫も他の忠告を須ゐない習僻に陥るものがある、けれども之は自分から自分を社會より葬むるのであるから、決してその主我心を愛してはならぬ。

ヘ、眞に怜悧なる處女は、常に温厚なる女性であるが、若しも聊かなりとも高慢らしき振舞などがある時は、忽ち處女の美性を破壊するばかりで無く、延て精神までも腐敗せしむるものであれば、深く愼しまねばならぬ。

ト、自分より長上の者に向つては、常に畏敬の念を捌つて、假りにも輕侮の振舞や言語を發してはならぬ、且つ長上の者に、若しも失言過語があらうとも、敢て非難せぬが良い、成るべくは折を見て慇懃に告ぐるが宜い、決して其場に於て冷笑したりなどしてはならぬ、是は即ち長幼の序と謂ふものである

チ、諺にも、口は禍の門と云ふ、言一たび出づれば駟馬も及ばずと云ふ古語のあるが如く、何事に由らず、一たび口外した後は、迚も取り返しの附くものでは無い、それ故に多辯は愼しまねばならぬのであるが、去りとて饒舌るための口、自己の意見を通ずるための言語であるから、タヾ默つてばかり居ても困る、故に語るべきは語らなければならぬ、而して語る時には、餘り羞耻だり或は謹愼を裝ふたりして、細々とした聲で、口の中で語つてはならぬ、凡そ簡單明亮は頓才として賞讃せらるゝやうに、清亮にして發音正しく中聲に譚るが宜い、餘り聲が低いと、却つて所用を辨ずるに時間が掛つたり、又は時として意思の齟齬を來たす等のことが間々あるものであるから、是等は餘程注意すべきである。

リ、前項に於て饒舌の注意をしたが、されぱとて餘り輕卒に自己の眞想を顯はさうと思つて浮薄に流れてはならぬのである、隨分世間には輕躁と活潑と

を混同して居る者が尠なくないが、此の區別は大切の事である、凡そ善良なる品性は自ら之を顯はさうとしない場合に於て、特にその光輝を放つものである、併し此の呼吸は中々六ヶ敷い、けれども自己の注意に因つて之を獲ることは容易のであるが、若しも多量を得やうと焦つて、所謂八方美人主義とか云ふものに陷つては、是は如何なる人に向つても、抵抗することの出來ない薄弱の品性のものであれば、却つてその獲る所は少量に歸するのである。

ヌ、他人の意見を剽竊して自己のものとするやうな事があつてはならぬ、成るべく自己は自己の意見を表白するが宜い、若しも某人と同意見であつたならば、秘さずして其旨を發表する方が穩かな處置であると思ふ、又長上の意見は謹聽して、その內から道理を求め正邪を判別して、自己の意見を構成さるの資とするが宜い。

ル、凡て物事に出遇つた時は、判斷を急いではならぬ、須らく常に判斷力を養成して置て、或結果を非難するとか、若くば賞讃する前には、深く先づその原因を精査するが宜い、而して公平を保つことを念としなければならぬ、餘り急激に判斷を下すときは、幸にして公明正大であつても、或は誠實を缺ぐの誚りを招ぐものである。

ヲ、朋友と交るには、信に背てはならぬ、併し新たなる友には容易胸襟を披いて談せぬが宜い、而して若しも朋友が質素なるものであつたならば、物を贈るにも高價の物を避けるが宜い、何せなれば、却つて彼等をして相當なる返禮を爲さんがため、非常に心を苦しましめ、又は迷惑を感せしむるものである。

ワ、凡そ他人の爲に何事をか作したりとても、決して他人の親切を待設けてはならぬ、又單に他人の感謝を得るの目的で、自ら親切を盡してはならぬ、蓋し人の爲にするのは、やがてこれ己が爲なりと云ふ、又は陰德あれば陽報ありと謂ふことを忘れぬやうにするが宜い。

力、長上に對することは前に述べたが、たとひ自己の兄弟の意見なりとも、故なくして無暗に反對したり、又は罵詈するやうな事があつてはならぬ、古諺にも、智者にも千慮の一失、三ツ兒にも學ぶべき道あり、脊負つた小兒に道を敎はると云ふことがあるから、自己の兄弟とても、必ず學ぶべき事が無いとも限らぬのであるから、宜しく之を聽て他山の石とすべきである。凡そ交際の秘術に屬する妙味と云ふものは、最もよく家庭に於て發揮せらるゝものである、況んや兄弟は他人の如く追從をこととするものでは無いものを。

ヨ、裁縫や割烹の事を學ぶものは決して下婢たるの資格を作るものと誤解してはならぬ、のみならず又人に誇らんが爲に修むるものと思ふのは了簡違ひと云はねばならぬ、その割烹や裁縫等に堪能ならんとするのは、やがて主婦たるの資格を備ふるものと覺りて、謂ゆるお座敷藝に流れず、實務に適するやうに修得せられたいものである。

タ、若しも自己の容貌が、先天的に美麗でないからと云つても、それらの事には深く頓着苦慮するには及ばない、世の諺に、人は容姿より心立てと云ふことがある、如何に縹緻が優れて居ても、若しも心が邪しまに拗けて居ては、丁度杉や松の大木が屈曲けて居るのは、梁や棟に適しないと同じで、人としては社會より疎んぜらるゝのであるから、先づ第一に氣質を淸く高く持するのが大切で、それさへあれば、決して顏容などが平凡でも失望することは無い早晚心中の寶玉は光輝を放つのである。

レ、若しも富裕でない家に生れたとても、決して貧困を嘆息してはならぬ、古人も艱難汝を玉にすと云はれた如く、常に健全なる身體と、確乎不拔の精力とを持してさへ居れば、必ず遂には貧困に打勝つ時代に到着するものである、充分苦勞に苦勞を仕抜た上の樂みは、實に餘人の知らざる快樂を感ずるものであれば、毫しも不幸を嘆つことは無い。

尙ほ記すべき事は多々あるけれども、大凡以上の

條項を常に服膺してさへ居れば、決して衆人稠座の中で顔を赧らめるやうな事は無い。

料理及菓子製造の實驗

富田豐春

風呂吹大根

大根二本を、厚さ五分、乃至八分に輪切にして、皮をむき、釜に入れ、水を加ふる程にして、白米五勺位、白木綿の袋に入れて、共に凡二時間煠る、食鹽少量を加入すべし、◎椀に二切位盛り、味噌を掛けて客に供す、(味噌の製法二種あり)

△甲　黒胡麻を煎り、脂の出るほど擂り、赤味噌を加へ、よく擂り、裏漉して、鍋に味淋酒と白砂糖を煮たて、前の味噌を加れて煉り、味噌の冷めぬやう湯煎にかけて置くがよろし。

△乙　柚の實ばかりたゝきて、擂盆に入れ能く擂り、西京白味噌を加入して、尚擂り、鍋に味淋酒、白砂糖を入れて煎立つ、以下前と同し。

菊花香餠

俗に理料菊と稱へる花の(八百屋にて販賣す)の花瓣ばかりざつと茹で、別に米の粉一合、麥蕎粉三勺と云ふ割合にて能く煉り、一度蒸し、前記のゆでた菊の花を加へて、能く煉り、柏餠の如き形にして餡を入れて製し、菊の葉に包み、客に出す可し。

柚餠子

柚の皮をむき、極こまかく切り、それを一升、米粉八合、白砂糖一升、甘味噌五合、右品々を擂鉢にて能く擂り、適宜に竹の皮に包み(羊羹二本位)蒸籠にてふかし、箱に詰め、角につくり、凡二週間程經過して出すべし。

注意、最初柚の皮をよく擂り、次に味噌を入れて尚能く擂り　次に砂糖、米粉と順次に擂るべし。

甘酒早釀造

甘酒を早く釀すに、二種あり、甲は最も早く、乙は稍遲し。

△甲　米麴二枚を能く揉み解し、飯器に入れて、熱湯にて煉る、摺子木にて能く摺り交せ、煉加減は、そばかき或は萩の餅のめし位に、ベト〳〵に煉り、器中周圍に附着せるを飯杓子にて搔落し、山高にして蓋をなし、釜底より二寸位熱湯を入れ、細き木を二本入れ、（是は飯器の底に湯の附着せぬため）前の飯器を入れ、釜の蓋をなし、二十四時間位經過すれば出來上る、適宜に鍋に取り分け、水を增し、煮立て飲むべし、（寒生姜の粉を振掛けるがよし）

△乙　餅白米五合を、柔かき普通の飯に炊き、米麴二枚を能く揉みほごし、飯器に入れ、前記炊きたる餅米の飯を加へて、能く煉り、ベト〳〵なりたれば山高になりし、器中周圍に附着したるを、注意して能く搔落し、不潔ならざるやうにし、蓋をし、布毛か、或は綿の入りし小蒲團に包み、二時間置に騷廻し、元の如く山高となし、如上五六度もなせばそれで出來上り、以下前記と同じ。

猪肉汁（一名土佐汁）

現今の大根の皮を剝ぎ、丸乾として置く、極寒の時期、野猪の皮附の肉尤もよし、銳利の庖丁にて、毛と皮をうすくそぎとり、五分角位に切り、前記の干大根を一分位に小口より丸切にし、赤味噌汁を以て、二品共に二三時間煮るべし、椀に盛り客に供す（加役味は胡椒）

附言　土佐の國では年始客に必ず出すよし、

牡丹餅保存法

年の暮に全國各戸、祝餅をつく際、牡丹餅を吉禮として製する家が多いやうに思ふが、暫く經過と堅く成る、（堅いのが好いと云ふ人は度外）それを翌日まで、同じ風味に保たしむる製法を、左に記すべし

餅は臼二升として、普通につき、稍上搗の際、豆腐の糠を茶椀に一杯（からを先に能く摺盆にて摺潰き）を加へて極能くつき交せ、其餅を以て牡丹餅を製すれば、堅くなる事なし。

搔餅（へぎもちと稱へる地方もあり）

搔餅の製法は、澤山あり、爰に述ぶるは、燒きて

膨脹するを主とする法、餅一臼三升として普通に搗き、稍上搗の時期に、里芋の皮を剝き、三個程大根卸しにておろし、交せ合せ、尚能くつきあげ、生海鼠餅となして薄く切り貯へ、初夏の季節火鉢に切炭(櫻炭)をおこし、平らかにし、藁灰を掛けて火煙のたゝぬやう注意し、網を掛け、別に凡一斤一圓以上の煎茶を濃くして、其茶をもちの兩面へ引き、網の上へ並べ、氣永に燒くべし、醬油も上等品を一度煮て、冷し置き、燒きたる搔餅へ刷毛にて引べし罌粟の實をザット焙烙にて熬り、如上もちに醬油を引たる際、少しづゝ振掛けるもよし。

過般予が一絃琴を教へに、參洲豊橋に暫く滯在せし時、門人の某家にて、徒然のおきなひにとて、家婦が手製(普通)このかきもちを器に入れて出して呉れた、自分に燒きて折々茶媒にした事があつたが、其種類を列記せん。

▽白餅、粟餅、黍餅、此三種へ色々の物が加入してある◎青海苔◎黑胡麻◎粉山椒◎罌粟◎白胡麻◎粉唐芥子◎丁子、粉陳皮、

砂糖搔餅

餅米一臼、三升として普通につき、稍上搗の際、玉砂糖か或は天香印位の品が最もよし、(白砂糖は上品過ぎて餘り好ましからず、凡二百目位を加入して能くつき交せ、搔餅として置けば、可なり砂糖の爲膨脹するが、一層ふくれるやうにするには、燒明礬少量、或はベーキングボーダー少量(洋食料販賣店に有り)入れて搗くべし。

冷めし

何方にても家事の都合上、御飯が殘り、冷めしとなる、茶漬にして食するが通常であるが、澤山な時はたべきれず、乾飯にするがよろしいが、是も製法が悪いと、つひに腐敗して廢棄する事になるはもつたいない、予が實驗をした方法を講せん、まづ冷めしを冷水にて洗ひ、笊に揚げて水を切り、一方釜に湯をわかし、大皿を載せ、其上へ前記の洗ひたるめしを成丈平らかに、うすくのばし、二十分も經過し

たら板或は蓆に移し、日向に出し乾すべし、

焼めし

如上の冷めしを握りめしとなし、醤油のつけ焼杯にして食するのは、下等社會の家庭であるが、十七世紀時代（天保嘉永より慶應頃まで）芝居茶屋の辨當は（幕の内と云ふ）焼きむすびのめしに定まつた物で、予が青年の頃淺草猿若町、三座揃つて居る時分、芝居茶屋に止泊した事もあり、製法を實驗したが、檜の五分位な板に一寸五分位な丸形の穴があり、夫に炊きたての暖飯を詰めて、同じ形の丸き木にて上より押出す．一方には大火鉢に堅炭をおこし、恰も鰻屋の如く團扇もてバタ／＼叩きたて、灰を去りて網の上に、前記の結びめしを載せて焼目を附け、辨當箱に詰めて出す、

ワフルめし

白米壹合、牛乳三合、極柔かき粥にして、能く煉り、米粒なきやうにし、メリケン粉適宜、玉子三個を加へて能く煉り交せ、ベト／＼にしてワフル鍋にバタを引、焼切りて夫々前記の飯を入れて焼くべし、

◉皹裂、胼胝の療法

だん／＼寒くなッて木の葉が散り霜が白く地上に置くやうになると、水仕事をする人々の手足が荒れて負性の人は殊に是から痛々しい程になる、今此簡單なる豫防薬としては、ベルッ博士の調合した皮膚液ベルッ水、之は何處の薬種屋にもあるし幾何でも賣つて居るが此調劑法が極く簡單であるから左に

苛性加里一、〇グラム　グリスリン　四〇、グラム
酒精　四〇、グラム　蒸餾水　一二〇、グラム

外に香を付けたいならばベルカモット油でも山椒油でも適宜に入れて調合すればよい
此薬は荒性の婦人は勿論荒性でなくとも常に用ゆれば肌膚を濃かくし面皰雀班等を治し顔色を艶美ならしむる特効があるのです



社會上に於ける女子の地位

農學博士　横井時敬

斯の問題は隨分大きな廣い面積を有つて居るので實は何れの點から先に話したら宜いか、最も話をするには時間を要するのであるが、今日はそれが許さないから、思ひ浮ぶまゝ一二を話して見やう、

近來は大部我國の女子も以前とは違つて、社會上に於ける地位も高まつて來た、のみならず之が勢力も多少認識さるゝやうに爲つたが、實にそれは結構な事である、彼の英國の女子などは、選擧權および被選擧權を得たいと云つて、之に熱中して或は議會に向つて建議をしたり、又は請願をしたりなどするばかりでは無く、遂には之を獲んが爲に議會へ闖入すると云ふやうな活劇を演ずるのであるが、如何も是は少し考へものだ、否、過ぎたるは猶は及ばざるが如しとやら、甚だ感服が出來ない、如何か我國の女子社會には斯う云ふ風を吹かしたく無いと思ふ、同じ歐羅巴でも、獨逸の女子社會になると餘程趣が異つて、決して英國の女子のやうに輕佻で傲慢では無い、頗る社會に向つて要求する所も穩當である即ち男子より相當の待遇を拂つて貰ひたいと云ふ請求に過ぎぬのである、併し此の相當と云ふ事も程度問題で、中々之が解決は容易では無い、けれども若しも社會が相當なる待遇をしなかつたならば、之に對して要求を提出するのは、強ち無理ならぬ話と云はねばならぬ、

其は兎も角として、我國の女子を獨逸の者に比す

れば、今日社會に對つて要求する所のものは一層低いのである、從來我國に於ける女子は、或點に向つては殆んど權力は無いが、又或方面には非常な權力を有つて居たもので、遠く男子の及ばないのであるそれにも拘はらず、頻りに社會より殘忍に取扱はるゝやうに言觸すものがある、けれども虚心平氣に之を事實の上から觀察する時は、毫も虐待せらるゝ抔と云ふことはない、寧ろ或意味に於ては優遇に過ぐるの觀がある、是は決して一家の僻說では無い少しく有眼の士の等しく唱ふる所である、

然も尙ほ此の事實を認めないで、或一部の女子は相當の待遇を社會から拂つて貰ひたいと云ふので、頻りに獨立生活と云ふことを振舞し、唱へ廻はる者が少なく無いが、是は乃ち女子が社會に對して或權力を要求して、是非に之が要求の容れられん事を迫る示威運動である、が、是に就ては一考を煩はすべき事がある、それは外でも無い、女子の獨立と云ふよりは、寧ろその孤立生活は、女子それ自身は勿論男子の爲、又は社會の爲に、果して得策でありや、はた否やと云ふ問題である、

予は之に對して、直ちに得策にあらずと答ふるに躊躇しないのである、何故なれば、凡そ一家と云ふものは、夫婦相和せざれば成立するものでは無い、即ち夫婦相和して一家を成立すればこそ、此に初めて社會の幸福も產れ來たるのである、況んや天分の上から見ても、女子は男子と共に一家を成すの必要がある、最も一の家庭を形造ると、未だ之を作らざる前に比ぶれば一層の困難は免れぬものだが、去迚始終困難のみでは無い、その間には亦言ふべからざる、到底家庭を作らざる者の解すべからざる興味がある、斯の興味は獨立では味はふことは出來ぬ、のみならず、孤立生活の女子は、家庭を作れる女子以上の困難に纏繞されつゝあらねばならぬのである、

右は大躰の話であるが、尙ほ少しく立入つて見れば、その獨立、否、孤立の生活を爲す準備の第一着としては、到る處に在る下層の女子は、極めて便利

なる地位に居るもので、例へば、諸工場等に通つて働く女子だが彼等は、何が爲に工場に入るかと云ふに、畢竟社會上に於ては相當の勢力を得ることが出來ないからである、若しも社會より相當の待遇を得られたならば、何ぞ好んで工場に入らうや、決して奬めても入りはせぬ、實に止むを得ないからである、縱んばさうで無くとも、是等の中に在つて働くと云つても年月に限りがある、迚も或年月以外に働くと云ふことは出來ぬのである、



而かも日に月に是等の女子が増殖するが、是は果して喜ぶべき社會の現象であらうか、否、事實憂ふべき社會の一問題である、何んとなれば彼等多くの女子たる者は、概して女子の天職を爲すことが出來ぬからである、一體家政上の事と云ふ者は女子の仕事であつて、之を全うするには子供の時から其習慣を養成しなければならぬのである、然るに製絲、紡績、その他の

工場に入る正業者に非ざる彼等女子の多くは、常に父母の膝下に侍するの機會が少ないから、從つて其習慣を養成する事が出來ない、それ故に遂には一家を成す事が出來ぬので、不幸此の上もないのである縱ひ他日彼等の或者が家を成しても、謂ゆる取つたり遣つたりと云ふ惡習慣が浸染して居て、金錢の價値と云ふものを知らないから、無暗に浪費するの弊がある、此くの如くでは如何して家政を整理して行く事などが出來やうぞ、決して出來るものでは無い去ればこそ彼等の中には、朝に家庭を作りて夕べに之を壞つなど云ふ事は決して、珍らしからざる現象でそれと云ふも畢竟は、予が前來述べたる缺點が伴ふからである、云ふまでも無く女子たる者が成育の後家庭を形造り、且つ之を整理する事が出來ないとしては、實に國家に取りて由々しき大事であるから、斯の點は今日以後大いに注意せねばならぬ、

以上は重に下層に關する觀察であるが、中層および上層にも、近時甚だ喜ばしからざる現象が表はれて來たのである、前にも云へるが如く、女子たる者は一家の主婦となりて家庭を調理すべきは勿論、それと同時に吾子女の敎養を掌らねばならぬものである、是等の事を爲すに方りては、是非とも家に居らねばならぬのであるが、昨今は名譽を求むるのが急なるが爲、彼の會此の會と家を外に奔走するが爲に大切なる子女の敎育と云ふものが疎略、否、抛棄して顧りみない者さへ現はれて來たが、之は大いに寒心すべき事と云はねばならぬ、

元來子女の敎育と云ふものは、現時の如く敎育が盛んなると共に、主婦たる者が自ら手を下さゞる迄も、必ず之を管理すると同時に、必ず家政の事に慣るゝやうに敎養しなければならぬものである、誰やらが、敎育の基礎たるべきものは、親と自然に接するに在りと云はれしが如く、子女たる者には、始終親と自然とに接せさせねばならぬのであるが、前述の如き主婦であるとすれば、子女が親に接するの機會は實に少ないのである、尤も自然にだけは幼稚園

又は學校等に於て觸るゝ場合が多い、とは云ひながら、夫等へ通はない子女は共に是等兩者に觸接する機會が僅少なのである。

之に依つて見る時は、常に親と自然に接する所の子女は多幸多福と云はねばならぬが、苟くも斯の機會に觸るゝ事の少ない子女は不幸の極と云はねばならぬのであるから、之に付ては男女兩親ともに大いに注意を拂はれたい、殊に女親たる者は、子女の幼き時よりして、徐々に家政上に於ける習慣を養成すべき大責任あるものなれば、深くその邊に留意して貰ひたい、是等の事は第二の國民たる子女に大關係のある事であるから、重ねて注意を促がしておく、

また一方には、學校を出たばかりの女子が家庭を造ると、直ちに親を邪魔物にしたり、又は舅姑を餘計物視して、西洋の家庭は何うの斯うのと云ふのみならず、兩親や舅姑が居なかつたならば、嘸かし兩人にて樂しく平和なる家庭を形造る事が出來るやうに、豫て處女時代即ち學校に於ける修養時代に描ける家庭の怡樂を空想して居る者があるが、それは實際西洋の家庭の成立ちと云ふものを知らぬからである、即ち西洋の家庭と云ふものは、所謂夫婦本位であるが、我國の家庭は家族本位である、故に親子兄弟舅姑夫婦等が一家に同棲するのである、

然るに學校出たての女子達は、よく是等の區別を知らずして、單に一方の自分に都合の宜い所のみを覺えて空想を描き、樂しき家庭を夢みるのである、けれども家庭を形造りし後の困難は、未だ之を造らざる以前の困難に數倍するものである、その代り快樂も亦幾層倍である、中々稗史や小說で見たやうに無雜作なものでは無い、

世の諺に、姑の嫁苛りと云ふことがあつて、兎角嫁と姑とは犬と猿との如く、仲が惡く繼母は繼子を苛め、繼子は繼母を嫌ふ抔と云ふ事が、間々小學校の教科書などにも見えるやうだが、彼れは風致上甚だ宜しく無い、予は須らく删除すべきものと思ふ、故に予は一切吾家庭に於ては是等の談話すらも禁じ

てあるが、一躰以上の俚諺は傳說にして事實では無い、而かも此の傳說を繰返して屢々子女の耳に入れ、其が積り重なつて厭ふべき習僻を成し來つたのである、その習慣の嚮ふ所より、遂には嫁が姑を嫉ひ、繼母が繼子を憎むと云ふやうになるので、畢竟は傳說に謬られたものと云はねばならぬ、

西洋では克く嫁の母親が來て何呉と無く世話をなし、我國では、良人の父親が箇に斯くと差圖をするの風がある、然るに若い者は、是等を以て餘計の干涉であるかの如く思ふのである、けれども東洋でも西洋でも、成るべく親達は子女に迷惑を掛けたく無い、又世話厄介にならぬやうにしたいと云ふは人情である、のみならず自己の子女たる者には、如何か樂しき平和なる家庭を持續させたい、幸先を長へに榮えさせたいとの慈心より世話を爲し、意見をもするのである、而かも多くの若夫婦は其所を見拔くの力が無い、

そは何故であるかと云ふに、若き夫婦と云ふものは、未だ彼の長者老者の如く年所を多く經ないのであるから、從つて世路の辛酸を嘗むることが少ないのである、或者の多くは曾て一回だも之に接觸しないのである、去れば年齒の若き男女は、必らず或限度までは長者の指揮や敎導を待つが宜い、然らざれば秩序なく將規律なき家庭に呻吟せねばならぬのである、そは單に其者自身の不幸のみでは無い、社會の上より見ても此上も無き缺損である、

二十世紀に於ける婦人の覺悟

文學士　太　田　英　治

問題は大層範圍が廣いので、如何やうにも之を說く事が出來るのである、けれども予が云はんとする所のものは、決して區々の末に趨つた事を捕へて云爲する積りでは無い、即ち廣く我國の婦人に對して是まで予が多少實驗を積み、且つ聊か研究した事等を綜合して、二十世紀に於ける我國の婦人たるもの

は、如何なる覺悟を有たねばならぬか、その覺悟を爲るには如何なる手段方法があるかと云ふやうな事を述べて、聊か諸娘の參考にも供し、且つ注意を促がすのである、偖て此問題を解決するには固より珍らしくも無いが、女子と云ふものは果して如何なる者で、その天分上の能力は果して男子と同等なるものであらうか而して縦ひ今日迄の能力は、男子に比して不均等であるとしても、將來の發達も亦此の如きものであるや、否、又此の能力は如何に鍛練し修養しても、到底男子と對等して、社會上各般の事業に堪へぬものであらうか否や、と云ふ事は一應詮索するの必要がある少し堅苦しいやうだが、動物進化の理法より推考すれば、まづ今日までの婦人の能力は男子と比較して遺憾ながら不均等であると云ふ事は、爭ふべからざる事實であるが、苟も之を鍛練し修養さへすれ



ば、必ず將來に於て對等するの期がある、決して何時までも均一しないで居る筈はない、それは理の覩易き事である、例へば同じ草木でも、氣候の寒暖肥料の多寡培養の親粗等に由りて肥瘠長短が出來るのであるが、若しも初めより之を同一に世話をするか或はその伸びの惡い方を一層手入れすれば、必らず同一の寸法に育つのと少しも異ひは無い

既に對等し均一するの望があるとすれば、即ち男子と相携へて萬般の事業を遂げることも至難では無いのであるが、如何せん我國に於ける是迄の婦人には、それ〴〵の習慣や境遇等があつて、その上に國家の事情等よりして、始終女子たる者の天分上に於ける發達を遮られたのであるから、既往は逐ふべからずで據ろないが、最早現時のやうに女子教育の勃興したのを幸ひ、獨り女子ばかりでは無い、男子も此に意を注いで十分に其發達を助けて遣らねばならぬ、

此く女子も亦男子の如く、天分上の能力が均等して、共に社會上萬般の事業を遂げ得らるゝ要素があるのである、けれども古へより云ふ如く、人には能不能、即ち器用不器用と云ふものがあるから、迚も一定することは出來ない、例へば、松は直く荊は曲つて居るのを見ても分る、是の故に男は男だけの長短得失があると同時に、又女にも女だけの長短得失のあるのは云ふまでも無い、されば其短を捨てゝ長を求め、その失を去りて其得に就くと云ふことは自然の法則であるから、之に從ふものは榮え之に逆ふものは破るゝと云ふことは火を見るよりも明らかである、之に依つて見る時は、男子は快活宏大の事を經營し、女子は纎麗細小の業を負擔するに適するものであると云はねばならぬ、

且らく流行の語を假りたならば、女子本位とか云ふ事を主張する人々は、女子たるものは獨立すべきものであると云はるゝが、同じ人と云ふものを見るにも　男女に拘はらず、國家と云ふものを先として觀るのと、人と云ふ側を主として察るのでは、大い

に其間の觀方が異ふのであるが、之を天分上から觀たならば、女子は如何しても良妻賢母たるべき者である、去りながら、特殊の女子は自由に獨立することを妨げ無いのであるが、元來女子の獨立と云ふ事は人倫の變態と云はねばならぬ、男女の相合すると云ふことは固より自然の約束である、故に變態を以て常軌を律すると云ふことは出來ない、必ず一般の女子は良妻賢母を以て理想とせねばならぬ、

前にも述ぶる如く、近來女子敎育の隆昌と共に、女子の智育は進み、體育も亦之に伴うて健全に發達しつゝある事は、實に國家の爲に祝すべき現象である、それにも拘はらず、舌を爛らし喉を渇らして倫理修身の道も奬勵せらるゝのである、けれども之を維新の前、明治の初年に比ぶれば、大いに品性の卑下して居る事を常に認むるの一事である、之には種々の原因もあらうが、兎に角現今のやうな品性を陶冶しなければ、到底良妻賢母たるの資格は得られぬのである、否、授けられぬのである

是の故に若しも現時女子が品性を陶冶せられたならば、男女の關係は勿論、家庭の圓滿高尙になるのは指を屈して期せらるゝのである、手近な例が、子女の要求に迫られて、衣服調度を立派にして遣るのは結構だが、その色合の見立、模樣の繁簡を初めとして、その出來上りたる物を着せるにも、夕ゞ柔媚を專一として、品位そのものを次に置く、甚しきは品位を度外視するものさへある、是を以ても直ちに品性の高下如何を豫知することが出來る、

一體女子たる者は賢妻良母として、將又一家の主婦として、良人を助けて後顧の患なからしめ、子女を敎養して第二の己れを作り、その他家庭を調理し婢僕を監督指揮する事等が本務である、けれども單に家庭にのみ在るのを以て足れりとしてはならぬ、即ち交際場裏に立ちて、女子的の事業に從はねばならぬものである、

眼を轉ずれば、彼の日淸の役より次で日露の交戰に際りては、非常に婦人の勢力は認められたやうだ

が、未だ充分と云ふことが出來ないのみならず、早く已にその半面には忌はしき風說さへも耳を打つのである、と云ふものは、畢竟自己の信念が堅くないからである、信念の堅くないと云ふ事は、即ち品性の陋劣であると云ふことを表白するのである、西諺に、目的は手段を償ふと云ふ語があるが如く、その目的さへ貫徹成就すれば、之を以て吾能事了れりと考ふるのは、それは甚だ宜しくない、是等の理諺は決して女子が從事する範圍に適用さるべきものでは無い、國家非常の場合等に適用すべきである、

固より女子は柔順貞淑なる美德を保持すべきは勿論であるが、餘り柔順を深く考へこんで因循に陷つてはならぬ、宜しく二十世紀に處する我國の女子たる者は、須らく各自の責任天分を自覺して、內に在りては家庭の女皇となり、外に在りては能く弱を扶け孤を救ふ等の事に從つて、社會の不健全なる分子を賑恤せられ、進んでは現時我國に於ける諸般の改善すべき先馳となられん事を切望するのである、何故かと云ふに、家が齊はねば國が治まるもので無いとは古來の金言であるが、その家を齊ふるは主として女子である、又第二の國民たる女子の根本觀念を培養するものも女子である、

依つて現在および將來に於ける我國の女子たる者は、單に一家だけを整理して居る者では無い、即ち吾は常に地球上の人々を相手とし、而して日本と云ふ大きな家政を取扱つて居るのであると云ふ事を忘れてはならぬ、

清らかなる男女交際を望む

大塚楠緒子

男女交際は容易く語り得られて、容易く行はれざる一難事、血氣盛なる青年男女の交際するは、恰も淵に臨む崖の端に美しき花を摘むに似て、踏外さば忽ち深淵に墜落せん危險あるが故に、如何にせば危險弊害無らしめて實行せしめ得べきかと、世の敎育者青年男女の監督者の思ひ煩ふ所、從つて聲のみ高

うして其實の現し來らざる故ならん、如何なる方法に依つて實行せんか、此問題より第一に起り來るは必ず一定の禮義作法に依らざるべからず、と云ふ事なり其禮義作法も西洋式を其儘に取り來りては、直ちに衣食住異なる我邦の現社會には當嵌め難かるべく、即ち男女交際に付ての一新禮式を設けざるべからざるなり、其禮式の條目を新らしく設くる事も或は容易なるべきも、實行の一段となりては如何なるべき男女が各それを修得し熟練して一般の風習を作らん迄には必ず多くの歲月を要すべく、然も禮式は只形なり、末を論ぜんよりは本を論ぜよ、如かず形容を整ふるよりは先づ人間の



精神を修養するより始むべきなり、精神に依つて外見を善くする事は多くの場合有り得べきも、外見に依つて精神を善くすることは稀なりと言はざるを得ず、たとへ外見は崩れ易げに見ゆとも、精神にして動せざるものあり、寒風に凛として聳ゆる松柏の如き節操あらば、犯さんとするもの如何で恥ぢざらん先づ德を磨くべく品性を養ふべきなり、男子は概して高度の敎育を受け、獨立自衛世に立つ必要あるが故に丁年以上にも達しなば獨立心信力强固となり、一個人としての幾分の見識をも主義をも持つに至れど、女子は全く然らず、獨立自衛の氣力無きはおろか、依賴心にのみ長けて、彼の宿り木が大木の梢に寄生して、然も枝より枝に蔓りて虛榮を誇るが如く偶ま薄命なる境遇に生出でし女の世の荒波に揉れ揉るゝ痛苦の結果、自から反抗力を養ひ、意志を强うし、一個人としての獨立的根抵を固めて、隨分一種の人生觀をも持ちて、物に動せぬ氣性を作る者もあれど、其は稀にして、且つ又經驗に依つてのみ待ち得るもの、多數の人には望まれぬ所なり、而して圓滿なる家庭に惠み厚き父母の保育を受けし女子程、比例的に依賴心多く、柔順は盲從にして、只佳良なる家庭に保護さるゝが故に、過失なきに過ぎじ、尤も多くの場合は、積極的なる男子が墮落の誘導者となるに因るべけれど、誘導を甘じて受る女子も、女子としての責を免かるゝ能はず、然れば現今の社會に於て男女交際を實行せんとするには、第一に女子の敎育を進めざるべからず、女子の性格を今少しく價値あるものとなさゞるべからず、

躰育は盛に行はれ、着々成効するが如くなれど、智育德育の、至難なるに因るとは言へ、或は文字の意義にのみ走り、或は形式の作法のみに流れて、更に精神的の研究なく、修養足らぬ樣に覺ゆるこそ遺憾なれ、全國に普及せる高等女學校の敎育も其點に於ては危ぶまざるを得ず、古今集を誦し、萬國歷史を諳じ、起居動作能く其法に適ひ、嚴重なる規則に快く束縛せられて、己れてふものは無きが如くに服

從的の女性に養はれ、倫理修身の講義は最も重大なる科目として授けらるゝに相違なけれど、其卒業生にして如何程の精神的感化を受け、修養して世の弊風に誘はれざる用意を蓄へたりや、疑はざるを得ず幸に高等女學校に通ふ女學生は、一般に佳き家庭と良き保護者とを持てるが故に、過失を仕出さねど、其他の私立學校にして、高等女學校流筆法の教育を施し、然もその如く用意周到ならざるが上に、家庭と保護者に缺點ありとせんか、女學生の擯斥さるゝ故なきにあらずと思ふのみ、學問に依り教育の方法に依つて今少しく女性の品格を高め、われてふ見識をも信念をも保たしめて、獨立的精神を强うせしめざるべからず、殊に倫理修身の講義は精神的に道德を會得實行せしむる感化力を學生に與ふる責任を以てせられんことを望むなり、われは女性をして必ず宗教を信せしめよと言ふにはあらねど、述來りたる點に於ては、宗教を基礎とする學校の女學生が精神界にわたる研究をも積めばにや多少の宇宙觀をも人生觀をも有して麗はしき性格を作り、媚びず憶せず然も優しき香高き梅花の如き風姿あるを愛す、先づ女子の品性を高めざれば、男女交際は不可能の事といはざるを得ず、今少し文明的の女性ならざれば、弊害無しに男女交際を行ふ資格無しと言はざるを得ず、而して女子自ら修養せんことを務め、次に男子又それ等の女子の價値を認めて喜び迎へんことを要するなり、然るに此にわが常に疑ふ所あり、そは現今男子は女子に對して如何ある要求をなし、如何なる供給を仰ぐやといふにあり、婚を求むるに當つて甲の男子は同心一體、生涯の伴侶とし生涯已が世に處する片腕として妻君を求むると言ひ、乙はいふ妻は家庭を作るに當つて長火鉢の前に坐せしむべき必要物なり、立といはゞ立たしむべく、坐れといはゞ坐らしむべく、それに對しては飽迄も我意を張られ服從せしむべき權力を振り廻はし得、外に出てゝ他人と交際し、我を折り、膝を屈せしめ來れる鬱憤を晴らし慰むべき器なりと、女子にも又甲の如き男

子を理想とするものあり、乙の如き男子の犧牲となつて喜ぶ者あり、良妻賢母といふ言あり、其れ何れを指して言ふや、乙の如き要求に過ぎずとせば從來の女子教育にて相當なり、男子が生涯の携帶品としては或は過ぎたらん、而して男女交際を實行せしむるには、或は危險の恐なしとはいひ難き類の女性にても足るなり、若し又甲の如き男子の要求を滿たしめ得べき女子を養成せんと欲せば、前に述べしが如き今一段の女子の教育法を講ぜざるべからず、而してそれ等の理想を持てる男女が、其目的通りに結婚を爲さんとするには、男女交際によつて互に相撰ぶ方法を取らざるべからず、恐らくは父母にのみ依賴して一生の大切なる配偶者を定めん事を肯ぜじ、必ず已が理想に照し、我が氣風に叶ひたるもの、我主義に合躰し得べきものを互に自由に撰び合はん事を望むべし、然れども左程の理想を有する男女ならば隨分自由に交際することを許すとも、飽迄も潔白なる交際を續け得て、弊害は無しと言ひても可なりと信ず、然れば此の如き男女が社會に大多數を占むるに至らば、始めて男女交際完全に行はるゝに至るべきなり、

交際法に付て細かき禮式は此處にはいはねど、其禮式なるものも、男女が禮を亂さず從つて弊害を生ぜざらしめんが爲の制裁に過ぎねば、窮窟なる鑄形に嵌めて、興味なき交際に終らしめんとするにはあらざるなり、端然と相對して、恐る〳〵談話するが如きは、却て其趣意に違ふ、無禮にならざる限りは、充分相互にうちくつろぎ、如何にせば對手に愉快を與ふるやう談話し得べきか、如何にせば對手に不快の感を起さしめぬやう擧動ひ得べきかと、男は男らしく活潑に、女は女らしくものごと優しく、隨分或度までは、女子は男子をして已を慕はしく思はせ、男子は又女子をして已を懷しからしむるやうに務めて可なりと思ふ、されど其危ふき瀬戸際、其きはどき危機一髪の點まで往つたらば、直ちに反省せざるべからず、踏み止まらざるべからず、一歩た

りとも埒外へ踏み出したらんか終生消えざる汚名を流すべし、其點に至つて然もよく踏み止まりて動せず威嚴ある道德の光を以て其身を護り得るは即ち其人の品性の致す所、其人の日頃の修養の始めて現はるゝ所なるなり、

右は未婚の男女に付きて述べしなれど、一方には既婚の男女の交際を行ふこと必要なり良人は我朋友を妻君に紹介し、妻君は我が朋友を良人に紹介して、互に親睦する事を務めなば、社交上



如何なる利益と興味とを添ふることを得ん、從來の男女は概して交際し合はぬが故に、男は己が細君をのみ觀察して、女とは斯かる者と思ひ、女は又己が良人をのみ觀察して、男とは斯かる者と思ふ、紳士は一般の貴女を知らず、貴女は一般の紳士を知らず不用意ならずや、而して從來の女子の何時も男子と會して談話に窮し、羞し氣に縮まり居るは、それを以て美德となし來りたる習慣

にもよれど、智識に乏しき所以、交際に習はざる所以なり、

宜しく妻君たる者も、將來は家事育兒の暇には文藝の趣味を養ひ、讀書力を養ひ家庭以外の出來事にも耳を借し、眼を遣り、新聞に依りては、時事問題にも多少の興味を持たんと務めて、交際場に出でし時、時にとつての男子と談話すべき材料を作らざるべからざるなり、

或人に聽きぬ、歐米の女子は一男子を人に紹介せんとせらるゝや、會合の前豫め、其男子の性、質、職業經歷はおろか、其人の嗜好など迄研究なし置きて頓て會見するや巧に談話を操りて、新知己の意を得といふ、其用意綿密なる驚くべきなり、

畢竟現今の女子教育の程度と、其方法と、社會の狀態とを合せ考ふれば、未婚の男女の交際より先づ旣婚の男女交際を盛ならしめんと務むる方却て弊害少なくして、且つより多くの成効を見ん、而して將來一方には女子の教育法を改良して精神を修養し思想力に富む文明的女性の養成に務めて、未婚男女の交際を行ひ得べき資格を作らんとし、併せて女性なるものに對する要求を高めんことを男子に希ふものなり、

交際上拂ふべき注意

松田龜六

人たる者が世の中を渡つて行くには、決して單獨に暮すと云ふことは出來ない、必ず多くの人々と交際しなければならぬ、尤も仙人とか隱者とか云ふものは例外であるが、通常社會に活動するものは、是非とも多くの人々と交際をせねばならぬのである、その交際をするにも、今と違つて大昔の最も悠長なる時代に在りてすらも、急ぐこととある折に來て、長談する賓客、と云つて八百年も前に、清少納言は喞たれたことがある、況して今日のやうに、生存競爭の激しき「時は金なり」と云ふ時代に在りては、交際

をする上にも種々注意をしないと、我知らず世間の人より爪彈きを受けるやうの事がある、

依つて是等に關する、從來予が實驗上に於ける事と、間々見聞に觸れた事等を綜合して、聊か卑見を述べることゝするが、若しも諸孃に裨補することもあらば、此の上なき幸福と思ふのである

まづ第一に他と交際する場合には、成るべく相手の者を怒らせぬやうにしなければ不可ぬ、若しも避くべからざる怒に遇ふとも、自己の名譽とか又は位地に差響きの無い以上は、逆らはずして之を恕宥るが好い、若しも左もなくして激する時は、所謂仇敵を造るものであつて、他日自身はその者の爲に復讐を蒙むるやうな事に立至りて、少なからざる不利益を招くものであるから、注意をしなければならぬ、

是の故に、如何なる人に對しても、毎に罵詈的の暴言を弄するとか、或は輕侮的の態度を執るやうなことを爲してはならぬ、のみならず殊更に他を毀損しやうなどゝ云ふ了簡を起してはならぬ、と云ふは、古書にも、爾に出るものは爾に返ると云ふことがあるが如くに、假令言語の上でも、或は身振の上でも一たび他を害すれば、必ずその應報はあるもので、譬へば、毎に夜更しをすれば、遂には眼病を患ふることのあるのと一般である、

次に自身の境遇の許す限りは、必ず親切を以て、成るべく數次他人と交歡するが宜い、縱ひ交歡と云ふまでゞなくとも、談話を試むると云ふことは必要である、何せかと云ふに、屢談話を交ゆる間には、如何なる利益を獲るとが無いとも限らぬ、又自ら多額の失費を要しないで、而も他人も大いなる感動を與ふる所の親切を行ふの機會があつたならば、必ずそれは取り逃がしてはならぬ、例へば自分より目下の者に對し帽を脱ぎ懇切の言を與へ、或は多少の路を譲り、些少の物品を貸し與へ、若くば贈與したり又は見慣れぬ人、或は貧困の者に施し與ふる等の類である、是等の親切は幾回之を繰返すとも、決して自身は多大の損害を來たすの憂がなくして、而も他

人を滿足せしむる所の効果は、殆んど測り知られないのである、

凡そ男女に拘はらず、自分より長上のもの、又は少しく威嚴あるものに對しては、決して然る事は無いが、少しく已より地位の卑きものか、年輩の下なるものか、或は柔順なる者等に對すると、如何も傲慢の態度を執るものが尠なく無い、殊に女子は、先方のもの丶服裝が美くないと、之に加ふるに一種の冷嘲的態度さへも加味するのであるが、是は最も多く敵を作り、且つ世人の嫌惡を招くの因となるのである、而してそれは乃て彼等をして、自身を輕侮し冷笑し、罵詈し、嘲弄せしむるばかりで無く、甚しきに至りては、自已を危難の陷穽に墮さうと云ふやうな事をも企てしむるに至るので、實に懼るべく戒しむべきことである、

之に反して常識のある者は、毎に謙遜の態度を取りて、自から各人を自已の朋友たらしむるの効があるから、決して危害の身に及ぶやうな事は無い、然らば今より世の交際場裏に立たんとする者は、絶對的に傲慢を退けて常に謙遜の態度を取るやうにせねばならぬ、併し是も程度の問題であつて、各人に向つて皆一樣にせよと云ふのでは無い、例へば、王侯貴人や父母長上に對するのと、姉妹從僕等に對するのとは、自から尊敬の表示の仕方が異はなければならぬのである、けれども何れの場合に於ても、謙遜を守り傲慢を退くるの精神に至りては、決して變更してはならぬ、例へば、尊長の前では腰を屈め、僚友に會しては帽を脱するけれども、袖乞のものに向つては何等の敬意をも表すると云ふことは無い、而かも彼等を輕侮するのでは無い、又別に輕侮すべき理由も無いのみか、寧ろ同胞として憐むべきものである、此の憐愍の情は、人生の最も高い心緒であつて、彼等を憐むが爲に之に汚さる丶事は無い、

ソコデ尙ほ一歩を進めて、直截に懇話すれば、諸孃は必らず交際すべきものを擇ばねばならぬのであるが、その方法は如何と云ふに、固より甲に交つて

乙に交はらぬと云ふことも出來まいが、同じ交際をするに付けても、

自身より階級の低い人との爭論は成るべく、之を避くるが良い、たとひ彼等が自身に對して多少の損害を加へたとても、名譽回復の訴訟を起すとか、又は他の手段に依りて復讐を試みる抔と云ふ事はせぬが宜い、それよりも、寧ろ寛大に免して遣るが宜い、若しも左樣でないと、自身は世間から威厭家と見なされ、或は殘忍の人と誤解せらるゝからである、之に加ふるに、若し不幸にして爭論に負けるやうな事でもあると、非常に社會から面白からぬ風評を受けなければならぬからである、



併しながら、如何しても其損害を回復しなければならぬ場合には、宜しくその途を講じなければならぬが、よしんば自身が勝つたとても決して、苛酷に追求しないで、まづ相當の所で滿足するが宜い、若しも先方が極めて悲慘の境にある者であつたならば、殆んど全部を免すが宜い、さうすれば所謂世間の人の眼があるから、自身はその寛大の處置に由りて、却つて意外の利益を得るものである、例へば、自身が先方に向つて

求むべきだけの物を求めず、僅かに十分の一か乃至は百分の一だけを得て滿足したと云ふことを世人が聞けば、悉くその仁惠大度を稱讃するから、自づと自身も社會に對して肩身も廣く、又先方のものは其德に感激して、翻つて己に親切を盡すやうになるのである、

餘り下級のものと親密に仕やうとすると、却つて彼等をして輕侮の念を起さしむるもので、又若し彼等に對して、餘り嚴格に過ぎ冷淡に傾くときは、忽ち彼等をして怨恨を懷かしむるやうになるから、自身は常に此の兩極端を避けて、彼等の身分と境涯とに應じて、相當の親切と尊敬とを持して行かねばならぬ、例へば、若し自身が、餘り婢僕と親密であると、彼等は忽ち自身を同輩扱ひを爲るやうになる、之に反して、若し自身が、餘り傲慢で苛酷であるとすれば、彼等は遂に自身を恨まないまでも、必ず自身を敬しないやうに爲つて來る、ツマリ柔順に言ふ事を聞かなく爲つてしまふ、是の故に彼等に向つては、常に威嚴を示すと共に相當の愛憐を垂れるのは即ち彼等をして、自己を戴くと同時に敬慕せしむる根である事を忘れてはならぬ、

次は同輩の者に對しては、平素の言行の上に於て須らく慇懃を守り、且つ尊敬を表はさねばならぬ、例へば、先づ彼等に上位を讓りて、强て請ぜらるゝに非ざれば、決して同等の位置を占めないやうにするのである、蓋し是は自身の威嚴を失はないで、一方には爲に多くの良友を獲るの途である、一體上位を爭ふのは實に野卑の事であるから、彼等の眞意に背いて之を得やうよりも、寧ろ先方へ讓つた方が奥床しく感ぜらるゝのみならず、實は自身の價置を損じないで、却つて識者の稱讃を博する因となるのである、

自身より目上の方と云つても種々あるけれども、凡て夫等の方に對しては、相當の敬意を表せねばならぬ、即ち帽を脫し、體を屈め、膝を折り、上位を讓りて慇懃に接せなければならぬは勿論、自身が發

言する前に、よく〳〵先方の談話を聽取り、無暗に横合より談しかけぬが宜い、さうしたからとて、毫も自身に損の行くものでは無い、却つて或場合には利便を得ることがある、のみならず常に先方のものに滿足を與へるものである、

凡そ自家より財產あり、若くば地位ある人を平素の友達とせぬが良い、何せなれば、俗に謂ゆる見やう見眞似と云ふやうに、何時とは無しに先方の奢侈や華美が感染して、徒らに經費が增すばかりでなく若しもその華奢に傚はないと、忽ち先方よりして輕侮の辱を蒙るやうな事に立至るからである、

交友の居宅には時々訪問するのは誠に宜しい事であるが、餘り屢々せぬが佳い、所謂屢々すれば疎んせらるの古言に適中するからである、而して訪問するにも食事の時などに、先方へ非常の迷惑をかけるやうなことをしてはなりませぬ、

東洋でも西洋でも同じことで、相互に物品を贈答する事が行はるゝもので、是も一つの仁義で結構であるが、之に就て我國では一般に、妹を貰つたら姉を返せと云ふ諺があり、支那には、故人我に贈るに胡桃を以てす、我これに報ゆるに珠瑤を以てすなどゝ云つて、何れも小額の物を貰つても、必ず返禮には多額の物を以てすべきものであると云ふ事に定つて居るが、是は一つ改良したいと思ふ、

フランシスベーコン氏は、嘗て其子を誡めて曰はるゝやう、御身若し劣者にして、而して優者に向つて贈物を爲さんと欲する時は、決して餘り高價なる物、若くは忽ち忘却せらるゝの恐れある物を贈る勿れ、寧ろ趣味ある繪畫、織物、若くは書冊の如く、些少にして久きに堪へ、且つ日常目視し得る物品を進呈すべしと、誨へられたが、是は至極結構な事で何も貰つた物よりも返禮が少ないからとて、別にそれは惡いと云ふ制裁も無いのである、けれども殊に我國では近年、斯の贈物を誇大にするの風が流行して、折の大きいのが巾を利すやうになりましたが、是は餘り賞たものではあるまいと思ふ、

餘り虚禮に誇る所より、廻り廻つて勤めて來た菓子折の中は黴だらけで、卵子は悉く腐敗して居るなど丶云ふ奇談もあるのである、縱んば黴が生たり腐つたりして居なくとも、是等はベーコン氏の謂ゆる忽ち忘却せらるゝものであるから、同じ贈答するなれば、設令その物品は些少でも、必ず久しきに堪へて、相互に温情を永く紀念すべき物にしたら宜いと考へる、殊に彼の病氣見舞に、從來の習慣として菓子折や卵子の折などを贈るものがある、けれども病人は、既に身體に異狀があつて、醫師の診療を受け藥を呑んで、居る換言すれば不健全の身體である者に向つて、無暗に滋養にも爲らぬ物品を贈ると云ふは、抑も了簡違ひと云はねばならぬ、斯樣の時には寧ろ花卉の類でも贈るのが至當で、亦病人も欣ぶのである、チヨツト筋違ひのやうだが、是また交際の一端であるから此に附記するのである、

●色彩と感情

（菅原教造氏の談片）

女子大學生に向て色彩の表情性研究の爲め十數種の色紙の小片に答案紙を附して與へ其聯想を書かしめたるに其答の中に面白きものあり左に

赤色に對する聯想

バイロン、清盛、若い奥樣、美少年、誠、

黄色に對する聯想

高慢、虚榮、現世的の人、日黄昏、

綠色に對する聯想

改進、清涼、新生命、哲學、楊貴妃、陣太鼓、沈思、

青色に對する聯想

幽玄、不變化、男性的天國、殿樣、葬式のラツパ

紫色に對する聯想

上品、高尚、情熱の極、浦島太郎、クレオパトラ、一休、元祿時代の町家の娘

牡丹色に對する聯想

艶、下品、田舎娘、おしやれ女、淺草公園、三味線

白色に對する聯想

高天原、キリスト、神秘、清潔、むくの女、

灰色に對する聯想

僧俗、冬の空、ソクラテス、孔子、古寺にひゞく木魚の音、

黒色に對する聯想

天炎のひゞき、威力、古英雄、默考、寂寞、愁、末亡人の心

（報知）



女子と繪畫の必要

岡　不崩

圖畫の教育に就ては、隨分舊くから從事して、曾て高等女學校および中學校師範學校等に於ても教鞭を執り、又は專門の教育を施して見たから、多少種々の實驗を積み、且つ研究も重ねたので、圖畫殊に圖案の事に關しては、當局者に向つて種々の注文もある、けれども何分專門に逐はれて居るがため、未だ意見を發表して大方に訂すと云ふ機會を得ないので、甚だ殘念に思つて居りますが、早晩その機會に接するであらうと豫期して居るのであるが、それは主として專門に屬する方面であるから、茲には普通の意味を以て、一般の女子に繪畫の心得がありたいものであると云ふ事を述べて見やう、

一科目としての繪畫

現今は女子教育が盛んになつて、高等女學校などには、確然と圖畫の時間と云ふものが規定されてあるから、何れもさういふ時間に、厭でも學ねばならず、また習ふのであるから　殊更に標題の如きものを擇ぶの必要は無いやうである、所が實際に當つて之を調査し研究して見ると、實に聞くと見るとは大いに相違したる奇觀があるのである、

それは生徒自身を初めその家庭などは、たとへ學科の中に在りても、圖畫は只形式に認めて居る、平たく云へば、高等女學校を修業させるには、圖畫は厭でも描かなければ學科の點が取れない、點が取れ

なければ及第が出來ない、及第が出來なければ卒業證書が貰へない、故に據ろなく勉强すると云ふ風が多いやうに思はれる、依つて若しも圖畫が隨意科であつたならば、之を棄て他の學科を擇ぶであらうが、必須科であるからさうは行かない、此くの如き冷淡な頭を有つて居るから、從つて形式に流るゝのも無理は無い、

偶々他と異りて、之を修むる者が無いではないが是は所謂技を衒はんが爲に學ぶので、前者と五十歩百歩で、敢て撰ぶ所は無いのである、

家庭と繪畫の趣味

子女が既に此くの如くであるのみならず、多くの家庭も之に傾いて居るから、迚も圖畫の進歩はサテオキ、趣味などゝ云ふ事は語られぬのである、尤も稀には之が必要を認むるの家庭が無いでも無いが、其は十に一と云ひたいが、極端に云へば百中の二三である、實に冷淡に堪へぬ次第である、尚ほ露骨に

云へば、家庭も子女も共に、成るべくは學校に於ける圖畫の時間を減じて、否、寧ろ其時間を全廢してまでも、裁縫の時間を殖して貰ひたいと云ふ注文を懷いて居るのである

また或者は、都鄙を問はず、高等女學校が頻りに開設せられて子女の敎育を奬勵せらるゝものから、子女を有する家庭では、我も人も競うて子女を入學せしむるので、それは相互に結構である、けれども皆が皆左樣と云ふでは無いが、中には其成績の如何は其方除として、單に卒業させれば好い、その卒業と云ふことは、乃て嫁入りの準備であると自認して居る者がある、尤も是等は論外であるから、迚も是等に向つて圖畫の趣味などを望むのは愚の至りであるが、此の外にも圖畫と云ふものに對して冷淡なる實例は乏しく無い、實に現今の社會は、或一部を除くの外は、幾んど圖畫の必要を認めないと極言しても差支へないので、從つて予に此くの如き問題を提出するの止むを得ざらしめたのである、

併しながら、圖畫は予の專門であるけれども、今女子に向つて圖畫を學べと云つたからとて、決して專門的に修めよと望むのでは無い、素より望ま無い譯では無いけれども、それは本問題の範圍外であるから、且らく措き、茲には最も廣き意味に於て、



即ち少々不完全なりとも、鳥、牛、馬の類を初めとしてその他花や物の形などを、縦んば筆法に叶はなくとも又は書法に外れやうとも、それらには頓着なく、只大躰の形を描くだけの心得を有つて貰ひたいと云ふに過ぎな

いのである、

育兒上繪畫の必要

何故なれば、女子たる者は、後に母になりて、その大部分は家庭に在りて自己の子女を敎養すべき大任のあるもので、敎師となり又は會社員等となりて生涯を孤獨に送る者は殆んど稀で、謂はゞ女子の稟性上より見れば變則とも云ふべきものである、然れば此の少數者を以て一般を律する事の不條理であると云ふことは、固より論ずる迄も無い、

依つて先づ一般の女子ば、各自に一家を成さねばならぬ、一家を成せば從つて子女を敎養しなければならぬと云ふ事は、是また視易きの理であらうと思ふ、而して女子たる者は、大部分と云ふよりは、寧ろ一般に家庭に居ることが多いのであるから、それに附けても圖畫の必要を感ずるのである、殊に幼稚園時代の幼兒を家庭にて敎養するに方りては、一層此の感を深うするのである、と云ふものは、固より言語上などから知識を與へるけれども、未だ幼稚園時代のものは、十分に發音の機能や智力が發達して居ないのであるから、少し六ケ敷言語になれば受取れない、のみならず十分に記臆させる事は困難であるから、如何しても實物に依りて其智識を與へねばならぬのである、けれども其實物も、早速間に合ふものと否らざる物とがある、依つて印刷物とか或は寫眞等に依りて其缺を補はねばならぬが、例へば、牛と云ふ觀念を與へやうとするに方りて、若し近所に牛舍もなく、又は印刷物も無い時は、その母たる者は、たとひ朧ろげでも牛の身体を描きて、之れに二本の角と四本の足と、尙添ふるに一條の綱を以てすれば、直ちに幼兒の腦に印象するのである、

此くして平素幼兒を導き、尙ほ足らざる所は刷物とか、又は寫眞等を以て補へば、自己も手數が掛らず、且つ幼兒も複雜の言語を聞くよりも興味を感ずるのである、而して之は少しく地方では其設備が無いから困るが、東京などでは、一週間に一度位づゝ

動物園又は教育水族館のやうな所へ伴れて行つて、尚ほ實物に就て説明を加へれば、幼兒の喜びは云ふまでも無く、新智識を授くる點に於ても、勞少なくして効が多いのである、

一體幼兒と云ふものは、最も理解力の發達が幼稚であるから、同じ印刷物でも又は寫眞でも、少し込み入つたものは却つて分らない、それよりも簡單なもの丶方が早く腑に落るのであるから、如何しても是等の點よりしても、母たるべき婦人には斯の圖書の心得は必要である事は自覺せらる丶であらう、而して實物と對照して、漸次に新智識を授けねばならぬ事も、亦育兒上怠るべからざる責任である、

それには大人でも、常に圖書に接する機會の少ないものは、例へば、立體のものを平面に描いてあると、チヨット分り難いものである、况して智力の發達しない幼兒に分らう筈は無い、であるから寧ろ其には簡略の圖書の方が適するのである、之は決して理論では無い、予が從來屢々眼前に齎らし來れる實驗談である、

幼稚園時代より稍進みたる小學校の讀本、殊に初年級の讀本を見るに、凡て文字よりは比較的繪畫が多い、是は何が爲かと云ふに、兒童が曾て見聞に觸れたる圖畫等を掲げて、文字と實物との結合を計り或は圖畫に依りて新らしき智識を與へんが爲である此くも圖畫が兒童の教育に効力があるかと云ふ事を、或は疑ふ者もあるかも知らんが、その實例は、現に通學しつ丶ある兒童が、突然讀本の某部分を披きても、達者に其所を讀過する、之は何が爲かと云ふに、即ち兒童の眼に圖畫と云ふ標幟があるからである、その證據には、若しも某部分の圖畫を覆ふて讀書を迫りても、中々讀過に苦しむのである、是は云ふまでも無く圖畫が分らぬからである、尚ほ一種奇異に感ずるのは、未だ小學校に通學せぬ兒童でも圖畫を示す時は、固より文字の順序等は不規律であるにもせよ、稍その圖畫の説明を彷彿するものである、是に由つても、圖書と云ふものが、如何に兒童

の教育に効力の有るものであるかと云ふ事は推知せらるゝであらうと思はるゝのである、

　故に歐洲の某國などでは、我國の讀本に比すれば尚ほ一層圖畫が多いので、文字は實に僅少で、全篇圖畫を以て充たさるゝと云ふ有樣である、のみならず、巧みに圖畫を文字の間に利用して、成るべく兒童に解り易く、且つ記臆に便ならしむると同時に、印象を深からしむるやうに努めてある、此くすれば兒童は知らず〳〵の間に文字と實物とを結合して行くのに無雜作であるばかりで無く、非常に興味を以て學科を歡迎するのである、

　此く圖畫と云ふものは兒童の教育に必要であると云ふ事を知つて、今よりしては刷物か又は寫眞を蒐めて準備をしやうと心掛ける者が無いでもあるまいそれは殊勝の事である、けれども夫等には限りのあるもので、到底吾人の限りなき要求に應ずる事は出來ないのである、此の時に當りては、無論母たる者が其要求を充たして遣らねばならぬのであるが、若しも母その人に此の心得が無かつたならば、止むを得ず分り難い言語を重ねて解決を試みねばならぬのであるが、その割合に兒童を滿足せしむる事は出來ぬのである、

　右に就て珍話と云ふよりは、寧ろ適切なる例話がある、それは予の知己なる西洋人某の許に、幼稚園時代の幼兒より尋常小學の初年級位の小兒數人がある、予は常に往來するものから、當時は非常に親しくなつて、毎時も予の訪ぬるを悦び、左右に寄り集ひて對話を試むるが、予は素より會話に熟せざるが故に、常に專門の圖畫を以つてせるに、彼れ小兒等は其意を得て滿足せるのみならず、若し彼等より予に對して質疑を試むるに方りても、可憐の指頭を以て机上等に朧げなる輪廓を描くから、予も亦彼等の意を迎へて之に答ふるものから、彼等は常に嘻々として傍を離れないのであるが、是を以つて見るに、若し吾人にして圖畫さへ描ければ、縱ひ外國語を學ばずとも、決して洋行する事は困難で無いと考へる

のである、
右は母たるべき女子が、縦ひ略畫なりとも、繪畫の心得があれば、其の子女を教育し智識を與ふるに容易であると云ふ事を述べたのであるが、
若し出來得るならば、是も專門で無くとも宜いが前項より稍進んで、圖畫を學んで貰ひたい、即ち多少筆の使ひ方、および書法等を高尚に修むる事である、近頃は女子の專門家も大部殖て來たが、予の希望は專門で無くて宜い、現今の中等教育に於ける程度位の技倆の畫家の増さん事を家庭に望むのである、隨分當今は、帝都も地方も、競うて琴、生花、茶の湯等の稽古を子女に爲しめらるゝが、予は固より是に反對するもので無くして、大いに贊成するものである、と云ふのは、縦ひ外見にもせよ、斯う云ふ事を學べば、自然に人



品の高尙になるものなれば、尙ほ進んで之を修むるが宜いが、之と同時に繪畫も學んで貰ひたい、

前の琴その他のものを學ぶには、態々師匠の許に通はねばならぬ、それでも皆通つて學ぶのである、けれども今予が奬むる所の繪畫は、殊更に師匠の許に通へと云ふのでは無い、旣に學校にて學んだものは、それを復習し、又さも無いものは手本を購めて之を臨摹し之を練習せられよと云ふのである、

此く云はゞ、或者は、琴や茶の湯等に比べて、繪畫は如何なる利益を吾人に與ふるものであるかと云ふ質問を發せらるゝであらうが、成程圖畫と云ふものは、前者のやうに直接なる機械的の利益を收むる事は出來ないが、併し間接に得る所の利益は無限である、その一二を擧げて見れば、之を學ぶと同時に趣味が增して來る、趣味が增して來ると共に、知らず〳〵之に化せられて心が高尙になる、心が高尙になれば野卑の事には近寄らぬ、從つて過失は少なくなるのみならず、人格も高まつて來る、是等は機械的に表はす事の出來ないもので、實に困難であるが兎に角自然に自己の容儀、俗に云ふ身仕舞の高尙になる事は、從來の實驗に徵して謬らぬのである、

次に色彩に關する智識と云ふものは、圖畫に依りて得るより外は無いのである、而して色彩の智識と云ふものは、吾人に必要缺くべからざるもので、且つ各方面に應用せらるゝものであるが、學校敎育では、何より之を得るかと云ふに、圖畫の科を除て外には無い、彼の物理學で色の說明をする、けれども其は色の分解等に屬する事を釋くのみであつて、未だ之が調和配合等の事は說かないのである、

吾人が日常五官の中で、何が一番に澤山の作用を爲すかと云ふに、盲人は別として、まづ眼が最も作用をなすので、森羅萬象みな眼より入つて來るのであるが、それは形が先か色が後かと云ふに、第一に眼に觸るゝものは色彩であるから、その物の形は兎も角、若しも色彩の調和が惡ければ、直ちに不快の感を吾人に與へるが、之に反して色彩の調和が良け

れば愉快の感を惹起すもので、此の色彩と云ふものは吾人に直接の關係を有つて居るのである。

ソコデ不快のものを改めて愉快のものにする、即ち色彩の調和を保たせる事を研究するのは、圖畫に依れば容易に研究することが出來るのであるから、之を實際に應用して家庭の上に施したならば最も妙であらうと思ふ、例へば室內裝飾でも、寒い時には、餘り白ッぽい物などは除けて、自から暖かなるやうな飾り附けをなし、暑い時には、黑ッぽい物を避くるは勿論、室の內外庭園に至るまで、清らかに涼しいやうに爲る事が出來るのであるが、之は何に由つて然るかと云ふに、即ち色彩の調和である、斯う云ふ事は專ら一家の主婦たる者の掌るべき事で、それを誤らぬやうにするのは色彩の智識が源泉で、之を研究するのは圖畫である、

既に主婦たる者に斯の心得のある時は、單に室の內外を暖かにし、若くは清涼にするを得、且つ家政の整理上にも幾何の便益がある計りで無くして、吾人日常の生活上にも大いなる幸福を齎らすものである、けれども比較的之に向つて注意を拂ふ人が少なくして、却つて茶の湯、生花、琴など云ふものに深く身を容るゝが、それらのものでは、未だ圖畫の色彩に於けるが如き福音を家庭に持ち來たす事は能ぬのである、それは如何しても色彩に依るの外は無い

次に自己は勿論、子女および配下の者に至るまで若し此の色彩の調和と云ふものが出來さへすれば、その材料の如何に拘はらずして、之を高尙に造る事が出來るのであるから、是また女子の心得べきことである、而かも之を心得ざる爲に、折角二頭立の馬車に乘つて居ても、その身裝が不釣合で、或は賤業婦では無いかと思はしむる者がある、予は常に此くの如き塲合に接すると同時に、その令孃方の扮装に因つて、直にその母人の品性如何を卜するのである故に色彩の調和の大切である事は是に由つても知らるゝであらう、

予は又常に小學校の兒童に就て研究しつゝあるの

だが、地質の良いものを著て居る小兒は、云はずとも、誰が見ても餘裕のある者の子弟であると云ふ事は一目瞭然であるが、その地質の善くないものでも單に色彩の調和や、頭髮の結方等に由つて、略その家庭、一層適切に云へば、その主婦たる者の品性を窺ひ知ることは難からぬのである、十中の八九は誤るものでは無い、斯の視察力を養ふには圖畫に依るのが最も便利である、

是の故に、斯の視察力及び注意力を養ふの階梯としては、必ず一たび目に觸れたものを、長く記憶に存しやうと思つたならば、圖畫に書く必要がある、單に目に觸れたのみでは、時日を經るに從つて、物に因つては印象が薄くなつて、遂には記憶から去つて仕舞ふ事のあるものだが、幾ら粗末でも、大凡その物に似合つたやうな形を描てさへ置けば種無しになる憂はない、のみならず物事に對して注意力が綿密になるから描くが可い、

概して文學者よりも美術家の方が觀察は緻密である、中に就て畫家は非常に緻密である、それ故に人物を描いても、又は花鳥の類を描ても、表情と云ひ姿容と云ひ實に巧みなものである、之は平素その視察力や注意力が緻密に行屆いて居るから、之を露はすに容易なのである、

圖畫と云ふものは如上の利便のあるものである、けれども之を學んだからとて、急激に數學や讀書のやうに、直ちに機械的に效が現はるゝと云ふ事には行かぬ、けれども永い年月の間には自然と顯はるゝものであるが、兎角物質的進歩を貴ぶ時代には、多くの時間と金錢とを費して永久の事を修むると云ふ者の少ないのは是非も無き次第とは云ひながら、今後に於て家庭を作るべき大責任を負る二十世紀の女子たる者は、必ず前述の心掛けが無くてはならぬ、

終りに臨んで一言して置きたいのは、如何も是迄は圖畫の趣味を感じない、感じ無いから見る氣が出ぬと云ふに陷つて居るのであるやうに思はれる、夫に就ては中々一回や二回で分るもので無いから、展

覽會などのある時は一度よりは、二度と度重ねて行きさへすれば、自づと其中には分つて來て趣味を感ずるやうに爲るのである、尚ほ手近い事は、三越、白木のやうな陳列所に行つて見ると好い、何も行つたから買はねばならぬと云ふものでは無い、尤も若い女子などは、或は見たならば購めたいと云ふ心が起るかも知らんが、最早度々行つて目に慣れて來れば、決して左程欲いと云ふ了簡の起るものでは無いまた其欲いと云ふ了簡の起る中は、十分自分に鑑定すると云ふ力が薄いからである、若しも再三再四行つて見慣れて來れば、斯の物の色は調和が好いが、彼の物は調和が佳くない、若しも此の色と此の色とを調和せしめたならば如何と云ふやうに、知ず〱目が超えて來て、遂には之に對する趣味も高尚に進んで來るやうになるのであるから、時々斯う云ふ所へ行つて、色彩に關する智識を養成すると同時に、その模樣等を見て圖畫の觀念をも養成して貰ひたい尚圖案の事に就ては、折を見て述ぶることゝしやう

野分

醫學博士　三浦守治

草を木を物狂はしく吹亂す
　野分が中の石ぼとけかな
足曳の岩ほとよもし久方の
　雲吹しをる木がらしの風
不士のねを天つ御空にのこしおきて
　此世の今日は暮れ果にけり
み山木の枯葉散りしく岩床に
　折々おつる露の音かな
白雪の玉手ゆらゝに薄氷の
　甲斐絹おりなす機おり少女
月と我と偶々こよひ宿り合ぬ
　誰をいほりのあるじともなく
思ひつゝ切すてかねて庭の木の
　わしきよもきも茂り合にけり
語らへばかく樂しきをなにしかも

きのふは君につれなかりけむ

友も起き花もめさめつ梓弓
　春のあけぼのたのしきころかも

草村にかくれし螢いさゝかの
　光あるが故にとらはれにけり

かたり合ひて憂さをはらさむ友もがな
　手づくりの酒今日もらひけり

岩ばしる清水くみとりて曉の
　星かげながら君に手向けまつる

月に花に春はひねもす夜もすがら
　唯何となくしづこゝろなき

夢ともなく現ともなく夏の夜の
　しら〱あけに船ははてにけり

思ふことといふよしをなみどぶろくの
　酒だに呑みて醉はむと思ひし

花ぐもりいつしか雨になりにけり
　さもあらばあれ馬ぞと申せ

朝櫻手折るべからず安らけき
　胡蝶の夢にさはりもやせむ

まどはじな別れし後は我門を
　水鷄にあらで誰かたゝかむ

山里のさびしき春にあひにけり
　我と鷺と白梅の花と

山家集をよみて

佐々木信綱

其一

我國の歌書より、法の師の名を除き去らば、いかに寂しからむ、歌の林の大樹には、法の師の培ひ水やりたるもの少なからず、白玉は人に知られず知らずともよし、と自ら歎きし元興寺の僧、漕ぎいにし舟の跡なきにたとへて、世の無常を歌ひし沙彌滿誓を始め、六人の歌の仙の中には、花山の僧正、宇治山の僧喜撰あり、つゞきて素性あり、古曾部の入道あり、慈鎭和尚、寂蓮法師、さては近き世の辨玉、行

◉女學校用教科書

文部省檢定濟

阿多廣介
園田竹熊　先生編纂

●女子補習讀本

菊判和綴美本

正價　上二十五錢　下三十錢　送料　各四錢

本書は高等小學校卒業後更に補習科を修むる女子及び修業年限二ヶ年の高等女學校技藝專修科生の使用に供せん爲め編纂せられたるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其材料は家事、家政、女工等を始め實業に關する事項。國家公衆に對する必要なる心得、美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを撰擇したれば實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

川村理助先生著

●高等女學校用 生理衞生新教科書

全（文部省檢定濟）　正價　五十錢　送料　六錢

東京府第一高等女學校教諭　市川源三先生著

●高等女學校用 教育學教科書

全（同）　正價　五十錢　送料　六錢

市川源三、利根川與作兩先生共著

●高等女學校用 國史教科書

全二冊（同）　正價　各五十錢　送料　各六錢

川村理助先生著

●高等女學校用 動物學新教科書

全（同）　正價　五十錢　送料　六錢

川村理助先生著

●高等女學校用 植物學新教科書

全（同）　正價　五十錢　送料　六錢

学習院女學部長　下田歌子女史題歌

前共立女子職業學校刺繍主任教授
學習院女學部教授　木村仲子女史編

刺繍教科書

全一册

和装美本
定價金五拾五錢
郵税金六錢

本書内容の概略を示せば●刺繍の起源及び變遷●刺繍と繪畫との關係●刺繍するもの丶姿勢●刺繍用の器具及び材料●畫の組立及び布帛の張方●下繪の寫方●布帛に對する注意●針の持方及糸の使用法●糸の縒方●仕上げ方●繍方の種類及説明●紋繍●旗章の繍方●金繍等にして其繍方の如き各種の花鳥草木は勿論景色等五十數節に分ち各節に綿密なる圖畫を挿入し精密に説明したれば初心者も本書に據れは容易に會得する事を得故に各種の技藝學校に於ては其教科書として家庭に於ては獨習用として無比の良參考書たるを疑はず

共立女子職業學校編物主任教授　豐原繁尾子女史編

編物教科書

全一册

近刊

同校造花主任教授　金子支江女子史編

造花教科書

全一册

近刊

發行元　東京築地　國光社

發賣所　全國各書林

振替貯金番號壹番壹七八番

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第二十三版

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋二六九三番　株式會社　國光社

誠に至るまで、歌にすぐれたる法の師いと多かり、試に廿一代集をひもときて、法皇法親王を除き、歌選ひいれられし僧侶の數を擧げ見むに、僧正百四十七人、法印百廿八人、僧都五十四人、法眼三十三人、律師卅人、法橋九人、上人六十六人、法師二百八十二人の多きに及べり、又顯昭法橋によりて歌學は建てられ、仙覺律師が其生涯をさゝげし研究によりて萬葉集はよみ明らめられ、元祿古學復興の帳は契沖阿闍梨によりてかゝげられ、語學の大成は妙玄寺義門の手をかりて成れり、かく桑門に歌仙名匠多きはいかなる故ぞ、さるは歌の道、法の道、其おくか相似たるによるべく、はた法の教の深き趣を得たらん人は、心の鏡おのづから曇りなくして、萬の象まさやかにうつる故もあるべく、殊に身を塵の世の外におきて、俗界の名利を離れ、うき世の煩ひなきが故なるべし、しかく桑門に歌の道の聖多かる中に、殊にたけ高くぬけ出でたるは、我西上人にあらずや、

其二

遠く神代に根ざしそめし言の葉の花は、藤原奈良の朝に至りて、人麿のをゝしき、赤人の風情ある、憶良の唐ぶりをうつしたる、長きに短きに、千花百花咲きさかえたり、さるを延暦の都遷しは人の心言葉をもうつしかへて、長き歌また亡びぬ、神樂催馬樂、はた古き歌をのみ繰返しうたひて、新しき作絶えにたり、惜むべし、長き歌は平安朝のはじめにまた亡びはてぬ、されどなほ短歌のかたに熱情に富める在中將あり、やさしく女しき小町、伊勢あり優にみやびやかなる貫之、躬恒あり、方言俚語をも取交へて。洒落によみなせる好忠俊頼あり、次に俊成定家の華麗體あり、我上人の平淡にして趣味深きあり、かく絶えず新しき泉湧き出で、新しき流起りて進みゆきたらむには、今日の歌いかばかり進步したりけむを、西上人世を去りまして、我國の歌の命またほと〳〵絶えなむとせり、奈良の葉の古きに新らしき色をそへし、源將軍一人を除きては、爾後數百年、元祿の朝日再びさしいづるまで、歌の道

またく常闇になりぬ、西上人は歌の林闇に沈まむとせし前、月なき夜半を照し〻夕づ〻の光なりき、かの夕づ〻の如く、清くさびしき光なりき、西上人の歌は、さびしき思ひ人の胸を射、其底に徹る歌なりき、

其三

西行は才思天成にして、常人の學び得る所にあらず、人麿の後身といふべしと、後鳥羽院のたまはし〻はうべなりけり、かの朝や、後鳥羽、土御門、順徳の三院、歌を好ませ給ひ、後京極の攝政はたすぐれたる詠みくち、縉紳に俊成定家父子、家隆雅經、桑門に長明、慈圓・寂蓮、女流に宮内卿、讃岐、小侍從俊成卿女など、皆一代の才人、されば五條三位の流を汲みて、一世みな絢爛の風體をむねとせる中に立ち、一人平淡なるさびしみを味ひしは西上人なりき、しかも只無味の平坦ならで、情熱もえにもえし後の平淡なりき、我國の歌の歴史に、もとも多情多感の歌人をもとむるに、前後僅に二人、そは業平と西行とのみ、あだし法師の家集を讀むに、所謂法師の歌にして、あるは悟り過ぎてつめたきあり、あるは只に世をはかなみ世を厭ふの外なきあり、あるは理路を歌ひて人の頭に入れんとせるあり、西行は頭の歌人ならず、胸の歌人なり、理の歌人ならず、情の歌人なり、數百年來幾千の歌人が歌ひふりたる花も、月も、戀も、上人の胸の絲にふる〻時は、新しき情、新しきあはれの響そひて、歌ひ出されたりき、

其四

歌人の生涯は又歌ならざるべからず、西上人の生涯を思ふに、又一篇の長詩なり、其行ひ何ぞ詩趣に富めることの多き、一族なる左衛門尉憲康に、明日と契りて別れし又の朝、頓に彼が失せけるを見て出家の志をかため、左兵衛尉藤原義淸、一朝僧圓位となれりし由は西行物語の傳ふる所なれど、なほ他に深き故よしやありつらむ、天の中川を舟にて渡らんとせし時、乘れる人の數あまりに多しとて、舟人は先にのれる西行を舟よりあがるべしと叱りちらしつ

されど聞かざる顔して居られけるに、舟人怒りて西行をうちぬ、頭より血出で面わに流れかゝりたれど聊かも怒れる色なく、従容として舟よりあがられける西行、高尾神護寺の文覺上人常に西行を憎みてかれ遁世の身とならば一途に佛道修業すべし、然るに數寄をたてゝ此處彼處うそぶき歩く、憎き法師なり、いづくにても見當らば頭うちわりてむと常々弟子にいはれたりき、春の末高尾の法華會に、西行來りて、花の蔭など眺めありきし後、法華結縁のため、一夜の宿を此庵室に免させ給へと云ふ、弟子たち、西行は天下の名人、又も師の坊の打すゑ給はゞ珍事たらむと打案じ顔、文覺は手ぐすねひきて、思ひつる事かなひたる體に、暫し西行の顔打まもりて、是へ入り給へ、年來承り及び、見參に入りたく候ひしを、御尋ね喜び入り候と、懇に物語りして、次の朝齋など饗應して歸されつ、弟子たち、手に汗をにぎりつるに、無異に歸されけるを喜び思ひ、師の坊はかねて西行にあひたらば、頭打わりてむとあらましごとにのたまひしを、昨夜は心靜なる御物語、日頃の仰に違ひ候よといへば、あらいひがひなの法師どもや、あの西行は此文覺に打たれむずる顔つきか、文覺をこそ打ちてむずるものなれといはれける、荒法師の文覺がさばかり恐れし西行、鎌倉の右大將が賜ひし白銀の猫を、歸さに門の邊の童部に與へ去りし西行、江口の里の俄雨に雨の晴間をまつとて、暫しの宿を遊女の家に借りし西行、桑門は家なし、行脚して身を終るべしと、常の詞にいひて、關の東關の西、至らざる所なく、心とまれる方には、杖をとどめて庵を結び、興去れば又こと方に杖を曳きし西行、釋迦如來入滅の日終りを取らむことを願ひて、願はくは花のもとにて我死なむとの願空しからず、建久九年二月十六日七十三歳にて東山双林寺の庵に靜にねぶれりし西行、げに上人の生涯は既に一篇の長詩ならずや、

其五

靜なる雨の日、こほろぎの聲たえ〳〵なる夕暮、

水の音清き山里、波の聲さびしき海そひなどに、一人燈火のもとに繙きて、身にしみとほる寂しき思ひ深きあはれを味ふべきは山家集なり、されど月に對し花に向ひて、興わき感動きたる折々毎によみ出で詠み棄てられ、自からことぐ\しう選び集められしものならねば、こゝにかしこに樣々寫し傳へたるなるべく、今流布せる山家集には、洩れたる歌少なからず、上人自筆のを周嗣禪師傳へもたれしに、法勝寺僧房の火の災にあひし時燒け失せしが、更に他本を尋ねて、觀應二年に書し寫すと言へる一卷は何處にか散りぼひゆきけむ、古寫本目錄なる山家心中集はいかなる書ならむ、松本柳齋が、頓阿法師のもたれしもの、官家の藏本、其他異本五六本もて校合せりと云ふ其原書、はた他日板に鏤るべしといひし大本、いかになりけむ、萩原宗固數本を持たれしを、屋代輪池傳へたりと云ふ、是れはた何處にか失はれけむ、刊本には活字本(二冊)、西行法師家集(三冊)六家集本(二冊)山家集類題(一冊)等あり、なほ當時ある所に古寫本數十部を藏せりとぞ、是等をあつめ異同をたゞしや、定本に近きものを出さまほしうこそ、

耳の滋養

天谷秀

世人は身體の爲に滋養を求むるに就ては、それ牛肉、やれ牛乳、鷄肉、鷄卵若くはソップなど、云ふやうに浮身を窶して居るのであるが、耳の滋養に至りては一向に滋養が行屆かないやうに見受ける、尤も耳は身體の一部であるから、前のやうに滋養を取る者に在りては、生理的に耳の滋養を收容して居らるゝことは勿論であるが、余が今言はんと欲する所の耳の滋養なるものは、決して牛肉や鷄卵の如き物質的の滋養を指すのでは無い、即ち耳といふものは聲音を掌る所の官能であるから、此の音響に對する滋養を取つて貰ひたいと考へる、

近數年來は學校および家庭等に於ても、大いに音樂と云ふもの丶趣味を感ずると同時に、之が必要を認めて研究する者が增加して、殊に女子に於て此の傾向の多い現象を見るに至つたのは誠に喜ぶべき事であるが、併し此の研究に從事する者の多くは、中年以上、例へば、高等女學校へ通學の傍らに研究すると云ふやうな者が多いので 純然たる研究者は實に稀である、兎に角研究せざるには優つて居るが、名手になると云ふに就ては、頗る疑を存せざるを得ないのである、

彼の歐米の振合を見るに、概して十才乃至八九才の頃よりして之に手を觸るゝのであるから、その趣味を感ずる事も、又はその調節等を解する事も早い從つて名手大家も輩出するのであるが、是には東西各家庭の組織が異つて居るのが、若しも多くの原因の中に數へることが出來るならば、必らず一の原因に數へ得ることが出來るであらうと思はれる、知らるゝ如く歐米の家庭は、每日晩餐の後家族の者が團欒して、或は歌ひ或は彈じて歡樂するので、既に子女たる者の親達殊に母親たる者は、概して音樂の趣味を解して居ないものは無いといふ風であるから、知らず／＼子女たる者も之に化せらるゝのである、けれども我國の家庭では此くの如き風習が無い、是の故に現今之を研究する者は前述の如く中年よりする者が多いのである、

一體日本人の體格は、殘念ながら之を歐米人に比較すれば總體に小さい、體格が一體に小さいから、從つて手指なども細小であるから器樂を修むるに適しない、殊に唱歌を學ぶ者の多くは十八九才乃至二十才位の者が研究を初むるが、最早十八九才乃至二十才に達した者は、謂ゆる咽喉が硬まつて仕舞うから、授ける者も將學ぶ者も共に困難である、之に反して歐米では、前述の如く既に家庭に於て幼少の頃より授けるから、自然咽喉も慣れて來るから、縦ひ音樂の專門家で無くとも立派の者がある、殊に專門家となるものは、最早小學校を卒業した時分から專

門の教師に就て二十年乃至三十年と長日月の間研究を重ぬるが故に、大家名手の輩出するのは當然の事である、けれども我國人は孰れも中年より從事するから、唱歌の如きは至つて善良の者が尠なく、是は全く幼少から從事しないからである、故に或西洋人の如きは、日本人は全く聲樂を學ぶに適せぬ人種であるとまで極言したが、之は強ちその西洋人の言は極端の說であつて、決して正鵠を得たるものでは無いが、併し斯く言はしむると云ふものは、全く幼少の時代から之が研究に從事せしめないのに基づくのであるから、專門家たらんとする者は、必ず此に注意せねばならぬのである、而して縱ひ專門家にならないまでも、之が父兄たる者は、每に各所の演奏會等に子女を伴ふて、音樂趣味の滋養を彼等の耳に供給して貰ひたい、

苟くも自身に之が研究に從事しやうと思ふならば樂器は何が宜いかと云ふに、まづ初めはピヤノ若くはオルガンの類を擇ぶが宜い、彼の歐米では、子女が七八才の頃より徐々に之を授くるけれども、我國人は前陳の如く、身體發育の關係もあるから先づ十才以上より修めしむるが宜い、此の事に關して、前年某樂器家は、日本人に適せしむるやうに鍵盤を改良したら宜からんと云はれたが、若しも鍵盤を改造縮小するやうな事をすれば、從つて聲律に關係を及ぼすのみでは無い、種々なる不便を來たすのであるそは兎も角として、凡て西洋では鍵盤を有する樂器は女子の專修物とし、ヴアイオリンは男子の修むべきものと定つて居るが、我國では反對の現象を呈して居る、之は何故であるかと云ふに、ヴアイオリンはピヤノ、オルガンに比すれば容積は小さくして、啻に携帶に便なるばかりで無く、一は價の低廉なるなども關係して居るのであらうと考へる、何は兎もあれ、事實は此く正反對であるから、我國に在る歐米人は皆奇異の感を懷て居る、と云ふものは、もとヴアイオリンと云ふ樂器は、泰西では之を稱して樂器の王と呼んで居る、之は搆造の美醜や價格の高低

に由つて云ふのでは無い、即ち之が彈奏に純熟するに困難なる事を表したものである、

それにも關はらず我國人は前段に述べたるが如き便宜のあるため、多く好んで之が研究に從事するけれども、見たと行るとは大違で中々六づかしいから、之を遣り通すものは少なくして、大抵は半途・にして止める者が多い、是を以ても樂器の王たる價値は立證せらるゝのである、



依つて音樂の趣味を養成するには有鍵樂器、即ちピヤノ、オルガンの類を研究して、漸次に耳を肥すとを計るが宜い、此く自ら研究すると同時に、各所の演奏會等に行きて滋養を吸收するに努めねばならぬ、

何が爲に予は此くまでに諸嬢に向つて音樂の研究を獎勵するやと云ふに、音樂なるものは人心を融和し暢達するものであるからである、殊に女子たるものは男子と異なり、

順柔貞淑を以て本分とするもので、その本分を助長するものは音樂に如くものは無いのである、女子にして斯の德が無ければ、到底家庭を圓滿ならしめ且つ平和ならしむる事は出來ないのであるから音樂は女德を養成するの一要素たるを疑はないのである、

予の觀たる理想畫

竹内蘆笛

元より自分は畫家でないから、繪筆とる書ざゝろさへもよくは知らない人間でありますが、常に文學方面からのぞいて居りました自分は、些かこゝでこの理想畫に就いて、お話して見たいと思ひます、

勿論、藝術として眞美の趣味を開拓しようとする點は、文學も繪畫も共に同步調でありますが、而かも各自に異なつた描寫は、遂には寫し出された其の美にも、各々特色を生ずるやうになつたやうであります、特に特色と言ふと、或は不穩當かも知れませんが、文學に依つて寫し出された美は、繪畫の方で一寸寫し難いし、又繪の方でよく發揮せられた美は文學の方では至難だと思はるゝ事もございます、

つまりそれ〴〵の特色もありますが繪畫が、文學から受ける資料は又夥しいものではなからうかと思ひます、

私が今こゝに理想畫に就いてお話し致すも、畢竟其談片に過ぎないので、理想畫の研究と其の資料の標準選擇に就いて述べて見やうと存じます、

一體この理想畫が東洋畫の中に著しい發展を見るやうになりましたのは、遂この十年來の事でありまして、近來更に一段の勢力を帶びて來たやうであります、

其種類も、系統的に分類して見ますと、第一に神話或は宗教上より來れるもの、第二は古碑傳說より及ぼせるもの、第三は一般抽象的或は偶意的に畫家の作り出せしもの等であります、

で殊に現今理想畫の多くは、主格を大抵人物にとるやうでありますが、又風景のやうなものも、今迄の理想畫の中には其一面を保持しつゝありました、即ち寶來山や、龍宮城の如きは夫でありますけれどもこれは將來、一、二の畫家が常に開拓して見るべき餘地のあるものではないかと存じます、

しかし前にも申しましたる通り、理想畫其ものは抽象的偶意的のものでありますから、人物を以て畫き出すのが最も適切なので、即ち風景と人物とが理想畫に於て各々反比例の發達を見るに至るのは、又故なき事ではないのでしやう、

我國はじめ大抵どこでも理想畫の大部を占めて居りますのは、宗教或は神話から流れ出た畫題でありまして、我國の理想畫の如き其淵源は大抵佛教にあるやうでございます、

實に佛教が日本の理想畫に影響した事實は驚く程で・近來の諸家の理想畫を見ても、多くは佛教畫かさもなくば泰西理想畫の模倣でありまして、少しも新方面に手のついてないのはどう言ふわけでせう、

自分は理想畫が至難であるから發達しないと言ふやうな薄弱の氣風は、將來の藝術家に持たせたくない、殊に何事にまれ獨主的氣風のない今日の藝術家に、至難であると言ふやうな嘆息を聞かさないやうに願ひたい、畢竟日本の理想畫が今日の如き狀態であつたのも、一つは時代の境遇にも壓迫されて居たらうし、まだ／＼理想畫に獨創的氣力ある人が手を觸れなかつたからかも知れません、

要するに理想畫は未だ前途遼遠の時代であるから勤めて新方面を啓かなければ墮落する、餘程の奮勵を要するのであります、

冬の歌

中山幸子

冬枯

木がらしは吹しづまりてしづが家の

窓うつ音はあられなるらむ

野も山もあかるくなりし冬枯に
また來む春のみどりこそ待て

初冬風

秋過ぎていくひもあらぬ冬の日の
かはる風こそ身に染にけれ

時雨

しぐれする空に渡れるかりがねの
心にひともならはしものを

霜夜

冬の夜はさむさがゆゑにおく霜に
さえたる月を見る人もなし

年のくれ

なにごとをもなせし事なく暮にけり
また來む年をおもひやらるゝ

年の暮にかへり咲を見てよめる

かへりさく花は春へとおもへども
こゝろせかるゝ年のくれかな

數へてもすぎし月日のをしまれて

大晦日

今年もけふとなりにけるかな

明日よりは年の始めとなりぬらん
けふばかりこそ今年なりけれ

落葉籠

三島靜子

枯野風

しをりにと昔むすびしふるやなぎ
末葉ちりかふ野路のゆふかぜ

殘紅葉

わつかにも殘る紅葉にことゝはむ
すぎにし秋のとまりいづらと

夕かゞし

ゆふ霧に小田のあせ道ふみまよひ
誰ぞやと問へば案山子なり梟



返り花

柳浪

『またお始めなさるわね、お止しなさいよ。お清も太あ坊も、怖がつて仕様が有りませんからさ』と言つても良人は肯かずに、醉ふといつもの癖で、面白づくに成つて話す。狐のお化、狸の大入道など、大人が聞けば馬鹿々々しい様な、話ではあるけれど、子供達は眞面目に聞いてほんとうに怖がる。夫も烏渡した機會が始りだつたので、姉のお清（今年十一になる）も弟の太郎（四歳）も、揃つて宵つ張りで、容易な事では寐なかつたのを、良人がある時、然う何時までも起きて居ると、狐や狸が來て大入道に成つて驚かす、この邊には狐狸が數多居るから、直ぐに來ると、言つて、巡査が魅された事や、古河端に女の姿をして、立つて居た事や、有る事無い事話したところが、姉弟共一と縮みに成つて、儂の膝に兩方から噛り付いて、突伏していつの間にか眠て了つたので、『是りやあい〻睡眠藥だ』、と良人も笑へば、儂もまた、飛んだい〻お呪ひだと、其時は思つたが、宵惑ひをする度に、恐い話を聞かせられては、寐た癖が付いた故か、太郎はこの三四日といふもの、夜中に不圖眼をさましては、怖い〳〵と言つては泣出す。子供を嚇すものではない、といふ事も聞いて居るし、目前證があるのだから、と、この事は良人にも話したが、然うか夫りや惡るい。と言つても、醉ふとまた始めるので、儂はつく〴〵困つて了ふ。

今夜は良人も宿直番だし、夫に明日は前の奥樣の三年忌の逮夜に當つて居るので、お寺樣と其外、知己の人四五人を招ぶ積りで、その支度やら何やら、今夜の内に仕て置かうと、二人の子供は早く寐かして、儂は臺所で、煮物やら何やら、仕て居ると、突然にまた太郎が泣き出した。

生憎鍋を掛けたところで、鳥渡手が放されない、このまゝ打遣つて置けば、焦げ付くだらうし、卸せば火が無益になる。またいつもの癖だらう、これだけ煮てから行つて遣らうと、焜爐の下を煽ぎながら、あいよ、あいよ、と返辭をして居たが、段々と聲は高く、果は火の付く樣に泣き出すので、坊より此方の我慢が仕切れなくなり、早々鍋を卸ろし、代りに鐵瓶をかけて、鳥渡手を洗つて、拭き〳〵行つて見ると、布團から三尺も拔け出して泣いて居る。

『おゝ〳〵可憐さうに、さあ〳〵母ちやんが來たよ、最つと中へ入つてお寐よと』。横に成つて抱いて遣つた。

いつもなら、これですや〳〵寐るのだが、ぢらせた故か、今夜は中々寐付かないで、怖いよう〳〵、と泣きほとぶ。

『何にも怖い事は無いよ、母ちやんが抱いて居るんだもの、怖くも何とも有りや仕ないよ、坊は强いねえ、些つとも怖かないから、さ、お寐よ〳〵』。とだましつ賺しつ、辛向の事で寐せつけたかと思ふと、今度は姉のお淸が、突然に、『母さん怖いようと』。泣き出した。

お淸の泣くのは今が始めて、何に怯えたのかと、吃驚して、寐ながら、振り向いて、片手伸ばしに布團の上から叩いて遣つて、

『何うしたの、お淸、寐惚けたのだよ、怖かないよと』。いふと、

『でも母様、僕怖いものを』と布團の中に潜り込む、全く寐惚けたのでも無いらしい。
二人が二人、何うしたのか、虫でも出て呉れなければい丶が、と思ふ時、太郎はまた、泣き出しさうに成つたので、しつかりと抱へ込んで『坊はい丶兒だね、さ、ねんねおし』。
と言ひながら、見るとは無しに不意と見た、佛壇の中仕切。油も盡きたか、燈明は早や消えて、中は暗いが、臺所から射す洋燈の光りは、供物の臺を幽かに照して、位牌の影の有りや無しや、と見れば其處に朦朧たる立ち姿。
謂知らず僕はぞつとした。
前の奥様に、爪垢ほども怨まれる譯は無い、御病氣の時も、僕一人が附き切つてお世話をし、其合間には、旦那からお子達の面倒も見て上げた事は、よく知つて居なさるので、大層お喜び成すつて、いよ〳〵むつかしいといふ時、旦那にもお話しなさり、また僕にも、二人の子供の生先を頼むのは、お前より外に無い、呉々も後の事を、お前に任せるからと有仰つた程でもあり、夫からこのかた、二人の子は、眞實自分の子の樣に、可愛がりもすれば、また子供達もよく馴付いて居る位だから、僕はさら〳〵怨まれる樣な覺えはない、あ丶、今のは眼の故か、夫とも……。
と考へて、太郎をしつかり抱へながら、口の内に唱名して、また振り仰いで、よく見れば、最う影も形もない。
子に引かされるは親心、迷ひの種とも成つたのか、思へばお氣の毒な、と僕は立つて燈明を點け、線香を立てながら、
二人のお子の事は、少しもお案じなさいますな、生命にかけても私が、育て丶上げますから、安心して、

行くところへ行らつしやいまし。

と念じ入つて、二人の子の寐靜まつたのを見て、また臺所の用を續けた。

＊　＊　＊　＊

小春日和の今日は朝からお天氣が宜い。

午後からはお客があるので、朝の內すつかり掃除を爲て置かうと、二人の子は遊びに出して、座敷から玄關まで、殘る隈なく綺麗に掃いて、椽側へ戻つて來て、手水鉢の水を汲み代へやうとして、不圖庭を見ると、袖垣の後ろに、只た一本ある桃の木に、歸り花が咲い



て居た。

高くはないが木は古く、毎年一升あまりの實が生るので、奥様は夫を樂みに、この桃は儂の生命から二番目のだよと、有仰つて大切にかけて居らしつたが、其方の三年の、今日命日のお逮夜に、思ひがけなく咲いたのは、花にも心があるのか知ら。

早速生けて上げようと、一枝折り取つて、佛壇の花活に挿し添へた。

二人の子達も、最う今夜から泣いて呉れねばいゝ。

（完）





物と色

理學士　田中東洋

天地の間に、在りと在らゆる森羅萬象には、必ず白いとか、黒いとか、又は赤いとか云ふやうな色がある、その色は凡て吾人の視覺に入つて來る、それを識別して夫々の名稱を附するのであるが、サテ色と云ふものは、物體自身に固有のものであるか、否かと問はるれば、或一部の學者を除くの外は、殆んど即答が出來兼るのである。

一體人間と云ふものは、男女に拘はらず、總て高尙なる事を好みて、卑近なる事は嫌ふものなるのみならず、又常に見なれ聞きなれて居ることは珍らしいとは思はないが、偶々稀に眼や耳に觸れる事は非常に注意を惹くのである、例へば、水の如きは、吾人が日夜に之に接して居るのであるから、別に眼も注がない、けれども其同じ水でも、降雨等の爲に田園を浸し、家屋を流すに至ると云へば、直ちに馳せて之を見る、けれども一杓の水も、萬頃の水も、別に水に變りは無いのであるが、タヾ大水は稀であつて、井戸や手桶の水は常に見慣れて居るに過ぎぬのである、是は人生に通有の好奇心と云ふもの丶致す所で、敢て不思議も無いが、サテその水と云ふもの丶性質は、如何なる物なるやと云ふ疑問に撞著すると其は一分の酸素と二分の水素が化合して成つて居るものであると、斯う容易答ふるものは尠ない。

それと同様で、前の如き疑問が出ると、或は熟せる柿の赤きが如く、松葉の常に綠色を呈するやうに、

色は物體が固有する所の性質で、色は即ち色であると云へば、別に何等の異議も無いのである、が、然らば果して色は、物體固有に附帶するものである事は、何に依つて立證することが出來るであらうか、それは證據立ることは出來ぬ、何せなれば、宇宙間に於ける凡ての物體が有して居る所の種々の色なるものは、初めより物體自身が有つて居るのでは無い、是みな光線の作用によりて生ずる所の、一種の感覺に外ならぬのである。

往古人智の未だ開けない時分には、學者とても物の色に就ては種々の説を懐いて居つたので、甲は、色は物體に固有して居る附屬物であると云ひ、乙は、物體は各自固有の色素と稱するものを含有して居て、その色素の種類如何によりて、其色を異にするのであると云ふ説を主張した者もあるが、サテ是等の説を駁する者の側よりは、若し、色を以て物體各自に附屬して居る所の性質であるとすれば、同一の物體に在りては、如何なる場合に於て視るも、必ず一樣の色を呈せねばならぬ、



即ち晝間太陽の光りで見た時も、また夜間燈火の下で照した時も同一に見えねばならぬ筈なるに、決して左樣でない、晝夜によりて、同一の物も異なる色に見ゆることは稀でない、これ明らかに前説の誤まつて居ると云ふことを表はすものであると、

成程その駁説も一應尤のことである、例へば、同一の人であつたならば、よしんば洋服を著やうが、又は和服を著けやうが、その性質は同じでなければならぬ筈である、去れば物體の色は、外界の如何によりて幾分か變ずるもの、即ち物體固有の變じ得べからざる性質で無いことは、少なくとも考へ得らるゝのである。

次に或人は、色は明と暗との混合より生ずるものであると考へたのであるが、然らば如何にして明と暗との混合よりして色を生ずるのであるかと云ふに、之を説明するの力は無く、從つて種々の現象に對しては、更に解釋を試みないので、所謂一種の妄想説に過ぎぬのである、その後、彼の有名なるニユートン氏に至り、初めて是等の迷夢を打破して、物體の色は、これ全く光りの作用に歸因する、一種の感覺に外ならぬと云ふ説が確實に論定せられたのである、

斯く色は單に光りの作用によりて生ずる一種の感覺であると確定したからは、吾人は先づ色の原となる光りに就て少しく調べて見ねばならぬ、

光りは何物であるかと云ふ問題に對しては、是また古來種々の説をなす者もあつたが、現今の學者間では、光りとはエーテル分子の振動より起る一種の波動であると云ふに定まつて居る。而して此のエーテルなるものは、まづ吾人の知る所に依れば、宇宙の到る處に存在して居るもので、非常なる彈力性を有つて居るけれども、至つて輕いもので、能く横の振動を極めて遠距離に傳達するものであるが、去りとてエネルギーを衰變させるやうな事の無い、一種不可思議のものと想像せられて居る、則ち今日の波動説によれば、光りは光體の小分子が振動するより出來るもので、その振動は、光體の附近に充滿して

居る所の、最も稀薄で且つ微細なるもので、之が彈性のあるエーテルに傳はりて一種の波動を起すと云ふ、その波動は非常なる速度を以て、順次にエーテルの他の部分に之を傳達し、遂に吾人の眼球の内へ入つて來て網膜に衝突し、而して視神經を刺戟して意識させるのを光りと稱するのである、

而して此のエーテルの振動は、何れの場合でも同一と云ふことは出來ないので、或時は甚だ迅速なこともあるかと思へば、又或時は遲緩に振動することもある、此く種々の振動數を有つて居る、その振動の波動が吾人の眼球に入つて來て視神經を衝擊する所より、各々其波動相當の感覺を吾人に與へるのである、則ち種々の振動數や、又は種々の波徑を有つて居る所の光線が、吾人の網膜に映ずる時は、眼か其の波動の數を確かに認むることが出來ないから、タヾ生理的の作用によりて生ずる、格段なる感覺によりて、光の或種類を認むるに過ぎないので、その感じが即ち所謂色であると斯う云ふのである。

彼の太陽より來る無色の光を、硝子の三角プリズムを透過させれば、光は啻に屈折するばかりでは無く、分れて數多の色を表はすもので、その色彩の順序や、濃淡の變化などは無數であるから、迚も判然と區別することは出來ないのであるけれども、まづ其中の重なるものを擧ぐれば、紅、橙黄、黄、綠、靑、藍、紫の七つである、之は屈折の小なるものより順を逐うて示したものである、斯く白色が分れて數多の色と爲つたのは何故であるかと云ふに、是等無數の色光は、その硝子面に達するの以前即ち空中を進行する際には、みな何れも同一の速さであるから、互ひに相提携して一種特別の波動である無色の光となつて來るのであるが、一旦硝子の中に透入した以上は、各種のものが同一に進むことは出來ないので、各自が自身の速度を以て進むが故に、相分離して速度の大なるものは割合に進み、小なるものは遲れるので、從つて各色屈折の度に差を生ずる所より、こゝに無數の色を呈するやうになるのである。

しのぶ草

小川直子

其七、小立野の原

斯くても世の噂は日毎々々に高く成行く折しも、高木有制の妻刀自より事せまれりと漏れて聞えし事こそあれ、とく來給へよと消息あれば、いそぎ行きたるに、館の中には人々充ちわたりて、何事にかひそ／＼いひて歎きあへり、刀自出あひて、いよ／＼十八日には御沙汰ありて、夫々の御仕置極まり、不破殿を始として、人々へ御預けの面々は、切腹と定まりぬとて、方々にては九寸五分の刀の磨ぎよ、何よと、其用意ども大方ならずと、さる方よりもれきゝたれば、御心得迄にかたり侍るなりとあり、おのれも心を鎭めて聞きつるものゝ、たゞに止むべき心ちもせず、知らせ給へるかたじけなさを喜びいひて暇を乞ひつゝ立歸り、心靜に考ふれど、いかにともすべなければ、我せうと久和の親友に、鶴見有成とて、世嗣の君の寵を得たる近臣ありければ、これにかたらひ、世嗣の君にねぎ奉らんと思ひつゝ、しぐれて暗き小夜中に、長町さしてぞ立はしりける、門ほと／＼と打たゝけば、門守あやしみながら扉をほそめにあけて、かゝる夜半に誰ならんといふ、河島久和の妹なり、御主人にねぎ事ありて、はる／＼と參りたり、よきにはからひてよといひければ、入りてしばしが程にいで來つゝ、入り給へと、表の方なる人氣なきひと間にいざなへり、主人出で來て、何事ありて此小夜中にと問はるゝに、おのれ聞つる事どもつばらにかたり、此人々の命を救ふわざもかなと、理を盡してかたらひけれど、有成のいへるやう、世嗣の君とても御咎人と同じこと、中納言の君の御近臣替る／＼添ひ奉り、有制などをも遠ざけてあればいかに思ふもすべなしとありければ、甲斐もなく／＼立歸り、心を碎きて考ふれど、誰に問ふべき人もなし、されば十八日の曉に、庵の中を忍びいで、公事場をさして行ほどに、光うするゝ有明の月さえ

わたり、大路に白き霜ふみて、急ぎつゝ公事塲の門にたゝずめば、やゝありて、御門守が扉ひらくを遅しと走り入るに、足輕いで來て、打咎め、用なきものゝ入るを許さぬ御塲所へ、みだりに入るは誰なるぞ、退けよ〳〵と大音聲にてうちしきれど、わらはは小川幸三の妻昌子といふ者にてさふらふ、御奉行なる多賀殿にねぎ事ありてまゐりたり、此よし傳へ賜はれよといひければ、むつかしげなる所に入れ置きしばしありて、足輕兩人附添ひつゝ御玄關よりいざなひゆき、控所ともおぼしきひと間に置かれたり、此兩人は始終附添ひて、午過れど、其まゝに、日は暮れつれど何といらふる人もなし、幸三はいかになりぬることぞとも問ふべき人のあらばこそ、更行く鐘のひゞく頃、御白洲へといざなふまゝに、隨ひて出れば、廣らかなる所の正面に、多賀殿居給ひ、兩側にはあまたの役人だち苦り切つて並み居たり、爰にねがひの趣はと役人をして問はせらる、わらはのねぎ事他にあらず、夫幸三罪を犯してひとやに入りし事にし侍れば、假令命を召さるゝも、いかで否み申すべき、さりながらわらはの存ずる所にては、命をだに助け賜らば、幸三は二たび、罪をあがなふべき御奉公は必ずし侍らんと思ひ入りぬる一筋の、女ごゝろを汲とり給へ、されば夫に代りて命をさし上侍らむ、わらはの首を面はぎにして、獄門にかけてさらし給へ、夫をゆるし賜はれよと、言葉を盡して願ひたれども、御奉行は叶はぬよしを言葉すくなにいひすてゝたち給へるが、暫しありて立歸り、座に着き給ふと見る程に、役人をして小川幸三妻昌義、今日公事塲にかけ込願の趣、强性に申張れり、これに依て一類へ御預けなされ候條、其意を得、御請速に可仕候と聲高らかに讀みあげさせらる、叶はぬ時の覺悟さへ、御塲所がらを憚りて、御請をこそしたりけれ、夫よりもとの控所に打連られつゝ來て見れば、良左衛門一方の兩人御預け者を請取にとて待たれけり、頓て駕籠にて連られ歸れば、家にて役人どもも見屆にとて列なりたち、柵所を造るべき匠どもい

とさわがしういそぎたちて造り果て、やがてわらはをこめ泣きゆるかせにすなとて、役人はたち去りぬ、かくて明る日になれども、幸三の音信は露ばかりも聞え來ず、切腹したる人々の噂のみ高かりけれど、何所に行て問はむも今は叶はぬ身となりて、暗き所に日を經つゝ、ほそきひまよりさしのぞきて、母刀自に物いひをる折しも、二十六日の午過る頃、せうとの友人なる新田久彌といへるが問ひ來つゝ、さても幸三君には、御殘念なりといひかけられて、母は打驚き、如何なる事のありつらんと答ふるに、いまだ知り給はずや、今日しも刎首の刑に處せられ給へりと、懷より罪狀書のうつしなどとり出てむとせらるゝ折から、上よりも仰わたされありけり、其罪狀書には、

小川幸三

右幸三儀、豫て浪士と深く相交り、過激の說を以て、多く同志を語らひ、終に御國難を釀し、且國禁を犯し、海津へ罷越候儀、元來過激の說を唱へ

候根元の者にて、不屆の至に付、刎首被仰付、右幸三先達より、公事場に於て禁牢被仰付置候所、落着は如斯と被仰出、今日其通り申付候條、此段一類へ御申渡可有之候、幸三所持の品、闕所申付、帳面二冊同樣に記し、白紙も一枚宛綴込可有御指出候以上

子十月二十六日

とあり、かゝれば一方も良左衞門も、爰に來て歎きけれど、罪人の習ひ、なきがらをだに賜はらず、野邊送りの營もゆるしなければ、讀經の聲さへひそやかに打忍びければ、母の愁傷大方ならず、よりて江戸なる久和を呼び戻さむとはからひ、やがて母大病の趣をもて御暇をねぎつゝ歸りけり、されば皆柵所の前につどひ來て、過にし頃よりのありしさまどもかたらひければ、久和のいへるには、何はともあれ、なきがらを貰ひ受るこそ肝要ならめといひけるに、一方答へていはく、此程より拙者度々ゆきて、河しもなる清助に金子をも與へつゝ、兎さま角さま

頼めども、清助は黄金は山に積み給ふとも、こたびの人々は並ならぬ罪人なれば、迚も叶はぬ事なりと否みつゝ許さず、さりながら捨場のみは此所なりとをしへぬとかたられて、久和も一方も雪ふみ分て幾度も手向の花をたづさへてゆかれしが、一方は小松一もとをだにとて植えられき、此時久和

行末はその名と共に久かたの
　雪をしのがむつかの松が枝

と、口すさばれたり、さるに此松をさへおし折て、跡なく成ぬとて、久和は誰がせしわざか恨しや、さこそ奸黠のしわざならめと、憤を含みて歎き、此なきがらのかゝる荒野に朽ち行かむ事の口をしさは、寝ても覺めても忘られずと、ひと夜一方をいざなひ出で、人目少なき小立野といふ所に行き、道すがらいへるには、妹昌子は豫て命は捨たる身なれば、ひそかに出して龕燈提灯をかれにもたせ、夜半過るころ三たり連にて、かしこに至り、首を堀出し、かれに持せ、夜のほどに大聖寺山に葬りて歸らん、もし〳〵事のあらはれたらん時、昌子一人が罪を得なば、何事かあらむといひければ、一方はさても〳〵かく迄に御志の深さは、忝しともたとふるに物なし、親なる我こそ今一度心をこめて考ふべけれといひつゝ家に歸りて、閨にはいりつれど、夢も結ばで、つくつくと心を盡し、我こそは命をかけても本望は遂ぐべけれと思ひ定めて

死出の山ともに越なむまてしばし
　親おもふとて闇に迷ふな

と、口すさふ程に、夜もほの〳〵と明わたれば、良左衞門にしばしとて暇を告げつゝ、かしこをさして行く途の、犀川の橋づめにて、首を納むるばかりなる小瓶ひとつ、またさゝやかなる五葉松一もとあがなひ求め、老からびたる左右の手にたづさへつゝ、かしこに至り、此品々を芦の茂みにかくし置き、清助の許に立寄りて再び松を植置たし、賴むぞよ鍬たづさへてかしこにといへば、度重りしそが上に、人の心も岩木ならねば、うべなひてしたがひ來つゝ、

土を堀のけければ、一方小聲にて、髮の毛ばかりも得させよとひたすらに賴みければ、猶深く穴を堀りたる時、汝もかばかり情をもらしたる上は、むしろついでに首をも渡してよと賴みしに、それのみは命にかゝる大事なれば、叶はぬよしをいひはりけり、此時一方は怒を發し、斯くまでに賴む事許さぬ上はすべなければ、生て甲斐なき命なり、此まゝ爰に自害して、父子諸共に打ち果む、はた汝も此密事を人にもらすか覺束なし、覺悟をせよと帶たる刀を拔はなてば、打驚きて、六尺あまりも飛去りぬ、其ひまに手ばやく首を取出し、小瓶に納めてたちたる所へ淸助は恐る／＼寄り來て、御立腹もうべなればとて油紙やうのものに包みて與れければ、黃金をあたへて人目を憚り、足をはやめて立ち歸り、ありけるさまを語られけるに、久和もわらはも喜びあひぬ、さてまたの日暮るゝを待ちて、一方は夜もすがら四里へだゝれる我家に、その首入れたる瓶を携へ立歸り、遠山里の事にて、庭も廣らかに大樹なども茂りあひたれば、其蔭の人しれぬ所に假葬りをぞしたりける

其八　代々のかゞみ

また其頃幸三が今はの時辭世の詩歌もありしやうに聞つれど、さだかにかくと告ぐる人々なかりけり萬にひそましき頃にて、法會を營むことだに叶はで過行くに、またのとし五月四日には、逸見文九郞のおもひたちによりて、越中國高岡のさとにて、志ある人々打つどひ、大法會をぞ行ひける、導師には瑞龍寺前長老橘仙尼禪師、次々に龍雲寺和尙、香林寺和尙を始めとして、廿八人の僧だちして、大般若經をくり午の時より申の時迄に至れり、はた大施餓鬼をもほどこし、まうづる人雲のごとくにて、祭文または追悼の詩歌などもあまたありけれど爰にははぶきつ、斯くて月日の過ぐる事矢を射るよりもはやしとか、六とせの春秋もすぎ、明治三年十月五日といふに、幸三の家名とりたてゝ賜ふべきよしおほせありければ、幸三の妹にひとりの男子忠明とてありけるをもて、養子とし、家名を下し賜ひけり、おのれ

は思ひがけぬ子をまうけて、喜ぶ事限りなし、此時喜び祝ふとて、つどひ來し人々數しらずあり、そが中に鶴見有成いとも〳〵めでたしとてよめる

ゆくりなく絶えし小川も御代にあひて
清きながれのあとは見えけり

かくて碑をもたてむとて、志ある人々にもかたらひける程に、野口之布は、此頃は東京にありて、公につかうまつれりければ、これにいひやりはかりて、岡（千仭）大人に頼みて、つばらかなる文も出來、ことに題額の文字は、中納言の君御筆をそめさせ給ひけるは、大方ならぬ嬉しさなりけり、（岡氏の撰文は略す）

おのれ此いしふみのひだりの方に書つけゝる

くちぬ名のしるしにたつる石文を
よろづ代かけて人もとへかし

とし經て後なむ、辭世の詩歌を人の得させける

一片和魂終不伸　二年際再爲囚人
君恩未報死何朽　號泣皇天操海塵

敷島や我秋津すの武士は
しぬともくちじ大和魂

素より紙筆などいふ物なかりければ、靜にうたはれたりけるを、牢屋にかゝづらふ者さすがにかなしとや思ひけん、ひそかに紙ども取まかなひてかゝせまゐらせたるを、頓て其人のこひ受けて、其儘ひめつゝもたりけるを、年經て後廣瀬永隆といふ人に、そのときの有樣などかたり出つゝ贈れりとなむ、廣瀬ぬしさる方に情深き人なりければ、これは我がもたらむよりは、あはれかのやもめなる昌子に贈りなば、さこそ喜ぶらめとて、中山外仔しておのれに贈られけるは、明治の十とせ餘り、こゝのとせの事なりけり、

消えにけむ君が今はの面影も
涙にうかぶ水くきのあと

かたみとて書ながしたる水莖に
今はたぬるし我たもとかな

また明治廿とせ餘り、ひとゝせの秋、打日さす西の都

なる、靈山に魂鎭して、公に祭らるゝ事となりぬ、
此時おのれもまうでゝ、

　祭らるゝ御たまをろがみ我袖に
　　嬉しなみだのかゝる今日かな

其後鳥が鳴く東の都にても、靖國神社に祭らるゝ事となりければ、品川子爵殿しらせ給ひ、猶此君のおほしたちにて、別におごそかなる祭もありて、いとかしこくも、故有栖川の宮にも臨ませ給ひけるは、こよなき幸と喜びたり、

　うれしくもしぐれつるよの雲はれて
　　さやけき月の影を見るかな

此時前田の殿にもふりはへさせ給ひければ、

　なき魂やいかに嬉しと思ふらん
　　まつりの庭にうめかをるなり

其後廿四年に位をさへ贈り賜ひけるを喜びて、そのをり書つらねける詞、

　天地のあひだには、おのづからなる道ある事、千はやふる神代より、末の世の今も猶かはる事なかるべし、さるを世のあげつらひは、時により勢にしたがひて、おのづから違ふ事ある習ひこそうたてけれされば昨日の忠臣とめでられたるも、今日は大逆無道の名を蒙りて誅せられ、去年は大なる罪ありとて、命を失はれしも、今年は國を愛し君を尊ぶ増荒男なりとて賞をたまはるたぐひ、大和唐土そのためし少からず、あはれ我背の君はしも、素より御國を思ひ、　天皇をたふとび奉る心深くおはしければ、德川幕府のまつりごち給ひし世の末つかた、世の中いたう亂れける頃、おほけなくも天の下の事に心を盡し、身を苦め、西に東にはしりめぐりつゝ、兎さまかうさまはからひ給ひけるが、忽ち世のあげつらひかはり來て、大なる罪なりとて牢屋にとらはれ、終に元治元年神無月の二十六日といふ日、命をさへめされにけり、其折の事は、今更筆には盡すべくもあらず、さるをいともかしこけれど、今の　天皇萬の政に大御心を盡させ給ふ事大方ならず、奥山のおどろがしたもふみ分給ひ、あるは遠き海路をへだてたるはな

れ小島のはてまでも、八重たつ波を漕ぎ分けさせ給ひて、あはれ世の浮瀬に沈みて、思の涙にむせべる者やある、または浮雲にへだてられて、月影さゝぬ谷影の、朽葉やあると、御みづからもくまなく尋ね求めさせ給ふ大御代の、御光あまねくて、今年明治二十四年十一月六日といふに、かけまくもかしこき詔ありて、靖國神社靈鎭めさせ給ひ、それのみならで、十二月十七日、特旨をもて正五位といふ位記をさへ贈りさづけ給へるに、只夢かとばかり驚かれて飛立つがごと嬉しうて、しばしはものをもえいひ出ず、

　なき魂よいかにといはむ言の葉も
　　なみだの川にまづよどみつゝ

うれしとても、亦袖ぬらすは女のこゝろよわきなるべし、頓て例の教子だちにも告げ知らせて、喜びつゝ御酒よ赤飯よと、打さうどき取まかなはせ、先づ御靈の前に供へて、

　けふかくて祝ふこゝろに年月を
　　かさねしうさぞ忘られにける

などうたひつゝ、日ひと日御靈の前に身じろきもせず居たりしを、かつはものぐるほしと人見けむかし此時處々へ告げやりければ、大姉の背の君より、

　切こんだうめも薫るや旭のめぐみ

中姉より

けふまではしくれ〳〵てふる宿に
　うき雲はれて月のさしいる

嬉しくもながらへし身のかひありて
　たまをまつりの庭を見るかな

しかすがにありし昔のしのばれて
　まつりの庭に袖ぞしぐるゝ

田邊和氣子刀自より

いかにして此嬉しさを包むらん
　うきにくちにし君がたもとに

横山政知の君より細かなる玉章のをくに

天さかるひなの長路に捨てし身の
　名はこゝの重にあらはれにけり

小林全信法師より

天地のあらむ限りは朽ざらん
　きみがのこせる大和たましひ
我さへにうたひつ舞つあるものを
　きみがこゝろのはてやなからん
　　陸奥なる長利仲聽大人より
うれたくもうもれし玉のあらはれて
　嬉しや世々にかゝやきぬらん
　　甥なる二木孝三郎より
埋木の花さく春をむかへてし
　きみがこゝろや長閑かるらん

斯くつらねけるは、品川子爵殿の世にいませる頃、しるしとゞめてよといとねもごろにのたまひければ、子うま子にも見せましとてのわざなりけり、

我ならぬ人もむかしを忍ふ草
　しのぶつまともかき殘さまし



名と實

國府操子

毎年十月頃より翌年の二月頃にかけまして、慈善音樂會とか又は慈善演藝會とか、若くは何々慈善會と稱するものが行はれますが、以前は其發起人とか委員とか云ふお名前の中に、餘り中流以上の方々のお名前などは多く見なかつたもので、その頃は、斯樣な所に名前を連ぬるのは辱かしい、と云ふやうな感念があつたやうでありますが、近來は夫等の孰れに關する會でも、貴婦人方のお名前の無いのは皆無であると云つても可いやうになりましたが、之は會そのものゝ爲には仕合せな事でございます、

而して是等に關する慈善會の發起人又は委員と稱せらるゝ方々のお名前は、俗に相手變れど主變らずとか云ふ諺の如く、會そのものゝ名前は變りましても、發起人或は委員と呼ばるゝ方々のお名前には左程お變りは無いのであるが、何せ此樣に中流以上の

方々が、甲乙丙丁孰れの會にも名前を聯ねらるゝのであるかと云ふに、是は察する所、貴婦人方より望まるゝのでは無くして、その會を開催する者が、是等貴婦人方の袖に隱れて僥倖しやうとするのではありますまいかと思はれます、

縱ひ催主が萬一を僥倖する爲に、それら貴婦人方のお名前を利用するにしても、利用せらるゝ方で拒んだならば、これ以て如何とも爲るとは出來ないものであらうかと思はれるのでありますが、兎に角承諾されないものを出す氣遣はない、その昔は斯樣な所に名前を出すのを忌んだものが、現今では喜んで甲にも乙にも名前を出すやうになつたのは、何か之には深き原因があらうと思ふのでありますが、私などには、迚も其原因は分りませんけれども、喜んで名前を出さるゝやうになつた、その時代は餘り遠くは無い、彼の日清戰爭時代からであらうと考へるのであります、固より社會の中流以下のものは、よしんば心の中にさう思つても、中々手の届かぬものでありますから、先づ中流以上の方々が、斯う云ふ事に盡力して下さらなければ爲らないのであります、私なども及ばずながら、慈善の名に對して聊かお世話したこともありますが、

繰返して云ふまでも無く、本來が慈善と云ふので、即ち他人の力を藉りる、平たく云へばナサケを施すとか、又は之を受けると云ふのが主義でありますから、たとひ一厘半毛でも、失費を減じて、より多くその者の收入を增して遣るのが目的であらうと考へますが、是まで慈善會の振合を見聞しまするに、大抵は收入の三分の一を費し、稍進んでは三分の二、最も甚しきは、收入では足らずして持出しを爲るのがある、それも掛つたものならば致し方が無いと諦めもする、實際斷念なければなりませんが、その會が畢つた後、委員とか發起人とか稱する者を招いて、慰勞會などを開きて散財する、その出所はと云ふと、總て慈善會の收入から支出するのであります、

最も會そのものゝ立塲から申しましたならば、委

員なり發起人なりを請じて、慰勞の宴を設くると云ふことは至當でありませうが、もと〳〵慈善の名に對して名前を聯ねられた程の方であれば、何も後で慰勞會が無いとても、決して不平を鳴らす方は一人もあるまいと察せられるのであります、依つて斯の慰勞會などと云ふものは、以來斷然廢して、之に費す所の支出を擧げて其會の收入に皈せしめたならば、實に双方ともに立派なものではあるまいかと常に考へて居ります。

それに近來は、この慈善會の催しが頻繁で、一週間に一二回位多數の切符を押賣されるのでありますが、是も甚だ迷惑な次第で。是等は少しく發企人等が考へて餘り强ひないやうにしたら宜からうと思はるゝばかりで無く、之は近來幾分か減じたやうですが、會場の廣狹にも構はず、無暗に多數の切符を賣りつけ、當日會場へ行つても滿員で空戻りをする、切符代は前取りなど云ふ酷い目に遇ふ者もあつたのであります、今は稍減じたものゝ全く跡を絕つまでには至らぬやうであります、それは兎も角として、旣に切符を買つて行つても、謂ゆる茶屋なるものに掛つて行かなければ、自分の所持する切符の等級席は空でも坐らせないのみならず、關係者の中に若しも姻戚あるものは、より以上の歡待を受けるなどゝ云ふ奇觀も往々あるのであります、

以上述べ來りし所を概括して見ますれば、幾ら慈善會でも、第一に回數頻繁なること、第二何種に拘はらず慈善の名を附するは不穩當なれば、その種類を精撰せられたき事、第三切符の押賣を全廢せられたき事、第四會場の廣狹に應じて、過剩の切符を發賣せざる事、第五閉會の後、發起人又は委員の慰勞會を全廢して、縱ひ一文半錢たりとも徒費せざること、第六孰れも慈善會の切符は、最も之が準備等に多額を要するが故に、從つて價格も高けれども、みな慈善の名に對して之を購ふ者多ければ、當日の混雜は勿論なれども、縱ひ茶屋を通さずして入場せし者といへども、必ず所持の切符に對する歡待を怠るべか

らざる事、第七若しも今日の如くにして毫も改むる所がなかつたならば、遂には世間一般より嫌惡せら



る方が勝つて居ると云ふやうな聲も聞こゆるのでも察せられるのであります、

れて、折角の美擧も行はれないやうに至るであらうと窃かに憂ふるのであります、已に世間の一部には、多くの切符を購ふよりは、寧ろ或一定の額を寄附す

況して我國の會は、西洋などに比べますと一躰に時間が長いのでありますが、これは彼方のやうに短時間に切り詰めた方が、相互の便益であらうと思は

れます、殊に夜間に開催するものなぞは、頗る之が必要を認ると云ふは、已に新聞紙上に散見する所の事實に照しても寒心に堪へないのであります、且つ嚴格なる家庭の方などは、之を好機として出席せらるゝ事が出來ますが、風聲鶴唳と云ふ諺もございますれば、如上の苦言を參酌せられて、如何かその名を棄てもその實の擧るやうに努められたいものであります、

旅の今昔

和歌屋滿

都をば霞と共に出しかど秋風ぞふく白河の關とは誰やらの吟とも云ひ、又は某が都を出ずして想像の詠とも云へど、その詮索は兎も角として、實に交通不便の往昔は然もあるべしと推せらる、と云ふものは、今は昔、江戸より白河へ行くには、餘程健脚のものでも十日以上を費したものであるが、交通機關の具はりたる今日では、僅かに上野より十餘時間で達することが出來るのである、

嘗て明治の初年、故岩倉右府が龍駕に隨つて東北に至りし折、偶々座客に向ひ、遠からず東京より此地まで鐵の軌道を敷きて交通に便ならしめんと語られしに、客は皆心の中に、長袖者流の世事に迂愚なることは此くの如くであると嘲笑して居たと云ふ事であるが、右府は是より先き命を帶びて歐洲各國を巡察せられて、親しく文明の利器を目撃せられしのみならず、幾たびか實地を踏査せられたのであるから、既に胸中に成算があつて語られたのである、けれども當時は東北人士ばかりでは無い、日本人士の九分九厘九毛まで物質的の文明に觸れた事のない者のみであるから、右府の言を迂濶なりとして嗤笑したので、恰かも古譚の、鼻の無い群猿が偶々鼻の有る猿を見て笑ッたと云ふに能く似て居て、今となつては深く右府に耻入る次第である、

汽車、汽船、電車、電信、電話と云ふやうに、吾人が

文明の利器を活用することになつてからと云ふものは、内地間の旅行などは、殆んど隣家へでも行くやうに造作も無く思ふのみではない、たとひ波濤數萬里を隔つる歐米へ渡航するとも、左程心配したものでは無い、單に御機嫌宜しう又はお達者で、と云ふ淡泊した挨拶で別れるのである、從つて彼の地へ行く者も留守のものに對して別に苦慮すると云ふことも無く、是また單に留守は氣を附けて位で濟して置くが、昔時は中々さうで無い、前にも述ぶるが如く、交通が不便である所より、最早五日乃至十日以上の旅をすると云ふことになると、よく水盃といふことをして出立したものである、今も尚ほ所々に其遺風が存して居る、彼の伊勢參宮に出發の前に集つて宴を開き、歸つて復之を催すのも其である、

此くの如くであるから、出發に際して古人が留守に對する注意は中々愼密なもので、今より之を想見すれば、或は迂愚戇直の譏りは免れないのであるが、併しながら全然捨てたもの丶みでは無く、此の中の或一分は慥かに今人の摸倣すべき美點が有るであらうと思ふのである、之に就て、予はこの程古文書整理の折柄、祖先正興が大阪在番として趣くに方りて、留守居の者共へ心得書として認めたるものを見出したれば、左にその全文を掲げて一粲に供さう、最も正興は、八代將軍有德公に仕へて家老職を奉せしものである、文に曰く、

今度在番中留守大切之儀候間、何れも急度相愼、一怙々の所存を立、或は其役筋に無之など、我意を以て離々に成不申、人少の儀候條、何れも申合心の及程萬端に心付、家中靜鑑の心掛第一に候事、

一丈右衞門尾左衞門へ萬端申付候條、不依何事兩人の差圖もどき申間鋪候

一公用加役の者、御用向大切に相心得候儀不及申候、其外加役の者共、其筋〳〵精出し懈無之樣に相心得可申、何も少々の不快の分押候而泊番相務可申事

一作之進、宅右衞門隔夜の泊、是は平常の事に候、兩

一毎月池上えの名代、人少に候條、足輕などに名代爲請可差越候、面立之者留守明ヶ申間敷事、

一眞證院樣御出候節、吉三郎被出候節、別而其跡〆りの儀入念可申候、

一火の元隨分入念、風烈の節は不及申、何茂申合大切に相心得可申候、夜中は夜廻りの者繁々相廻し、侍分の者申合夜中度々見廻り、火の元の義心付、又は怪敷者見出し候はゞ、早速集り捕候樣に心懸可申候、但屋敷の内木影など隨分心附可申候、

一留守中は夜番の者兩所に差置、時打候間に廻し可申、出火或はあやしきもの見出し候はゞ、何れの番所にても早拍子木打可申候、左候はゞ其所へ何も相集り候樣可申合置候、

一火燒所、臺所、奧何ヶ所と申儀、むざと火燒申間舖候、

一家中明り燈し候義も、夜五時を限消し可申候、不叶用事有之節は制外に候、

一裏門〆、表門一ヶ所に出入爲致べく候、平常出入

人共に相泊り候ほどに心掛可申事、

一兵衛門、忠藏兩人の務同斷之事、

一留守中は人少、殊に幼年の者がちに候得者、何茂平常と違心懸候義は不及申候得共、萬一心得違、少々の病氣等にて引込、志薄く未熟之輩有之者、大阪へ可申越候事、

一出火にて風並惡敷候節者、早々何茂退候樣に心掛可申候、萬一何茂退候共、丈右衛門、尾左衛門供可仕候、濱町中屋敷、駒込丸山、麻布下屋敷、亦は田安御用屋敷之內、佐々彥太夫宅へ被相退候樣に、兼て心得置可申候、

一萬一急火自火等の節は、諸道具は燒捨可申候、眞證院樣始何茂早々被相退候樣に、兼て相心得可申候、自分諸道具燒捨之上は、銘々家財とんじやく有之間敷事に候、

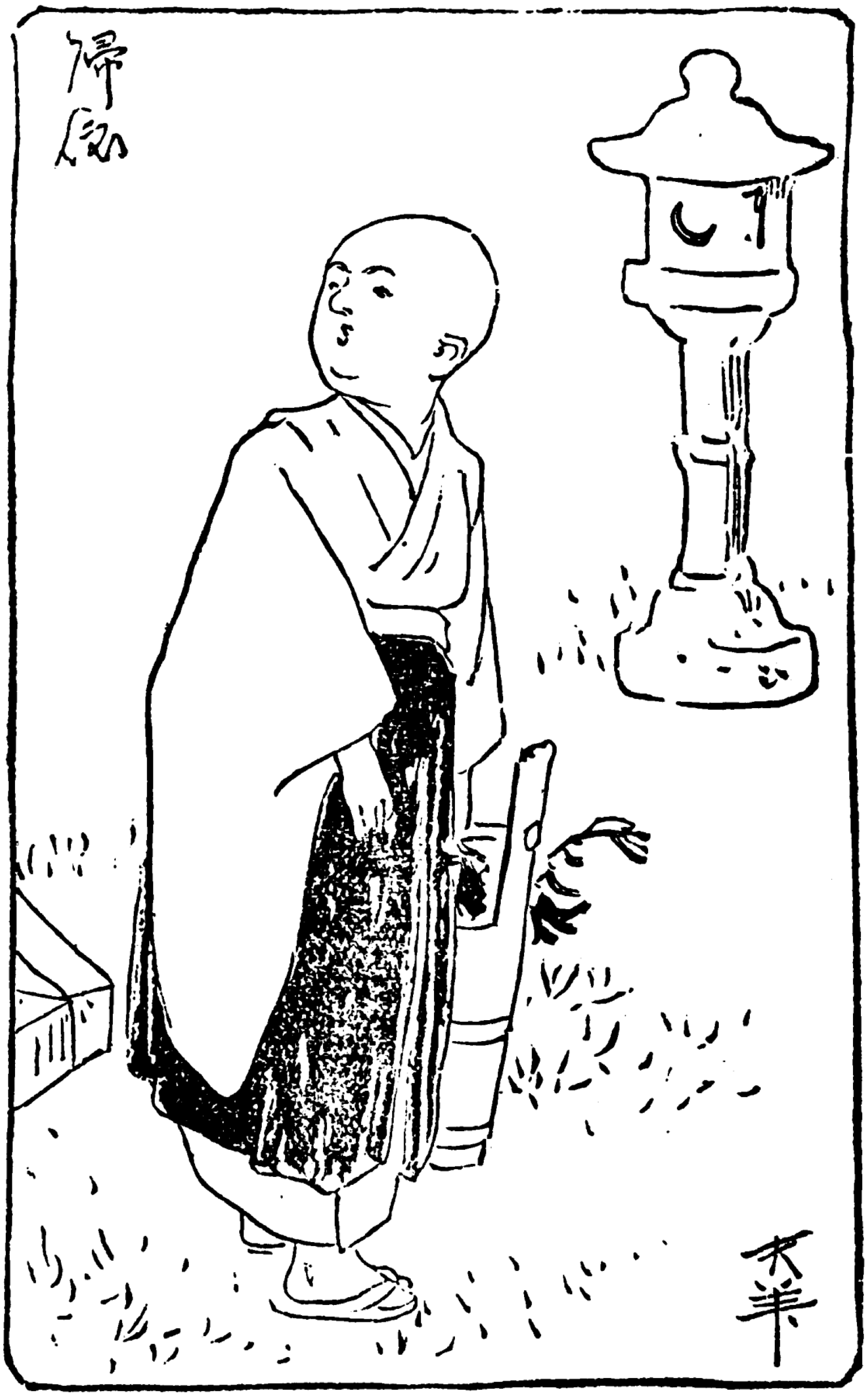
一一類中は不及申、兼而心易き衆、留守別而望置候衆中被見廻候節、座敷へ通し麁末に無之樣相心得可申候、

付ケ、面をも見知り候商人計爲致出入、不見馴ざる商人堅く入間舗候、

一留守の者共、隨分他出不仕樣に相心得可申候不叶用事候節斗可爲他出、若六ッ以後歸り候はゞ、急度相改め大阪へ可申越候、

一留守の者共下々迄、大酒かたく相愼可申事、

一留守のもの共下々まで、喧嘩口論かたく相愼、難致堪忍品有之共、留守の儀候間、堪忍之用、歸府の節申出其沙汰に及べく候、



但酒狂いたし口論等致し候者有之者、急度閉門爲致置、其品の委細大阪表え申越、指圖可相待候、總て不依何事變事不隱置、早々大阪え申越、差圖可相待候

右之趣、留守に罷在、面々確相守可申者也

戌七月

正興

留守之面々へ

即ち右の個條書は、享保三年に大阪在番を命ぜられし時、出發に際して留守の面々へ貽して行かれた

もので、別に珍らしいと云ふ節も無いのであるが、中には大いに味はうべき點も無いでは無い、

現今は文明の利器に依つて交通も便になつたから、從つて一月や半年、又は三年五年の旅も夫程に思は無いのみか、縱ひ數千里を隔つるとも、電信等によつて思ひのまゝを寄することが出來るのに、女子達の教育も非常に發達して居て、昔の女子達のやうに了簡も狹くは無し、幼い時分から人中へ出つけて居るから、無暗に羞耻で引込み勝では無い、

それは誠に嘉すべきであるが、家庭の主任たる者でありながら、輙もすれば其任に適しない者のある事は吾人が屢次見聞する所で、之は果して何に基因するかは尚だ深く究めて見ないから斷定は出來ないけれども、女子教育奬勵の結果、概して女子の心持が大まかに爲つた、換言すれば、注意力が粗漫に爲つたと云ふ事は、慥かに多くの原因中の一に數へらるゝものであらうと考へる、

例へば、良人の不在中に訪問の客があつても、その所用はさておき、その人の姓名すらも聞取つて置か無いで、良人が歸宅の後、僅かに眉目や衣服の摸樣等に依つて其人を彷彿せしめやうとする者がある、甚しきに至りては、その來訪客の事すらも忘れて告げないで、他日良人をして思はざる面目を缺がしむる事もある、又それが爲に非常な損失を招かしむる事もある、更に進んで甚しきは、良人の不在を利用、否、惡用して遊山玩水の慾を恣にする者すらあることを見聞する、是等は尤も極端なる僅少の例を擧げたるに過ぎないのであるが、この他に至りては指を屈するに遑がないのである、

右のやうでは、折角男子が信頼して留守を托して行つても、實は心細い次第と云はねばならぬのである、固より本誌の讀者は、何れも社會の儀表たるべき位置を占めて居らるゝ方々のみであれば以上列擧した事の如きは、吾人の杞憂に屬するには相違なからうが、時として訪問客の有りし事、及び其氏名若くば用件を打忘れる等の事は、隨分無いとも言ひ切

れないばかりでは無く、或時は外出に際して良人が言ひ遺せしことさへも忘却し去りて、啻に所要を辨じないのみならず、却つて不慮の災厄に陥らしむるやうの事を惹起すことが尠なく無いが、是等は直ちに良人の體面を毀損し失墜せしむると同時に、家庭の不統一と主婦たる者の無資格とを曝露するものなれば、最も綿密の注意を要するのである、

殊に旅行をなすに方りては、男子とても縦ひ前に掲げたる程の箇條書を認めざるまでも、まづ不在中に於ける要項は、口頭なりとも成るべく仔細に告げ置くが可い、而して留守を預かるものは能く之を胸奥に記臆して忘るゝこと無く、他日旅行先より還るに及びて 彼の事は聞きたれども、此の事は耳にせざりしなど、文字に徴すべき無きを機とし、己が責任を免れんが爲に、自ら晦ますのみならず、延て良人までをも欺かんと計るが如きは、眞に心事の卑劣なること何に喩へんやうも無いのである、加ふるに若しも此如き不祥事が度重なる時は、家庭の圓滿を缺ぐの動機も或は是に胚胎しないとも限らない、況して男子は常に外に在りて活動する者にして、如何しても家庭の細事等は見落し勝であるから、其所は家庭の主任たる婦人達



が、注意の上にも注意を加へて遺憾なきやうに取扱かねばならぬのである、畢竟賢婦と稱し良妻と呼ばるゝは、常に良人をして內顧の憂なからしむるに過ぎないもの〻美名である、殊に近時の如き交通機關の發達と共に、旅行の頻繁に行はるゝに當りては、更に一層の注意を要するのである、

●麻布宮御敎育係新任

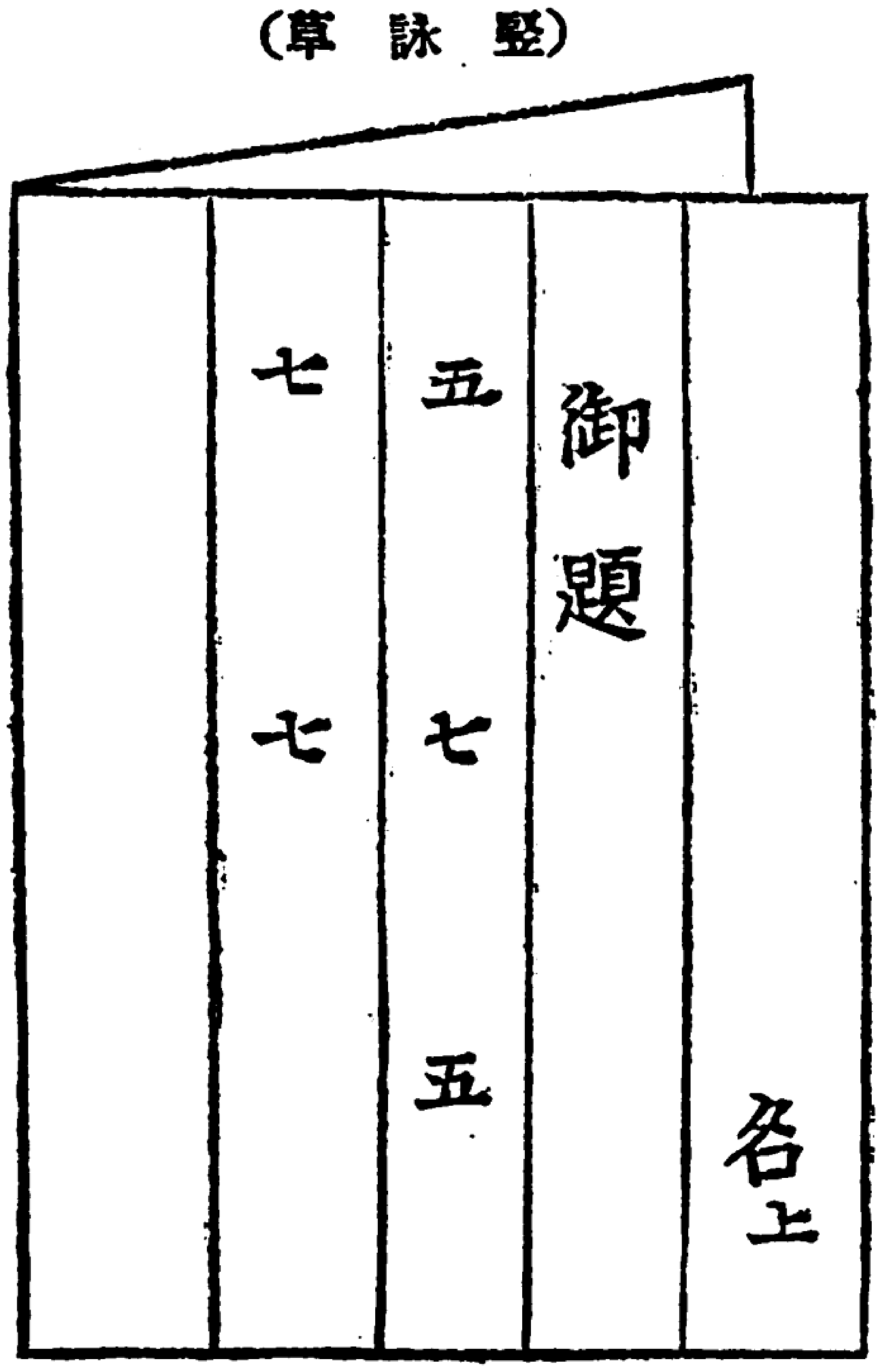
松田法相の姪、石井ツマ子女史、今回富美宮泰宮兩內親王殿下の敎育御用係 仰付られたり、同女史は曩に女子高等師範學校を卒業し故御養育主任林伯の推選に係れるものなる由、

明年の勅題

明年一月十八日宮中に於て行はせ給ふ新年歌御會始の御題は「社頭松」と仰出されたり、尚ほ一般臣民にして詠進する向は、一月十日迄に宮內省御歌所宛に差出すべく、但し一人一首に限り其の書式下の如し、右の用紙は奉書若くは美濃紙にて、用紙の裏面には住所族籍姓名及び官位勳功級爵(あらば)等を詳細に記入すべしとなり、

△注意 (一)毎年御歌所に詠進する中には違式の者多し、此等は總て御歌所にて採用せざる由に付き書式に違はぬやうすべきこと▲一度詠進を差出したる後更に詠みなをし取換を請求する者多きによりこれ等も一切受理せざる由▲期限後到着の者は御前に捧呈せざる例なれば可成期限內に出すべきこと▲字畫讀み難き者も亦不採用に付き注意すべきこと

(竪詠草)



女子教育講演會

第貳回講演筆記（二）

さる十月十九日本誌編輯局の催しにかゝる、第二回女子敎育講演會は、東京諸新聞に依つて傳へられたる如く頗る盛會なりしが、前號誌上より其筆記を掲載して、來聽せられざりし誌友諸孃の一讀に供することゝせり、來聽せられし諸孃亦之を讀んで、更に感を深くせらるゝなるべし

家庭と衞生

醫學博士　岡田和一郎君

家庭に於きまして何が一番目出度いかと申しまするると、家庭を形造る所の一家族皆健康で、無病で長命であるといふことより目出度いことは無いのであります、そこで此一家族の健康なることを計るにはどういふことに注意したら宜からうか、之を少しく私は專門の立場からして申述べて、皆さん方の御參考に供したいと思ふのであります。

家庭の中で一番此衞生及び健康といふことに直接の關係を持つて居られるのはどなたであるかと申しまするると御婦人であります、男子は何れも皆職業に從事して、始終困難なる職業を營んで、さうして重に家外に仕事をするといふ任務がある爲に、家庭にあつては重に婦人方が此一家族の健康のことに重き關係を

持たれるのであります、即ち一家族を成丈け病氣にならぬやう、成たけ健康にしやうといふことも矢張其婦人の與つて最も務めなければならぬ所であるし、又誤つて、一家族の誰か丶病氣になつた時矢張り直接に當つて其病者を看護し、或は其病者の成たけ重くならぬやうに、或は又良い醫者を撰擇して相當の治療法を試むるといふことが、一家の中にあつて主婦が重に掌る所であります、故に此主婦にして即ち一家の婦人にして此衛生上の觀念がなかつたならば其一族は識らず知らず不幸な目に遭ふのであります、即ち罹らないでも宜い病氣に罹り、或は死なゝいでも宜いのにつまらぬ病氣がツイこじくれて死ぬるといふことになるので、甚だ一家族に取つては不幸な譯であります、そこで丁度私は自分の專門は耳鼻咽喉が專門でありまするからして、殊に又時節が丁度秋から冬に移り行く時で、此時期は非常に世の中に風邪の多い時であります、此感冒といふことを土臺にして、さうして一家族が此感冒があつた時にはどれ程の影響があるか、どれ程の結果があるか、又どれ程それが怖いものであるかといふことを説明いたしまして、次いで其感冒に對する主婦の注意といふことにまで論及しやうと思ふのであります。

そこで今世間に出ますると、大概の人は多少鼻水を垂して居るとか、或は咳をして居るとか、隨分風邪の多いものであります、又十一月から十二月に掛けては最も多くなつて、彼處にも此處にも風邪といふことになつて來るのであります、此時期になつて少しく感冒といふことに注意をして下すつたならば幾分か世間に風邪が減るであらう、さうしたならば一家族に幸福が來るといふことを確信するから此問題を出した譯であります。

感冒といふのはどういふものかといふと、我々の醫術の言葉で申しますると即ち鼻加答兒であります。加答兒といふのは何であるかといふと、加答兒といふのは總て外の皮膚と之に對して內部に覆ふて居る粘

液膜、是が腫れてさうして赤くなつて、そこから汁の出るのを加答兒といふのであります、其の鼻の加答兒が即ち感冒であります、

其の感冒はどうして來るかといふと、今世間で病氣の原因として、專ら唱へて居る所の黴菌、即ちバクテリヤ、と申しましてこれは小さい植物でありますが、其の植物の作用に依つて、鼻加答兒が來るのであります、矢張り外のインフルエンザ、或は窒扶斯或は痲疹といふ如き、總ての傳染病と同じやうな工合に、此の黴菌の作用で此加答兒が來るのであります、故に此感冒も一家族内に起つたならば多くは二人三人に傳染して、さうして一人で仕舞はずに同時に多數の人が風邪に罹るといふことは屢々我々の經驗する所ろであります、其風邪即ちさういふ風の鼻加答兒といふものはどうしてそんなら起つて來るか、其黴菌がどうして這入つて來るかといふのが即ち感冒といふ名前の出つて來たる所で、即ち黴菌といふことは風邪といふことでなくて、風邪といふことは外にあるのである、即ち此秋口から冬に移り行くやうな時期には、即ち極く暖かい時候から冷たい時候に移り行く時きには、詰り世の中に荒い風が吹く、冷たい風が吹く其風が身體の何處かに當る、さうすると身體の一部に極く神經の過敏の所でもあつてさうして割合に抵抗力の弱い所でもある、さうすると其處から神經に寒いといふ感じが起る、さうすると其神經に一種の感じが起つたことが粘液膜殊に鼻粘膜あたりに傳つて居る血管神經といふものに及んで、即ち血液を潤澤さして居るのが血管であるが、其血管の神經に其感じが及んで行つて、血管が膨脹するから其處に血が澤山這入つて來る、其の充血がやつて來る所に黴菌が這入つて居るから、其の黴菌が來て感冒といふ一種の病氣が起つて來る、此我々の住つて居る、空氣の中には何れの處にも黴菌が居るのであります、啻に感冒の黴菌ばかりでなく、窒扶斯の黴菌でも結核の黴菌でも色々の黴菌が此空氣の中にあるのであります、殆ど數へ切れぬ

位の種類の黴菌が居るのであります、故に我々は黴菌の無い空氣を呼吸するとは出來ない、始終鼻から黴菌のある空氣を吸つて居るのであります、所が甲の人が風邪を引いて乙の人が風邪を引かぬのは、即ち唯今申した血管の作用で、片一方の人は充血して黴菌が來て、それが身體のなかに這入つて行くやうになつて居り一方の人は健全なる粘液膜を持つて居る爲めに、黴菌が來ても黴菌の方が負けるのであります、言換へて見ると我々は時々刻々總ての黴菌と戰つて居る、即ち世の中に堅苦しい言葉だが優勝劣敗といふ言葉がある、我々人間も生體、黴菌も生體だから、我々が勝つか、黴菌が勝つか、始終戰つて居る、こちらに弱點があつて這入り込む餘地を與へたならば、黴菌が打勝つて終に病氣を起す、こちらの身體が健康であつたならばどんなに澤山黴菌が來ても病氣には罹らぬといふやうになつて居る、それ故に此時候の變遷のときには平生身體を餘まり鍛へられて居ない程、或は平生少しく虛弱な生れで、さうして黴菌に冒され易いやうな身體を持つて居る人が往々風邪に罹るのであります、所で此風邪といふものはさういふ風にして罹りますが、此風邪といふものは至極民間では輕蔑された病氣で、ナニ風邪位というて大概な人は押し、此病氣を極く輕く思つて一向病氣らしく扱はぬといふ習慣があるのであります、所がなか〳〵此風邪は油斷のならぬもので、總ての重い病氣は殆ど初は風邪の狀態で來るので、能く小說にでも何でもある、初は風の心地に伏したけれども、ツイ病が革つて、此程の重い病氣になつたとか、斯ういふ風な結果になつたとか、隨分澤山書物に書かれてあることであります、故に重病になる人は初は風邪に罹つたと思ふ時分に風邪位というて之を輕んずることなく、若し風邪の時分に注意したならば先づ大事に至らずして大概は其不幸を免れるのであります、即ち油斷のならぬのは初の風といふ時期に注意するのであります、此時期が最も油斷のならぬ時期であります、なぜそれがさういふ風に起るべきものであるかといふと、只今もちよ

いと風邪の原因の時に申した如く、世の中に黴菌が澤山ある、風邪の黴菌は風邪だけで終つて仕舞ふから病氣は輕いけれども、世の中の空氣の中には結核の黴菌もあるし、馬剌利亞の黴菌、麻疹の黴菌、猩紅熱或はペストの黴菌總ての黴菌が世の中にある、それに一旦罹つたならば一生治することが出來ない、或は直ちに死んで仕舞ふといふやうな極く危險なる黴菌が世の中にある、さういふやうな黴菌が我々の身體に這入つて居らなければ病氣を起さぬけれども、其門戸を作るのは鼻加答兒等の時に門戸を作るのであります即ち風邪を引いた時に不潔の空氣の中に這入つて居る病的空氣を吸つたならば其人が病氣に罹るのであります、私などは結核患者などの傍に行つて接して居るから、肺病患者の黴菌などは其の室に滿ちて居るが、私は御覽の通り結核にならぬ、即ち私の身體が健康で結核に冒されぬ、あるひは鼻加答兒或は咽喉加答兒、或は病毒の粘液膜を持つて居つたならば、さうしてさういふ病者の所に行つて仕事をして居つたならば、私は夙くに肺病患者になつて居るのであります、即ち只今言うた通り、初は風邪の心地で寝たけれども、それが重病になつて死んだといふことが往々あるか



ら、此風邪の時には餘程注意をしなければならぬのであります。

風邪の爲めに危險な、さういふ續發症の來るなどを恐れるといふことの外に、もう一つ恐れなければならぬことがあります、近來私共が隨分世間で吹聽する爲めに鼻の病氣は世の中の人が非常に恐れて來て、即ち鼻の病氣を持つて居る人は色々な神經の病氣を起して來る、初めは、極く健全なる腦髓を持つて居つた人が一朝にして非常に亂暴に暴れ廻り、或は人に暴行を加ふるといふやうな極く亂暴なる人になる、或はそれに反して非常な引込思案になる、引込思案になつて人に面會するのが厭になる、又平生非常に綿密に筆を執つて居つた人が筆を執るのが嫌ひになり、讀書家が書物を讀むのを嫌ふやうになるのも矢張り一つの病氣の結果である、其外喘息が起つて年中半死半生の狀況で苦んでだり或は年中動悸がして將に心臟が破裂せんとする程苦しく感じて、常に醫者を呼んで藥を貰ふ、或は又年中食物が胃の中に停滯して居つて、物が食へなくて追々顏が蒼ざめて弱る、斯ういふ風に即ち鼻から來る神經症狀を數へ來つたならば殆ど數へ切れぬ程澤山ある、さういふやうな色々に神經症狀を起して來る、

此鼻の疾患は其原因は何處に在るかといふと、矢張り感冒であります、即ち鼻加答兒といふものは初は僅かちよつと熱が出て、頭痛がして鼻が詰つて、鼻液が出るといふ位な風邪であるけれども、是がうまく正當に行けば大概は二三日若くは一週間位で治つて仕舞ふ、昔葛根湯を飲んで居つた時分でも、矢張り葛根湯を飲んで汗を出せば治つて仕舞ふけれども、一旦それに罹つた人が治り方が惡い、治つたと思ふと又罹る治つたと思ふと又罹るといふやうに、段々度數が殖えて來る、數回反覆して度々感冒に罹る中には竟に治つた時に元の形に復さない、鼻の粘液膜が離れた儘で止つて仕舞ふ、さうすると年中鼻がブス〳〵云つて詰つて居るといふ狀況になる、さうすると世間の人は新聞や雜誌で御覽になつた人は御存じでせうが茲に

於て鼻骨鼻加答兒、即ち鼻の中が離れて藥や何かでは治らぬ慢性の病氣になつて來る、其時に色々な不可思議な全身に亘た所の神經症狀を起して來るのであります、斯うなつた時には是こぞ其人の一身に取つては非常な大事件であります、即ち性質が變つて來るといふ丈でも、なか／＼大變であります、平生は圓滿なる人であつたけれども、非常に氣が短くなつて動もすると暴行を加ふる、非常に怒りッぽい人間になるといふやうな者が一家族の中に一人あつて御覽なさい、和氣靄々たる家庭を作ることは出來ない、それに反して大變引込思案の人が出來る、是も一家に取つては大事である、若し之が一家の主人にでもさういふ風な症狀が起つたならば仕事をして呉れなくなる、我々のやうな學問で一家を立てゝ居る人間が書物を讀むのがいやになり、人に接するのがいやになつたり、喋るのがいやになつたといふやうなとではなか／＼職業は出來ない、それは實に一家に取つては大事件である。

それでなか／＼此四十分の時間では鼻の病氣の全部を申す譯にいきませぬ、唯一例を申した丈けでありますが、即ち其結果として色々な傳染病が來るのみならず、鼻の病氣其物が慢性になるとさういふやうな惡結果を來すのであります、それ故に此鼻の病氣だけでもさういふ風なことがあるからして、一家族に於て尠くも風邪に罹らぬやうにするといふことを一家の婦人が御注意下すつたならば、其一家族の幸福といふものは非常に增加することゝ私は信ずるのであります。

そこで私は風邪を引かぬ工夫を是から一つ述べます。

皆さん方が御注意下すつて、一家族の中で即ち主人公なり或は御子供衆なりが若し風邪を引いたならば只今のやうな工合に急性の時には外の病氣が傳染して一生を通じて不幸を見るといふ慢性のものになつて只今申したやうな奇々怪々なる不思議な病氣が起つて、甚だ不幸な目に遭ふからして少くも風邪に罹らぬ

やうに一家の主婦がなされたならば大なる幸福を得らるゝと私は信ずるのであります、そこで風邪に罹らぬ工夫はどうするかといふと、是は即ち誰でも身體を鍛へるといふことにある、我々の生活して居る地球上の現象といふものは、是は風もある、雨もある、水もあれば火もある、時々刻々始終變つて居る氣象である其氣象の中に我々は生活して居るのであるから、唯一つの温度、一つの狀態ばかりに慣れて生活して居つた人では必ず變調に遭つて自分の抵抗力が負ける、我々は其變遷即ち獨逸語でのイバンセン、それに適應して行く、それにちやんと應じて行くやうにこちらの身體を作つて往かなければならぬ、成だけ變化に遇はぬやうに、變化に應じて行くやうにこちらの身體を注意して行けば風邪を引かぬやうになる、それで風邪を引く時にはどういふ風な時に風邪を引くかと申しますと、いつでも變化に適應するといふことに注意が缺げた時に風邪を引く、即ち西洋人は始終洋服を着し身體を包んで、さうして頭に帽子を被つて居るから、途中で帽子を取つて禮をすると風邪を引く、それであるから途中で遭つても手位握つて帽子を取りはしませぬ、偶まに靴を穿かずに靴下ばかりで日本人の家を訪問して、暫く話して居ると風邪を引く即ち足とか頭とかいふものは西洋人には抵抗力がない、始終さういふ習慣であるから、其處に應ずるやうな鍛へ方がしてない、それで風邪を引く、我々はなか〳〵昔から我々の祖先以來帽子を被るといふことばかりに慣れて居ないから、それで帽子を取つて表で談話位しても風邪を引かぬ、足も相當に鍛へられて足袋も穿かずに居るから、少し位裸足で歩いても構はない、其外我々男でも隨分健康と自分は確信して居るけれども、矢張り風邪を引く機會が度々ある、例へば夜會などに出て居つて、大變人の集つた所で酒でも飲んで、さうして車に乘つて歸る、さうすると必ず車の上で風邪を引く、夜會ばかりでない寄席でも芝居でも、暖かい部屋に長く居つて表に出れば風邪を引く、其外例へば夏富士の山に登るといふやうな、極く

高い山に登るといふやうなことをしても、非常に途中登る時分に汗を流して暑いから骨が折れる、さうして上に登つてア、涼しいと思つて腰を掛けて涼むと風邪を引く、即ち前の境遇が後の境遇に急に變化して其時にこちらの身體が能く鍛へられて居ないと風邪を引く、さういふ工合にして風邪を引くのであるから即ちさういふ工合に我々の身體が刺戟されるのであるから、十分一家の家庭に於て注意をするのはどういふ所に在るかといふと、先づ子供に對する注意から申して行きますと、兎角家が裕福な御方で物が十分に足りる人だといふと、子供に兎角厚着をさせる弊害があります、即ち子供が可愛い、成たけ子供に風邪を引かせまいと思ふ爲めに、必要も無いのに三枚も四枚も着物を着せ、襟巻をさせる、頭を包み、全身を包み切つて、是だけ着せて置けば大丈夫風邪を引かぬと思つて居る、所が案外それが風邪を引く、之に反して表に始終居つて、家に這入つて暖まることの出來ない乞食とか、或は極く下等の人民の子供達があります、寒いのに冬單衣一枚で慄へて居る、それで頭にも何にも載せて居らないといふやうな子供は、年中外に居つても風邪を引かない、體力の良いといふことを以てすれば斯ういふ子供の方が確に體力は良い、上流社會の子供は殆ど皆風邪を引き易い、即ち此弱いのは何であるかといふと、必要でないのに身體を包んで仕舞ふ、さうして身體の抵抗力を作らない、作らなければならぬのに抵抗力を造つてない、故に皆さん方は決して子供を愛さうといふ爲めに無闇に必要も無いのに厚い着物を着せるといふことをせずに、寧ろチット寒過ぎると思ふ位に薄着をさせ、且つ時々表に出して運動をさせる、運動をすれば身體が熱くなるさうして段々鍛へて行くと厚い着物に耐へられなくなつて、却て薄い着物の方が起居動作に便利で、能く身體に適當するやうになる、加之單に着物を薄くして冷たい風に當てゝ鍛へるのみならず、昔から我々の先輩の言ふて居ることであるが、成だけ水浴或は冷水摩擦と云つて、隨分冬の冷たい時に水を被つた

り、水で身體を拭くことは難義であるが、是も年中習慣になつて居たならば却て心持が良い例の井上侯爵などは冬でも井戸の水を被つてさうして風邪を引かない、今七十餘になつても我々も及ばぬ位の强壯である、私などが行くといつも君も水を浴びろと云つて、私に水を浴びることを會ふ度毎に勸める、あの人を知つて居る人は勸められない人は無い位であります、即ち習慣になりさへすれば决して難事でなくて、さうしてそれに鍛へられた人は風邪を引かぬやうになります、兎に角厚着をしないやうにするといふこと丶それと身體を始終冷たいものに當て丶鍛へるといふことが極く必要であります。

それからもう一つは室内を餘り暖めるといふことに重きを置かぬこと、是も隨分上流社會に多くて下流社會に少い、即ち西洋室を持つて居る人は室内を無闇に暖める爲めに始終暖爐を焚いて居る、或は西室がなくても巨燵を拵へて子供などを巨燵に當て丶置く、さうすると暖つて居る時だけは宜いが、或機に外に出なければならぬ、或機會には學校に行かなければならぬといふやうに境遇が變らなければならぬといふのが天然の規則であるから、さういふ時にそれまで折角暖めて置いたが爲めに風邪を引く、故にさういふことをせずに、成たけ室内もそんなに暖めずに、外の温度と左程差の無いやうにして鍛へた方が身體の爲めには宜しうございます、併し室内では仕事をしなければならぬ、仕事をするには餘り寒過ぎて暖めてない部屋で仕事をすることは仕事をし惡いから、暖めた部屋で生活をしなければならぬ境遇の人はそれは暖めるが宜しい、さういふ工合に生活した、人が偶に外に出る時は成たけ身體を包むやうに即ち頭に帽子を被ることを忘れてはならぬ、日本人は頭巾を被るが、あの頭巾は餘程宜しい、顏を頭巾で包む、襟卷も宜しい、手袋も宜しい、足袋も必ず穿く、さうして外套も着る、出來る丈け包む、さうして室内に這入つて取つて仕舞ふ、或は羽織を着て居つたならば羽織も取つて仕舞ふといふやうにして、さうして室内

と室外との身體に對する温度の平均を取る、即ち外に出る時は成たけ包む、さうして家に居る時は成たけ輕くするといふやうなことにして、成たけ平均を失はないやうにやつて行けば幾らか風邪を引くことが防げる。

先づ此の如くにして風邪を豫防しますが不幸にして風に罹つたならば其時には成たけ良い醫者を選んで、良い治療法を受けるといふことを一家の主婦は注意しなければなら



ぬ、即ち風邪位と云つて輕蔑をして、先づ風邪位だから醫師に掛るには及ばぬといふことが世の中にある、或は風邪だからヤス醫師に掛つて置かうといふけれども斯んな容態になつたから今度は誰某に見て貰はう、或は風邪位だから賣薬位を買つて飲ませやうといふことをするが、是はいけない、風邪の時に注意をしないと大事になつて醫師は施す所がなくなる。風邪の時に注意をして置けば慢性

に陥らず、重病に陥らずに濟むことになる。

それから若しも病人があつたならば醫師を選擇すると同時に、一家の主婦は相當に看護するといふことに注意しなければならぬ、それで又大凡病氣を治すには藥も必要、醫師も必要だけれども、併ながら目今では看護法の宜しきを得たならばそれで隨分病氣の重いのを防ぐことが出來るのである、看護法が良くなかつたならば醫師がどんなに盡しても藥を飲ましても治すことは出來ない、故に看護に注意しなければならぬ、此看護に最も責任のあるものは一家に取つては主婦であります、即ち一家の主婦が看護法を心得て居つたならば病氣の上に大に効があるのであります、私は今日看護法を述べやうと思ひましたが、時間ありませぬから看護法は時を期して申述べます。

此の如く申し來つて見ると此風邪といふことに一家の主婦が御注意下すつて、少くも子供或は老人などが風邪に罹らぬやうに注意し、不幸にして風邪に罹つたならば其時には良醫を選んで早く治療をするといふことになつたならば、其一家は非常に目出度い一家になりまして、即ち病人の無い一家である、私氣靉々たる家庭を作つて、最も目出度い結果を得らるゝことゝ私は確信いたしますから、どうか只今申述べたことは時間が少いから極く飛して、鼻の病氣の全體を講ずる上でも一部を申したに過ぎぬ、詰り豫防法の一部を述べたばかりであります、けれどもどうぞ以上申述べたことを御參考に供せられたならば、多少家庭に於て利益を得らるゝことゝ存じます(拍手)

茶の話

農學博士　澤村眞君

私は專門が專門でございますから都に御住ひになる貴婦人方の御耳に這入るやうなことを御話するは甚だむづかしいので、演題を選ぶのに大に困りましたが、茲に掲げましたやうなお茶のことでありましたなら或は少し位な興味を起して戴くことも出來るかと思ひまして此題を選びました、固より申しますことは一向新しいことでもなく分り切つたことでございますから、或はつまらぬと思召す方も澤山ありませうが若し又少しばかりでも御參考になつたならば甚だ幸のことゝ思ひます。

御茶と一口に申しますと一向珍しくないやうに思ひますが、隨分御茶といふものは種類が澤山あります、それで御茶の種類とか其拵へ方とか効用とかいふことに付て少しばかり申したいと思ひます、段々說明を致しますが、ちよつと御茶の種類に付て、茲に極く違つたものばかり持て參りましたが此位あります、(玻璃器に容れたる實物數多の種類を示す)モット違つたものになりますと斯ういふ御茶もあります(瓦やうのものを示す)

御承知の通り我々の身體といふものは六割以上は水分から出來て居るのでありますから少し働くと汗が出る、或は働かぬでも尿といふものが始終出ます、此汗と尿とで六割以上成して居る水分が減りますから之を補つて行かなければならぬ、此減る所の水分を補ふには即ち飲物に依るのであります、飲物といふものには色々な種類がありまして、最も單純な水を飲むのでありますが、左もなくて此水の中に或は養ひ分であるとか、或は神經を刺戟するやうな、興奮をするやうな品物を含んだものを用ふることもあります、

水分と同時に養分の澤山取れるものは即ち牛乳の如きもの、或は肉汁の如きもの、或は味噌汁といふやうなものでありますが、今一つは養分は澤山含んで居らないが、一種の刺戟するものを澤山含んで居ると同時に水分を含んで居るものは酒と此茶と珈琲であります、酒は御承知の通りアルコールといふ刺戟物を含んで居りますが、茶にも亦アルカロイドといふものを含んで居りまして、是が刺戟をして色々な働を致します茶は、今日は一般に飲まぬ人も無いやうでありますけれども、併ながら是は非常な以前からあつたものでない、中頃日本に渡つて來たものである、固より茶の木といふものは野生のものが素と日本にありましたけれども、無論茶の飲みやうを知らないのであるから野生の木があつてもそれを利用するといふことはなかつたのである、それから中世になりまして支那に僧侶が留學をする、其時代に向ふに渡つて茶を飲むことを知り、其處から茶の種などを持つて來たのである、茶を始めて持つて來たのは弘法大師といふ人もあり、色々の説がありますが、一番確な記録の遺つて居るのは千光國師榮西といふ人で、其人が始めて肥前に持つて來て脊振山に植えて、其處では餘り育たぬから京都の栂の尾に持つて來て、栂の尾から宇治に持つて來た、それが遺つて今日の宇治の茶園といふものを成して居る、それから段々弘つたものである、野生の茶は無論山に行きますと、澤山ありますが、それは氣附かずに棄てゝ置いたのである。

茶の樹は即ち茲に持つて參りましたが、(實物を示す)之を羅甸名でテヤ、ジチンシスと名けて居る此樹にも澤山種類があるやうでありますが、是は(實物を示す)在來の日木の茶です、是ばかりでなく、隨分葉の大きいのもある、是は支那の茶です、(別に實物を示し) 斯んな大きいのがある、木にも隨分違ひがある、樹は同じでありましても拵へ方に依つて非常な違ひが出來て來る、普通に我々の飲んで居ります御茶は茲に煎じ汁がありますが、斯ういふ色であります、(實物) 通例 綠 色をして居るから、之を綠茶と申して居る、

それに對して赤い茶といふものがある、即ち紅茶です、(實物)斯ういふ工合に眞赤な色をして居る、素と同じ茶の芽でございますけれども、斯ういふやうに赤くなつたり、綠になつたりする、其理窟は後で申しますが、普通の綠茶の方の拵へ方から申して見ますと、八十八夜の頃になりますと茶の新しい芽が出るのです、其丁度新しい芽が出來たといふ頃摘むのです、之を摘んで蒸籠へ入れてちよつと蒸すのです、ホンの僅の間で、一分とは蒸さない、さうして之を焙爐と申して此机位の枠があつて厚い紙が貼つてある、此下に火が這入つて居る、是は隨分熱い、此上で揉むのです、揉む度に茶は縮んで普通見るやうな曲つたやうな形になる、すつかり捻られて、乾いた所で今度篩を通す茶には斯ういふ莖が附いて居ます、植物學で言ふと葉柄であるが篩ふとき之を切つて取つて仕舞ふ、それを篩ひ分けてそれから飲めるやうなことになる、それが普通の煎茶といふのです、此煎茶といふものはどういふものか



ら出來て居るかと申しますと、是は外の植物とは大體に於ては違つたことはありませぬ、矢張り蛋白質があるし、それから堅い所は繊維がありますし、それから脂肪もある、それから又炭水化物と名くるものも矢張りある、けれども其外に茶に特に存在して居るものは何であるかといふと、單仁といふものと、テインといふものと、それから芳香物である、此三つのものが特に茶に存在して居るものである、單仁といふものが茶の中で澁い味を出すのである、澁い味を出すものに皆單仁があります、例へば澁柿の如き單仁を含んで居る、此茶を飲みまして澁い味があるのが單仁である、單仁といふものは純粹に取ると斯ういふ粉になつて居る、之を甜めて見ると矢張り澁いのである、此單仁と申しますものは鐵に合ふと黑くなる鐵を含んだ所の緑礬がありますが（茶の煎汁に緑礬を加て示めす）之を入れると眞黑になつて仕舞ふ、此眞黑になつたのは單仁と鐵とで出來たもので、此黑いものが即ち羽織を黑に染める、あの材料になるもので、それは御茶からは取りませぬが、外の物例ば栗とか椎の皮とかいふものには單仁がありますから、それから取つて染めるのに使ひます、それから其外にテインといふものは玆にある所のもので、丁度絹糸みたやうなもの、是はどういふ味があるかといふと、是は苦いのです、是が矢張り神經を刺戟する　餘り茶を飲み慣れぬ人が茶を飲むと夜眠れなくなる、西洋人などは茶を飲み慣れぬので、眠られぬなどゝ言ひますが、是はテインの爲めである、それから芳香物といふのは何であるかといふと、茶の良い香ひである、良い香ひをして居る茶には芳香物は澤山あるのであります、此三つのものが茶に特別に存在して居るものである。

それでは茶の品質は單仁とテインとそれから芳香物と、其三つのものを調べて見たら直ぐ善し惡しは分るであらう、斯う思はれますけれども、實際はさう簡單には行かない、勿論良い茶でありますと單仁とか

或はテインとかいふものが澤山あります、即ち玉露の如きものは緑茶の中では最も良いのでありますが、此玉露には無論澤山あります。けれども同じ煎茶を分析をして見て、單仁とテインが澤山ある、其茶を實際飲んで見て味ひが良いかといふとさうはいかない、だから良い茶には單仁とテインが澤山あるけれども二つの物の多いものが必ず良い茶とは言へない、夫で今日は分析して此茶は良い茶であるとか、惡い茶であるとかいふことを定める譯にいかない矢張り飲んで見て極めなければならぬ、それから香ひの如きものも今日の所ではまだ此香ひは目方にして幾らあると極める譯にいかない、矢張り鼻で嗅いで善いとか惡いとかいふことを定めるより仕樣がないのであります、茶はかういふものから出來て居りますが、其分量はどれ位あるかと申しますと單仁が先づ十から二十パーセント、此茶の葉の中に一割から二割位存在して居る、それからテインの方が二分から四分、即ち二パーセントから四パーセント位存在して居る、それで味ひは無論單仁とテインとの割合により異なる、此外に砂糖分が矢張り茶にある、さういふものが融けて幾らか甘味が出る、それから香ひが出る、さういふやうに工合好く融けた時に飲めば一番旨い、茶の煎じやうが惡いと苦いことがあつたり、全く香ひが無かつたりする、此煎じ出しやうも餘程大切なことであるが煎じ出すには、非常に熱い湯は無論いけないのであります、それからもう一つは長く煎じ出すことを昔から嫌ふ、温い好い加減の温度の湯で餘り長くなく煎じ出すと一番良い味が出る、無論玉露の如きはさういふ煎じ方をしなければ幾ら玉露でも味が惡い、それはどういふ理由であるかといふと、矢張單仁テインなどの關係がある、この二つのものは、矢張り同じやうに融けるものであるけれども、融け易いのと融け惡いの區別がある、一體茶が幾ら位から融けて仕舞ふだらうかと申しますと、すつかり色の附かぬ位まで煎じ出した所で半分位しか融けぬ、半分は茶滓になつて殘つて居ります、それから茶の中にある所のテイ

ンとか、單仁とかいふやうなものは色の着かぬ位まで煎じ出して、どれ位融けるかといふと、四割位しか融けぬ、後の六割は茶滓の方に遺るのです所が時間を長くし、或は短くするとか、或は湯の温度を高くするとか、或は低くするとかいふ時には、二つのもの、融け工合が違ふ、此單仁といふ物は比較的融け惡い、テインといふ方が比較的融け易いだから温い湯で餘り長い時間でなく煎出をする時にはテインの方が能く融けて、單仁の方が比較的少なく融けて居る、それから甘味を出す所の砂糖分などは無論融けて居る、其時には大變茶の味が良い、所が長い時間熱い湯で煎出をすると單仁の方が比較的良く融けるから、今度は非常に澁くなる、これでありますから時間と湯の温度といふものに氣を附けぬと幾ら良い茶でも味良く出すことが出來ぬ、これは水も無論關係するのです、水は御承知の通り軟水と硬水とある、軟水といふ方は餘り色々なものを包含して居らない水である、硬水といふ方は石灰を含んだ水であります、其硬水の方は極くいけない、軟水といふ方でなくては茶を煎じ出すのにいけない、硬水といふ方でありますと第一に茶の融け方が惡い、それからもう一つは味が惡い、硬水夫れ自身が味の惡い水であるから、それで昔から軟水を選んで煮たものである。

普通に飲みますのは今申した通り煎茶でありますが、綠茶の中で極く上等のものは、玉露といふのである、玉露と普通の煎茶とは何處が違ふかといふと、拵へ方に大して違ひはありませぬが、茶の芽が違ふ、普通の茶でありますと天然に成長するに任して、芽が伸びた時に直ぐ摘みますが、玉露に製するには芽の出る前に上に日が當らぬやうに茶樹を覆ふて仕舞ふ、茶の上に莚を張つて日光に當てぬやうにすると、此葉が大變軟かになる、今日は茶でなくて外の野菜の如きでも、野菜は軟かい方が旨いから、矢張り日が當らぬ所に少し入れて置く、それを軟化法と申しますが、それと同じ理窟です、さういふやうにして芽を摘

んで、製法は同じですそれが玉露であります。

もう一つ碾茶といふものがある、茶の湯に使ひます、碾茶も矢張り今申します通り日覆ひをした所の芽から摘む、是は揉まないで唯乾かすから、ちつとも撚れて居らぬで葉の儘になつて居ります、之を碾いて粉にしたのが茶の湯に使ふ所の碾茶といふものになる、無論葉の加減や肥料の加減で色の濃いのも淡いのもある、乾かした茶の色の濃いのを拾ひ別けたのが濃い茶となる



し、色の薄いのが薄茶といふものになる、拵へ方はどちらも同じです。

茶は無論内地で非常に澤山消費する、我々は朝から飲んで居るから内地で消費するのが澤山であるは明かである、外國にも澤山出る、一年に一千萬圓位外國に出る、外國に出るのは矢張り煎茶の方でありますが、拵へ方の大體は同じことですが、唯揉む時に玉露の如きものでありますと必ずしも葉が眞直ぐにならぬで宜しい、鷹の爪などといふ茶の銘があるが、葉が曲つて居る、しかし外國人は葉の曲つたのは嫌ふ、眞直ぐでなくてはいかぬ、それで殊に外國に出す爲めには斯んな茶を造る（實物を示す）まる

で針のやうに眞直である之を天下一製或は針製と申しますが、是でなくてはいかぬ、しかし斯んな長い形のまゝで、外國に行くかと云ふとさうではない向ふまで行かぬ中に横濱か神戸で皆短いものに折れて仕舞つて、繪の具を入れて色を着ける、それを再製と云つて居りますが、釜に繪の具を入れて攪混る、さうすると大變に奇麗になる、再製をすると丁度御化粧をしたやうなもので、全く白粉を着けたやうになる、艶が出て眞白な粉を吹いてあります。

次は紅い茶である是はどうして斯んなに紅くなるかといふと、拵へ方が全く初から違つて居る、綠茶の方であると先程申しました通り取つて來たのを蒸籠で蒸してから焙爐の上で揉む、所が紅茶の方では蒸籠で蒸さぬ、芽を摘んで來ると、日に乾して置いて、之を麻の袋に入れて、通常足で踏む、手で揉んで居つては揉み切れぬから足で踏む、揉んだのを一塊にして布をかぶせて温かい所に置くと、此茶が綠色であるのが紅くなつて仕舞ふ、此紅くなつた爲めに煎じ汁が赤くなる、普通の茶を紅茶に製するとなぜ紅いかと申しますと、それを說明することは極く簡單である、といふものは植物の中には酸化を起すものが葉の中にある、之をむづかしく言ふと酸化酵素と名ける、此酸化酵素は蒸すと蒸氣で殺されて仕舞ふ、働くことが出來ない、所が紅茶の方は初から蒸さないから此酸化酵素は活きて居る、揉んで桶に詰めて置く時に此酸化酵素が働いて青い物を分解して仕舞ふから、赤いものが出來る、さういふ說明になつて居る、初め蒸すと蒸さないので青い色が出るか紅い色が出るか定まるのであります。

それからもう一つ臺灣で製する所の烏龍茶といふものがある、博覽會の時に臺灣館の二階に出して居つた、此烏龍茶といふものは綠茶と紅茶の合の子見たやうである、煎じ汁も其通りである、丁度堺のものであります、製法も少し違ひますけれども餘り長くなりますから其邊は略して置きます。

それから愈々珍しいのが此硬いのです、是は磚茶と云ひます、即ち英語でブリックチイと云ひます、即ち煉瓦みたやうであるからである、是はどうして拵へるかといふと、茶の中で極く下等なものであるといふのは紅茶を造るにも綠茶を造るにも再製する時に粉が澤山出る、其粉を固めたものが是です、或は極く惡い茶を殊更に粉にして少し蒸して温つた時に非常の壓力を加へて型に入れて固めて仕舞ふ、さういふ下等な茶であるから斯んなものを飲む者は極つて居る、即ち露西亞人位のもので、外の所には餘り行かぬのです、之を削つて煎じて飲む、或は西比利亞旅行などする時に茶碗がなくて不自由な時には、是でコップを拵へて之に湯を入れて飲むと長く茶のやうに飲めるといふことが新聞などに書いてある。

此外茶と名の附いたものは澤山ある、例へば甘茶、四月の八日に使ふもの、或は田舍で飲む　枸杞茶といふものがありますが、是は茶といふ名が附いて居る丈けで、此茶とは全く關係の無いものです、即ち茶の中にはテインといふ特有なものがありますが、此のテインは甘茶或は枸杞茶の中にはない、テインといふものは茶或ば珈琲の外にはない、それで甘茶とか枸杞茶といふものは茶の中には入れることが出來ない之を幾ら飲んでも神經を興奮するやうなことは無論あり得ないのです。

茶の種類、製法としてはさういふものでありますが、今度は茶の効用でありますが西洋人は茶を大分嫌ふ、其嫌ふ理由は何であるかといふと、單仁が消化に惡いといふことです、消化器の中にはペプシンといふ消化酵素があるし、腸に行くとトリプシンとかアミロプシンとかいふ消化酵素がある、單仁は此酵素を沈澱さして仕舞ふ、それで消化が惡くなるといふのでタンニンを含んだ茶を飲のは不消化病を起す元だと云つて嫌ふ、それからテインといふものは前言ふ通り神經を刺戟するし、又た心臟などが働くから血液の循環が良くなると賞める方からは言ふが、惡く言ふ方から言ふと神經の病氣を起し易いテインとタン

ニンの二つを含んで居るから茶は飲まぬやうにしなければならぬと西洋人には言ふ者がある、所が東洋人は茶の害を言ふ者は更にない、昔から茶の効は説かれて居る、前にも申しました通り茶の實を初め支那から持つて來た千光國師榮西の著書に喫茶養生記といふものがある、其中に斯ういふことが書いてある、茶は養生の仙藥　延命の妙術なり、山谷之を生ずれば其地は神靈なり、人倫之を採れば其人長命なり」といふやうな工合に非常に賞めてある、又多くの人が此茶を味ふと睡魔を拂ふといふことを言つて居る、實際それは西洋人などは少し飲んでも眠られぬから睡魔を拂ふのは事實に相違ない　睡魔を拂ふことに付て支那あたりでは傳説がある、睡魔を拂ふのはどういふ譯かといふと昔或聖人があつて非常に勉強して居つた、所が眠くなつて仕樣がない、一生懸命耐へて居つたが、いつか知らぬ眠つて仕舞つた、眠が覺めてから大に驚いて、眠るやうな眼はあつても仕樣がないといふて眼を抉り出して棄てゝ仕舞つた、其眼から芽を出したのが茶である、茶は素とさういふ所から出來た植物だから眠を拂ふと、支那人相當なことを言つて居る、兎に角害といふことも數へて見ればありませうけれども、併ながらまだアルコールに較べると害は少いに相違ない、夫れで私共の希望する所は昔の如く茶の湯といふものがもう少し盛になつて、今日のアルコールの代りに來客のある時には、かん酒とか麥酒とかいふものゝ代りに茶をすゝめると云ふことになつたなら、社交上も却て今日より良くはないかと思れる、茶の御話をするのも世間に昔の通り茶の湯などが流行つて欲しいと希望する爲めでございます、甚だつまらぬことを申しました(拍手)



詞藻

佐々木信綱先生選

兼題 和歌 落葉

天

猿曳きの背にねぶりゆく猿の子に
紅葉ちるなり山かげの道　美濃 目島眞砂子

評 何事を思ふともなき猿曳の顔に小春の日影閑にやさすらむ

地

魔ヶ淵や雨雲ひくきたそがれに
音せで落つる木の葉淋しき　横須賀 柏原みな子

評 物すさまじき淵のさまもうかびて

人

霜しろき落葉ふみわけ我せこは
けさも野山のかりにいでつゝ　名古屋 山根しげ子

評 やさしき山里人の妻の心よく寫し出られたり

秀逸

かきわぐる髮のほつれに櫛折れぬ
落葉入りくる秋風の窓　東京 鵜澤すみれ子

華やかに筆とり並び歌合す
五六人よき落葉する家　相模 飯沼君代子

あな寂し一葉二葉とこぼれきて
呪ふが如く風の梢に　神奈川 服爲八重子

幹たかき鷹の古巣もはらはれて　愛知 後藤のぶ子

ものさびしくも散る木の葉かな
東京　堤　いく子

淋しさの落葉の音は山陰の
媼が家のものぬふ窓に
茨城　金澤すゑ子

おくつきの落葉掻きよせぬかつけば
又散りかゝるわが袖の上に
千葉　益子智子

吊したる柿は障子に影うすく
桐の落葉の音のさびしさ
松山　上原のぶ子

はらへとも〳〵ちる紅葉に
おこたりかちの朝きよめかな
岩代　岸野菊子

はら〳〵と紅葉みだるゝ夕風に
秋を悲しむ山の温泉の宿
横須賀　高橋つね子

温泉の里に通ふ村人跡絶えて

落葉埋るゝ九十九折哉
常陸　岡田萬子

山里の垣の下行くやり水の
音もとたえて散る木の葉かな
新潟　岩本芳子

秋寒や時雨れて晴れて夕日紅う
もみちはら〳〵散る山の家
横須賀　渡邊比佐子

音もなう木の葉こぼれて池の上
鯉輪を畫く午下りかな
東京　高橋珍子

はだ寒く床はなれうき窓の外に
落葉ふむなりにはとりのこゑ
美濃　傍島みゆき子

くれ秋や楡の落葉をしとねして
いらふ乞食の親子つれ哉
東京　中村千代子

故郷の空なつかしみたゝすめば

心おりげに散る紅葉かな

兵庫　有村繁子

散りつもる落葉かきわけ行く道の
ゆくてにひゞくいりあひのかね

飛驒　中西よし子

鐘にちる紅葉のゆくへさながらに
我身もかくと消えぬと思へば

飛驒　南峯子

撞きおへて鐘樓下る老僧の
衣手さむく紅葉ちるなり

神戸　三日月堂なみ子

木の葉ちる響冷たく闇深き
雜木林の夜はふけにけり

東京　秋田登志子

落葉敷く道に四人行く見えて
夕日冷たく木枯の吹く

美濃　西尾靜子

落葉焚きて病むいとし子の粥を煮る

さむしろ寒き小夜時雨哉

美濃　藤掛しな子

大榎の木落葉はげしき夕風に
筧とざせり山かげの家

伯耆　錦織賜子

亡き稚兒を忍ぶ寐ざめに窓をうつ
紅葉の音にまたも泣かるゝ

甲

○から錦ちりかひくもる夕時雨ふりこそまされ衣手のもり　東京　高宮安子

○こがらしに吹きのこされし柿の葉のつれなき雨にちる思ひかな　東京　奈良八重子

○樂堂に寂寥の曲しつみゆきて紅葉かつちる秋の夕ぐれ　千葉　吉松りか子

○小兎のおち葉をあさる音も絶へてみそれとなりぬ裏の小林　伯耆　伊藤春子

○客まちていまし淸めし庭のおもに時雨ましりに落葉する哉　名古屋　不破きみ子

○大銀杏樹ちりて黃金の大寺や箒手にして僧ひとりたつ　東京　林艶子

○とふ人もまれなる宿としられけり門邊は落葉散るにまかせて　和歌山　植木撫子

○風ざそふ花には音もなかりしがちる木の葉こそ哀れなりけれ　三重　大西數子

○　京都　佐藤清子
山姫のたひしかさしかおのかつらわか黒髪に散れるもみちは
○　稲井　牧かれ子
木枯にあらそひかれて柿の葉のちるおとさひし夜半のねさめに
○　東京　佐々木壽子
やみませる母をみとりのゆふへゆふへ一つ一つと散れる梧の葉
○　美濃　落合かき子
ふるさとを忍ふ夕くれ庭にたては袖もしめりて紅葉みたるゝ
○　美濃　俊島曉子
水痩せて萩問音するこからしに誘はれて散る岸の紅葉は
○　廣島　平城淳子
落葉ひろふ賤か心は如何ならんくまてにかくる虫のなきから
○　東京　吉松百枝子
あかさりし庭の眺めの紅葉をいかなる風の吹きちらしけむ
○　東京　よし子
昨日まてあかて眺めしもみち葉の散らぬ日もなく早なりにけり
○　宮城　末永喜惠子
やり水の流にたそやもみちはのあかきこゝろをうかへそめけむ
○　千葉　瀬上孝子
ふく風に木の葉亂れて飛ひちりぬゆくてや秋をおくるなるらん
○　茨城　莊野とく子
はら〳〵と淋しき音を先きたてゝ庭のもみちそ散り初めにける
○　千葉　益子操子
山かけの椋の林を我ゆけは山鳩なきて木の葉散るなり
○　松山　田村多豆子
うつろへはちるを習ひの紅葉ばをあらしに罪を誰かおほせけむ
○　美濃　後藤英子
龍頭ひて落葉かく子は朝もやの山すそ小道唄うたひゆく
○　東京　吉岡龜子

見なれつる庭の苔路もしき石もうつみかくしてちるこのはかな
○　東京　原三幸子
かきよせて酒あたゝめん人もなし庭はおちはのやまとつもれと
○　東京　河合清子
ふきわたる風のすさひに玉たれのをすをこゑてもつもる紅葉
○　東京　五十嵐清子
むらからすねくらあらそふ夕暮のつはさの風にちる紅葉かな
○　筑前　島村作子
あたら世のふけゆくまゝにまたゝきて文よむ窓にちる木の葉哉
○　松山　松山松子
庭もせにちりし紅葉をかきあつめ酒あたゝむる時はきにけり
○　東京　檜皮芳子
はけはちりひろへは落る木々のはに庭もる人はいこふ間もなし
○　甲府　名取正代子
さゝやかの中庭なれと日に幾度はき清むらむ落葉するころ
○　岩代　岸野常子
げたものゝ足跡見ゆる霜の上に月影さむく木の葉ちるなり
○　東京　神谷てる子
かくてちるわか身のはてと思はれて落葉にぬるゝ袖しぐれかな
○　秋田　古瀬惟子
月きよくねくらのとりもみえすきてくもらぬ雨や木の葉なるらん
○　東京　松原岑子
ひら〳〵と胡蝶群れとぶとはかりに庭のいてふの風に散るなり
○　佐賀　尾方やゑ子
よもすからとふ人もなきしはの戸をおとつれ顔に散る木の葉かな
○　美濃　芳翠敏子
かれ葉みな底にしづみて梢のみあらはにてらす冬の夜の月
○　美濃　長濱鬮子
朽舟に少したまれる水すみて落葉をてらす柳もる月

○　秋田　長田せつ子
あられにも雨にもあらで窓のとをたゝくは風のおちばなりけり

○　東京　松村とし子
乙女子の文のしをりとあつめけむ庭の紅葉は袖にあまれる

○　埼玉　横田やな子
霜ふかきさとのはつれのわかれ道つもる落葉をたよりにそゆく

○　埼玉　横田須磨子
山陰の道のしるへの石ふみもつもる落葉にうつもれにけり

○　東京　千秋雅子
吹きあるゝ枯風いたる山々の木々の梢は空しくなりぬ

○　神奈川　鈴木まつ子
世の哀はかくこそありけれはらはらと落る木の葉を見る人もなし

○　美濃　杉山芳子
たそかるゝ小野の松原小松原落葉かく子に木枯の吹く

○　伯耆　錦織とみ子
ましら鳴く梢の柿のかつゆれて吹く枯風に紅葉ちるなり

○　越後　松永繁子
枯はてし淺茅の庭に露おきて紅葉黄葉美しくちる

○　肥後　友永章子
昨日まて風にたへたる梢よりあさ霜さむくちる木の葉哉

○　伯耆　錦織さち子
待宵の香爐つめたくふけ初めぬ紅葉のおち葉ひろひつゝ居む

○　肥後　友永常子
おもしろく我木末より空にたつ島のあとおふ風のもみち葉

○　越後　杉山はく子
男鹿鳴く山のしたいほ訪ふ人のまれなるやどに木の葉散るなり

○　神戸　井口その子
野狐の聲もきこえて枯葉ちる音騒かしく夜はふけにけり

○　伯耆　錦織千代子
雛僧のはゝき持つ手も朝寒の破布の袂に木の葉みたゝる

○　韓國　原野みき子
秋の夜や君音つれて窓打つと落葉の音にむれをとらしぬ

○　兵庫　田淵みき子
山風の木葉吹きまく聲きけはそこはかとなく物そかなしき

○　秋田　齋藤たけよ子
神無月てるひのかけもさゆるまてかせにまかするきゝのもみちは

乙

○　千葉　中川千鶴子
園守りのかしらのしもに夕はえのかけをあひつゝちる紅葉かな

○　松山　巽秀子
くれかゝる秋の山路をいそくなる旅人おひてもみちちるなり

○　東京　青木たま子
きのふまてなかめし梢落葉してふまゝくをしき庭のおもかな

○　下野　土屋藤花子
水垢に小舟沈みて哀れなりうかへる木の葉ふちにすかりて

○　磐城　木幡きよ子
落ちて來る風に帆を上ぐ木葉舟思ひや走せる住吉の浦

○　大阪　磯俊子
片破れの月かけさゆる谷川を下す筏たに紅葉ちりしく

○　長野　北澤清子
あぢきなき秋をうらみて此落漠涙をつくしたる色の見ゆるを

○　紀伊　茨木とし子
時雨かと立出て見れは我庭にほろほろと散る木の葉なりけり

○　長野　北澤千枝子
さえ渡る月もやとりて山か家にもみち散る夜のさむくもある哉

○　神奈川　長谷川すみ子
母こひて泣き入る乳兒をすかしつゝむかう川邊に散るやなきかな

○　下総　高木美代子
かげやどす月のひかりも過ぎぬとや落葉しきたる山の家の池

○　兵庫　梶原京子
柴負ひて歸るさ急く大原女のゆふへの山路紅葉ちるなり

○　神奈川　飯田白露子
住む人のありとも見えぬ古寺に落葉こゑある夕くれの庭

○　神戸　今西操子
すさましう木の葉飛ひ交ふ大比叡の麓の庵そ冬は來にける

○　神戸　すい子
野も山も早霜枯れの色見せて落葉の音そ今は戀しき

○　美濃　長縄みの子
入相の鐘のひゝきにくれわたる庭に音して紅葉散るなり

○　美濃　吉田のぶ子
とりはみなおのがねくらに急くなり夕へさひしく木の葉散りしく

○　埼玉　野中まつ子
行き暮れておくやま里に宿かれば耳にひまなき木の葉ちるおと

○　東京　上杉静江子
昨日より吹く木枯にわが庭のもみちのにしき木ちりはてにけり

○　宮城　大槻慶子
拂はぬも又ひとしほに見ゆるかなにしきにうつむにはのもみちは

○　陸前　大槻初音子
夕日さす學のまとにおとたてゝぬれぬ時雨やおちばなるらん

○　東京　よしの子
なき友の形見の楓秋暮れて同し運命に散りも果てけり

○　松山　木村弘子
めでられし庭の紅葉も昨日今日落ちてはかなき塵となりけり

○　兵庫　古東靜子
秋ふけて落ばが上を吹く風の音もさひしきこの夕哉

○　長野　毛利かつ子
むら千鳥立かとみればこゆるきの磯山紅葉風に亂るゝ

○　淡路　古東すみれ子
野分して殘る柿の實二ツ三ツ積る葉下にすだく虫の聲

○　和歌山　福原菫子
人の世もかゝれとそ思ふほろ／＼ともろくもちるか峯のもみちは

○　東京　岩谷淺子
影やどす岸の紅葉をふく風に落葉みなきる水の面哉

○　千葉　金子みさを子
山からすねくらにかへる夕風にあたら紅葉のちるそはかなき

○　岐阜　山田はき子
かきて來し軒の落葉に秋送る虫か音きゝぬ母上の里

○　東京　松本まつ子
よもすから落葉やふかくつもるらむ庭にきこゆるこがらしの風

○　東京　小島榮子
玉すたれなひくひまよりふきいれてよもの落はを見する風かな

○　東京　田代糸子
こがらしの風にみだるゝもみぢはににしきをしける庭のこけ道

○　東京　高野元子
椎のみをひろふうなゐのつゝ袖に（ほろ／＼と散るゆふもみぢかな

○　松山　木村芳子
昨日までめでにし紅葉今朝ははや落てはかなき數に入りけり

○　岸代　菅野和子
根にかへる落葉は風にまひ上りにしきのうつまき美しいかな

○　上野　井上倚子
時雨してとりのはゝきのさひしさにおちは數ふるれやの朝まで

○　神奈川　中島兆子
このはちるきぬかさ山もきぬゝきて麓のいほもはだかとなりぬ

○　岩代　菅野みさ子
霜ふかき朝の幸やあさひかげおとなくちれる木葉さひしも

○　佐賀　尾方綾子
すが〳〵にはらひつくして庭の面にちるもをかしき木々の紅葉

○　秋田　細谷はる子
山寺のいりあひつくるかねよりも木の葉の落る音ぞさびしき

○　靜岡　岡田いち子
露わけつ乳くばり來る少年の駈けゆくあとに落葉たちまふ

○　神戸　有村とみ子
ありとしも思はでもすそぬらしけり落葉重なるにわたいつみに

○　土佐　秋月廣江子
君とふたり二人遊びし森かげと落葉かく子もなつかしき哉

○　埼玉　横田秋子
道とへはゆびさすかたや家ならん落葉かくなり里のうなゐ子

○　名古屋　中村なみ子
おとつれは君いまさすに庭あれて木の葉こぼるゝ冬ぐれの庭

○　美濃　石原たつゑ子
あらそひて朝風朝日美しき銀杏の落葉拾ふ少女の

○　美濃　杉山藤技子
柴人もむすばすなりし山の井は落葉〳〵に埋れにけり

○　奈良　栗山たか子
木枯のさそへることに紅葉せしかた山はやしまばらにぞなる

○　播磨　田淵ふし子
文机のあたりさびしき窓のへにをり〳〵訪ふは木葉なりけり

○　奈良　栗山俊子
栗ひろふうなゐが袖にかゝりけりふく風さむくおつるもみち葉

○　神戸　足立あさ子
心なき草木にあれとおほけなくも埋む落葉や神の御手洗

○　神戸　足立ゑい子
月冴る落葉の上におく霜をかけやうつむと思ふ夜半かな

○　旭川　佐藤央子
なき友のおもかけしのふおくつきに時雨ましりにふる落葉かな

○　播磨　田淵きさ子
打見ては手にせるはゝき打捨てゝ心おかれぬ庭のもみちは

○　廣島　鈴森きみ子
散りしきし木の葉は日ことおく霜にいよ〳〵白う氷りけるかな

和歌兼題　歳暮

天　美濃　傍島みゆき子

日毎〳〵たゞおなじことかく日記の今年もくれぬ文机のもと

評　日記をかくはおもひでの爲にも文かき習ふ爲にもいとよきならはしなり來む年もつとめてかきいで給へ

地　東京　堤いく子

としの市どよみを遠く高臺の小窓にきゝて春の衣ぬふ

評　年の瀬こえがたきあはれなる人ある事をも忘れたまふな

人　甲府　取名正代子

をさなごの生立つをのみ待つ身には

暮れゆくとしもうれしかりけり

評 女らしきうた

秀逸

東京　林艶子

無限より無限に亘る時の間を
今きさむなる年の暮かな

神奈川　長谷川すみ子

ころもたつ母がかたへにおさな子の
はるまつゆめやたのしかるらむ

美濃　林こう子

思ふこと多きか中の一つたに
なさてことしも暮れにけるかな

美濃　松田せき子

花の春紅葉の秋のとく過ぎて
おこたりかこつ年の暮れかな

美濃　傍島曉子

つよきこと言ひてのこして別れしも
故郷思ふ年のくれかな

伯耆　錦織よし子

すゝ拂ふさゝめきやみて一しきり
となりやしきに春のうた高き

埼玉　野中まつ子

怠りのちりのみつもる文机に
むかふ甲斐なく年は暮れけり

愛知　後藤のぶ子

行く年をなに惜むらんあたらしき
はるは間ちかにきぬへきものを

淡路　湖東すみれ子

山住の身をばわびつゝかこちつゝ
又もことしの暮れんとぞする

東京　西村直子

讀ふみはまだなかばだにいたらぬを
年はとぢめとはや成りにけり

東京　小島榮子

こむ年を待とをしむとふた方に

こゝろいとなきけふのくれかな

横須賀　柏原みな子

晴着縫ふ針の手止めて來む歳の
樂しき春をそと畫き見つ

秋田　古瀬惟子

牛ひきてかへるひとさへいつとなく
あしとくなれる年のくれかな

東京　松原岑子

つみもなく初春をまつをさな子に
たちかへりたき年のくれかな

名古屋　山根しげ子

いたつらに今年もいまはくれ竹の
は末になりて事繁きかな

神戸　足立あさ子

おとろへし母の心やくもらむと
鏡をかくす年の暮かな

甲

○春をまつ年ををしむも世の人のこゝろ／＼のけじめなるらん　千葉　澤上學子

○梓弓はるを一夜のへたてにて矢よりもはやくすくる年かな　東京　高宮安子

○かくもせむかくもせきしとおもふまに早くもとしの暮てける哉　伯耆　伊藤春子

○皆人のあゆむ音だにせわしけにおしつまりたる年の暮かな　千葉　中川千鶴子

○煤拂ふ音はきこえて此年の殘少なくなりにけるかな　東京　林　環子

○何事もはかとらぬまにあけくれてとしのひかりもけふとくれぬる　宮城　末永喜惠子

○たらちれの母のいたつき癒ゆときく思ふ事なきとしのくれかな　三重　大西數子

○嬉しさのむかしにかへて今はたゝ暮れ行く年に身のうらめしき　京都　佐藤清子

○日々書きしうれしさあまる此日記うき事かゝで此年も過さん　長野　北澤清子

○としの暮かゝる山家の水車いつもなからの心地に見えつ　下總　高木みよ子

○文机によりて文よむその間たに心せはしき年のくれ哉　兵庫　梶原京子

○よき衣ぬひをはりたりすゝとりて心しつけき暮にもあるかな　神奈川　飯田榮子

○ほと／＼に春の團欒のいとなみに人足しげき年の市かな　神戸　今西操子

相摸　飯沼君代子

何となく待つにうれしき夕窓や年をのせ行く雲なつかしき

○　陸前　大槻初音子

かしましきよをはすてたる我庵もうさはのかれぬとしのくれ哉

○　淡路　湖東靜子

こその暮ちかひし言葉のあたとなりて又くりかへす昨日今日哉

○　美濃　後藤英子

姉嫁き母老いませし此年の暮をし忍ふ故郷の家

○　岩代　岸野菊子

新らしきとしをむかふと神棚のすゝうちはらふ姉妹かな

○　岩代　岸野常子

をしめともかひなきことゝ知りなからなほをしまるゝ年の暮哉

○　東京　松本まつ子

ひとゝせを月雪花にあそひてもをはりときけはをしきけふか那

○　東京　吉岡龜子

あたらしくむかへん年は待なからけふのとしめの惜しまるゝか那

○　東京　原　三幸子

身に老の添ふをおもはてをさな子とおなしこゝろに年やまたまし

○　東京　河合清子

こむ年のよそひの衣もぬはぬまにはやつもこりの日もくれんとす

○　松山　松山松子

なす事もなくて今年も暮れにけりつもるよはひなかこつのみにて

○　横須賀　高橋つれ子

今日と暮れ明日を送りて夢の間に亦も悲しき歳の暮哉

○　東京　檜皮芳子

のとかなる初春の日もあるものを心せわしき年のくれかな

○　常陸　岡田萬子

春待つと姉と妹の晴衣縫ひ夜半も忙しき年の暮かな

○　松山　上原のぶ子

めくり來る物としりてもひたすらにをしきはくるゝ年にありける

○　東京　上杉靜江子

かれてより今日ある事は知りぬれとなほとゝめ度きおのか年哉

○　新潟　岩本芳子

ひとゝせははかなき夢とすくしきてさめてはをしきとしのくれ哉

○　下野　井上倚子

身にそはる春ちかつきてそのかみのいよよこひしきとしの暮哉

○　横須賀　渡邊比佐子

年の影富士の南に傾きて漁火に暮れ行く田子の浦舟

○　佐賀　尾方やゑ子

いそのへのあまかとまやにをるはたの音にしらるゝ年の暮かな

○　佐賀　尾方綾子

惜みてもかひなきものと知りなからとゝめまほしき年の暮かな

○　秋田　長田せつ子

あたらしきはれきを待ちしをとめ子は年のくるゝや嬉しかるらん

○　東京　中村千代子

いかにせん月日は人を待たすして一日二日と早せまりぬる

○　東京　平塚白百合子

ひきとめんたつな短くなりにけりひまゆく駒のあかきはやくて

○　神戸　足立ゑい子

うきて世に流るゝ賤か年波をせきとゝむへきしからみもかな

○　越後　松永松葉子

暮れて行くとしの終りを惜みつゝとまるためしのあらばとぞ思ふ

○　伯耆　錦織さち子

稚な兒の年の始のうた復習ふ聲おもしろき校の音かな

○　韓國　原野みき子

業ならすうらふれの身は年の尾のいそく夕雲見て淚しぬ

乙

明らけき四十一歳をむかふとてくるゝも知らでいそく今日哉 ○ 名古屋 不破きみ子
おはしまに奏つる琴の手をやめて暮れゆくとしの聲をきくかな ○ 東京 奈良八重子
なかれゆく月日のとかにおくりきて一夜はかりにのこる年哉 ○ 和歌山 植村撫子
撞き鐘音のちりもさりかてにはやなつかしきとしそくれけり ○ 下野 土屋藤花子
嬉しさは秋の實のりにいや增して尙餘りある年のくれかな ○ 磐城 木幡きよ子
年木こる斧のひゞきも流れきて年も終りとなりにけるかな ○ 大阪 磯 俊子
貧か家も豐年いはふ聲みちてことしも終にくれんとそする ○ 長野 北澤千枝子
年經れは己か願ひのかなふやとおもへはうれしとしのくれかな ○ 福井 牧かれ子
いくつねて春そと待ちしおさな年みぢかく暮れて老まさるらむ ○ 東京 佐々木壽子
いたつらに花みてのみそ春秋をすくしてをしき年のくれかな ○ 東京 青木たま子
かけとりの足の音たにきへはてゝ街靜かに年の暮れ行く ○ 美濃 吉田のぶ子
思ふことなさて過ぎぬと幾度もくりかへすなり歳の暮れかな ○ 美濃 長縄みの子
行く年を早きものそといたつらにうちかこつなり年の暮かな ○ 美濃 落合かき子
岐阜 長濱・蘭子

閨 秀

やせ指にあはれほつれ毛からみつゝさて今年もくれにけるかな ○ 神奈川 服部八重子
この年も樂しき中に暮れ初めぬ衣縫ふ窓に早咲きの梅 ○ 廣島 平城淳子
文つゞる業を勤むる筆ちひぬ理想は殘る年のくれかな ○ 宮城 大槻慶子
事なくてくれぬる年のうれしさはこのうへのなきさちとこそしれ ○ 松山 巽 秀子
くれぬとや松うるこゑのやちまたにしけくきこゆる年の今日哉 ○ 長野 毛利かつ子
あすかゝはながれてはやき年波をせきとゞむへきしからみもかな ○ 和泉 福原菫子
思ふ事心にかなふ世なりせは暮るゝもとしを惜まさらまし ○ 京 京 岩谷淺子
齢ひひとつ老てんものをことほきて門に松たてしめ渡すらん ○ 岐阜 山田はき子
故鄕の暮こそ見ゆれ雪晴の雲間かくれにせわしき業の ○ 東京 田代糸子
きのふと云ひけふとすきぬる月日こそおもへはをしき年の暮なれ ○ 東京 高野元子
ひとゝせのなかれて早き年波のよせてかへらぬつもこりの夜は ○ 東京 五十嵐清子
數ならぬみにさへ今日はひとゝせををはりと聞かはいそかしき哉 ○ 筑前 島村作子
月に醉花に歌ひし春秋も思ふまゝなる年の暮か那 ○ 松山 木村芳子
こん年はなさんといひし言葉のかわかぬ内に歳は暮れけり ○ 松山 木村弘子
とやかくもなさむと思ふ心根もはかなくなりて歳は暮れけり

○　山口　村上操子

月ことのをはりも常に似さりしをいそかしけにもくるゝ年かな

○　松山　田村多豆子

かくはかり早く暮れゆく月と日をとしと言ひしはまことなりけり

○　東京　神谷てる子

小き手にふる夜數へて春をまちしむかしをいまになすよしも哉

○　神奈川　中島兆子

いくとしをふれとも年のくれゆくを惜むこゝろはかはらさりけり

○　岩代　菅野和子

此年もあゝ夢の間に過ぎにけり指をる事のみたゝしけくして

○　東京　高橋珍子

何となく街ゆく人のけたの音もいそかしげなる年の暮かな

○　旭川　佐藤央子

うなゐらは羽れに手まりと數へつゝ都の市のにきはしきかな

○　廣島　鈴森きみ子

新夫のふみよむひまも何となうこゝろせわしき年のくかな

○　秋田　齋藤たけよ子

今更におとろかれけり年なみもあすかの川にたつと思へば

○　秋田　細矢はる子

母閑にすきにしことのかさなりていそかしかりし年の暮かな

○　神戸　井口その子

人しれす拭ふ涙は去歳よりもいたくまさりつ暮るゝ歳か那

○　肥後　友永常子

いかにして春をまたむといふ人のなけきもきかぬ年のくれ哉

○　越後　松永繁子

とし月のとまるためしを聞かねとも關守なきそをしまれにける

○　奈良　栗山俊子

暮行かんとしの門とはなりにけりまつひさく人かひてゆく人

○　奈良　栗山高子

いたつらに積れる年をいそく哉なす事もなく過るこの身は

○　東京　秋田登志子

梁上より妹縫ひし紅のおてたま落ちて年暮れにけり

○　神奈川　鈴木まつ子

ありしことゆめとおもへとまたさらにつゆけさまさる年のくれ哉

○　神戸　三日月堂なみ子

あます日は片手の指に足らすなりておもひこと多き年の暮かな

○　飛彈　南　みれ子

琴の音も絶えて久しき高殿に年をかきりの鐘の音ひゝく

○　名古屋　中村濱子

いたつきになきて過ぎにし一年はくるゝ惜みやいやまさりつゝ

○　東京　千秋雅子

小車のくめるに似たる年月ははやくもたちて暮にける哉

○　埼玉　横田須磨子

海士かひろふかたみの浦のうつせ貝からくも年のくれにける哉

○　埼玉　横田秋子

春や來ぬ年やくれぬと待をしむ門の老松庭のわか竹

○　埼玉　横田やな子

くれぬとてひなも都も門毎にはるちかしとやもちひつくらむ

○　土佐　秋月廣江子

我思ふのそみはならす今年また沖の小島はくれんとすらむ

○　東京　松村とし子

かれこれときめし仕事はをへつれとまたやすからぬ心地こそすれ

短文

文學士鹽井雨江先生選

天

通學の一朝

岩代　岸野常子

秋の水ちよろ〳〵と痩せて、苔蒸した石の髯を舐めて、美くしい砂路を、さら〳〵と流れて行く飯盛橋から、左に折れて、籬越しに小溝を瞰いた澁柿のたわゝに色付いた村家を外れると、廣々とひろげられた萬頃の稻田！所々刈り取られた稻の跡に、獨り淋しく殘つてゐる案山子の笠に、今朝の霜がとけかゝつて、餘程昇りかけた旭に、キラ〳〵と光つて居る、疎らな家の軒や背戸に、赤く實つてゐる柿の、枝もたわゝに、青く澄んだ空には、一點の曇りもないが、緩く輪を描いてゐる鳶が一羽、つと愛宕あたりの松に隱れた。



折々鳴子の音が、思ひ出した樣に、澄んだ朝晴の空を渡ると、群雀がぱつと立つては、直ぐ又傍の田の面に落ちる、荷車置いた路の傍には、霜にもめげず、優しい野菊がゆら〳〵と咲いて居る、突然「はいよー」と馬追ふ聲に、振り返つて見ると、短かい袴樣のものを着けた丸顏の女馬子が一人、市へ行くのであらう、馬の背には薪や何かゞ重さうに積んである、か弱い腕に曳かれた馬は、老いて居るが、娘はまだうら若い。笠を傾けて行くのは、今朝結び立ての髮を惜むのであらう、それと少し離れて、大きい黒斑の洋犬を連れた髯面の肥つた獵夫が、くはへ

烟管の煙を、輪に吹きながら、傍の田にせつせと稲刈をして居る赤ら顔の爺さんに、輕く會釋をして過ぎ去つた。颯と冷たい風が、ショールの上から、鋭い刀で剜るかと思はれる樣に吹きつけるので、思はず急ぎ足に一町程行くと、私の前を姉妹らしい娘が行く。形ばかりのショールはしてをるが、見るからに見すぼらしい姿、犇と寄り添うて話すのが、聞くともなしに耳に入る。「伯母さんは其樣に惡いのかい。」とは姉らしい方の「あゝどうか最一度姉やに逢ひたいつて、私困つちまふの。伯父さんはちつともお酒が止まないし、其方も忙しいだろうけどつて」「困つたねい。けれども、よくお前を此方へ寄越したねい、せめてお母樣でも生きて居れば………。」と聲は濕んでゐた。まお氣の毒な、双親も無く伯母の家に賴つて居るらしいが、其人が病氣では、嘸心細い事であらう。其の上、話の樣子では、何處へか勤めて居るらしいが、同じ通ふのでも、何一つ不自由なく、身は溫かい父母のお情けの籠つた衣を着けて………あゝ勿體ないと思へば思ふ程、いとしい人等、どうか曲つた道を踏まずに、假令今はどうあらうとも、行末は立派な女と成つて呉れるやう、私は此の二人の身に必ず幸あれかしと祈つたのである。「皆運一つさね」と一言、つと左へ外れた。

と、身は何時しか廣瀨橋へとかゝつてゐた。市へ行く人歸る人、俥の音も忙しさうに、納豆果物を賣つて步くもの、牛乳新聞を配つて行くもの、あゝ是れも人の子！色々の默想に耽つた私は、ふと目醒める樣な紅葉の植ゑてある門の前に立つた時其處には最う私を待たれる友の誰れ彼れが、樂しげに打ち笑みながら「お早う！」。

(雨評) 優美なる詞藻、錬熟せる筆致、整然たる文章、敬服く。

地

愛讀雜誌を讀む心　岩代　菅野和子

愛讀雜誌が屆いた。

妾が見ないうちから、お友達は寄つてたかつて、
「一寸見せてみ!!」なか〳〵自由勝手である。
「オヤ、表紙を換へた。」
「奇麗だワ。」
「凝つてること!!」
「ハイカラだことネ」
「背景が氣に入つた。」
ア、もどかしい、妾は表紙の嶄新も、口繪の彩麗も眼に入らぬ。實は一番先に文苑欄を見たいのだ自分に所有權はあるもの丶、お友達が見てゐるのを、取りかへすことも出來ぬ、切角の投書が落選であらば、反て手持不沙汰であるし!!
胸は動悸々々する。唯一寸見さへすればよいのだに。
「あなた、此の寫眞の中にて、理想の人指してごらんなさい。」
どれ〳〵と頭を集めて、知らぬ人の品定めが初まる、呆れて了ふ。妾の心は誰も察して呉れぬと見える。
いよ〳〵自分の自由になる頃は、誰れもをらぬ。
書中の標題を怖る〳〵讀む、氣が氣でない。
態と終りの頁から繰つてくると、投書欄が出る。
「此度は佳作を隨分多く採つた」と、獨言になる。
秀逸位にはなつたらうと自覺しつ丶、名前の上の國名を讀んで行く、依然自分のは見當らない。
活字が大きく、選者の評が表はれてきたと思ふと羨ましい程、圏點が施されてをる。人となり、地に入る、此の瞬間の落膽さ加減、何に譬へ樣がない慥かに顔色は青くなつてゐるだらう。
不圖、透いて見えた「我思ひ。」思はず返して見ると、驚くことか驚くまい事か、「天」の下に明かに自分の氏名が讀まれる。
「やはり佳かつたのだ」と、何だか選者と握手でもしたやうな感が起る。
三四回繰返して讀んで見る。
すぐ「評」を日誌にかきつくといふ騒ぎ?

うれしさに次の投書を綴るといふ次第。

（雨評）情景躍動したり。生きたる筆とはかゝることを言ふべきか。オツトほめすぎ申したり。

人

名殘

埼玉　高橋とよ子

あゝ慕はしい懐しい美代子さんは、今日遠い〱お母樣の里へ去られた。私は、明日より誰れを友に苦樂を語らう。しかし、美代子さんは、自分を棄てたのではない。

聞かぬ人もあらうが、美代子さんのお父樣は、村の土地が低くして年々水害を被る所から、兼て最大共公事業としてをられた排水工事を起劃して、水鳥の巣であつた沼田まで、立派に收穫がある樣になさらうとした。夫れは、目的を達せられて、稻の穗波の豐かにさわめく樣になつたが、其の代り、三萬から有つた御自分の財産は、皆悉蕩盡されて、邸宅は銀行へも高利貸へも二重三重の抵當となり、殊に町田といふ高利貸の冷酷な手に迫られて、愈々最後の運命の斧に刻まれるに至つたのである。

積善の家に餘慶ありといふ格言も、今の輕薄なる世の中には認むることが出來ない。美代子さんのお父樣は、村を富まさんが爲めに、美しい犧牲となられたが、其の犧牲には報酬が來ず、却て迫害が來たのである。今は餘議無く其の家を立退かれて血を別けた一族が東離西散の有樣、お父樣は東京へ發ち、兄さんは岩井町の叔父樣の所へ、美代子さんはお母樣と、其の郷里へ歸られたのである。一日とて顏を合せ言葉を交さぬ日の無かつた美代子さんと、いつ復手をとつて樂しめるのであらう

（雨評）さつぱりとしたる筆なか〱に眞情のこもりたるところ、愛すべし。

秀逸

◎深夜　交換手

まどかにむすんだ昨夜の夢は、時間と呼び起す汝の聲に破られました。顔など洗つて、機械室へゆきますと、まあなんて靜かなのでせう。今は電話をかける人もなく、上野の鐘の音だん〳〵とうすれて、もう消えて仕舞つた時分に犬の遠吠か微にかすかに起りました。この寂しい眞夜中、靜かに今までのことを考へますと、まるで夢の樣、私の仲のよい松子さんや菊子さんと、學校に行つた時分は、どんなに樂しかつたでせう　卒業後、松子さんは高等女學校、菊子さんは三輪田女學校、而して、私は……私、皆樣に御目にかゝると、きまりか惡るくて、いつも隱れて仕舞ますの、さりとて、私は學校の事なと何んとも思つては居りませぬ。家のため、而して、弟の爲めですもの。かたくあきらめて居る積ですが……………あらいやだ、いつの間にか涙が……………………笑うて下さるな………、私餘程何うかして居ますのね………窓から空を見ますと、殘の月は稍低く、その光りが、また恨めしさうに力ないやうに。

（兩評）筆は幼けれど、眞情より出でたるの文、愛すべきふしあり。

◎◎無邪氣　東京　檜皮與志子

「文子さん」、淸い菊の香のたゞよふ袖垣の向から、可愛らしい顔を出して、かう呼んだのは、御隣りの俊子さんで、妹と同しく今年は十一。庭をはいて居た妹は、「はあい」と返事をすると、手にして居たはゝきはなげ出されて、かけて行た妹は、垣ごしに何やら二言三言。やがて俊子さんはのび上つて、妹に手箱を渡すと、につこり。チリンチリンと鈴の音が、前の植込にそうてきこえて居たがそれで止んで、朱ぬりの木履がちらと見えると、技折戸があいて、はいつて來られたのが、とし子さん、妹は待ちかねて居て、すぐに遊び事に取かかつた。俊子さんは御持參の、妹は持ち出した手箱のふたを取ると、中には筒袖に袴をはいたおそろひの人形が、ねかしてある。「昨日のつゞきしま

しやうね」と妹が云ふと、とし子さんがうなづく。それからは、二人ともいつかききおぼえた大人の口ぶりをして、しきりと人形の世話をする樣子が母樣に甘へる人たちとも思へない。いつも笑顏して、小さい母樣のやさしい手にもてあそばれて居た人形が、めいめい、千代紙はりつめた箱にしまはれると、二人手をひきつれて外に出る。にぎやかな笑聲がきこえると、「粗末にすなと母上の」と二人の合唱が起つた。自分は知らずしらずほほゑんだ、今までの樣子が、あまり無邪氣なのに。

（雨評）評者も讀み去つて微笑んだ。

◎お湯の歸り　　静岡　岡田いち

夕ばえ一としきり、釣瓶落しの秋の日は、もうとつぷりと暮れて、畑の蕎麥の花ばかり、ほの白く見える。一日の業終へて、浴み上りの心地よく、春の君がこの夏のお土産で、今はかたみとなつた石鹼の、高い香りに醉て、樂しかつた過去を、夢のやうにたどりながら、妙念寺の門前まで來るとふいに「みつちやん」、小聲ながら重く落ち着いた調子は、通りかゝる妾を待ちうけて居たらしい。そして、今で妾の幼名を呼ぶ人は、稚なじみのお寺の花ちやんより他にはないがと思ふと、果してさう。『私ねー、急に明日の一番で、京都の方へいくことになつたの。』かう聞いた妾は『さう、まあよかつたねー』と云たぎり。すると、『私、あなたにお別れするのは悲しいけれど、一月ばかり經つと歸つて來ますよ。』『さう、いつまでもいつていらつしやい。妾、あなたのめに、ちつとも永くいつて居られるやうに祈りますよ』。『ありがたう。ぢやあ、私、今お母樣の御酒の間に來て、急いでますから』。『さう、お大事にね。』『また手紙で、さやうなら、』小刻みに敷石を踏む下駄の音ばかり、闇にさえて、空には星がぎら〳〵しばたゝくやう。嗚呼、花ちやんと妾とは、振分け髮の頃からの無二の友で、今ではどちらも事情こそちがへ、夫に別れて淋しく暮す身。花ちやんが相思の上で目出度結婚の式を擧

げたのは、ことしの春の暮頃であつた、其の身邊に纏る複雑な事情はとう／＼新婚の二人を割て、夫は京都に妻は故郷に。それから今日まで、冷たい從母の膝下に、辛い月日を送つて居た花ちやんの今宵の喜は、どんなだらう。話相手を失た妾には、これつて別に苦勞もないが、待たるゝ春の君の御歸郷は、今年も暮れて新春を迎ふる頃でなくては、などと考へながら、何時の間にか、我が家の門に。五日ばかりの月は、籔の向ふに落ちかゝつてゐる。

（雨評）趣向は一寸面白いが、情が足り申さず。

◎行く秋　　東京　奈良八重子

夕日がたゆたうて、西の空を美しく彩つてゐるとき、殆んど裸體になつた楢の林を、落葉踏む我が跫音に、沈靜なあたりの空氣を破りながら、美しい想像を胸にいだいて、あてどもなくさまようた或る時は、梢や葉の間から、澄み渡つた大空をのぞき、樺に輝く夕雲に想像の翅をはせ、又あるときは、とある切株に腰を下して、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかる自然の聲に耳を傾けた。

かくすること再三、身はいつしか、林を横ぎる小川のほとりに立つた。鏡の如くに、木や草の影をはつきりとうつしてゐる水面を、ぢつと見詰めて居ると、頭上の木の葉、風なきに散つて。微かな音をたて、その一ひらが水に浮んだとき、あゝ秋はもう往くのだ！といふ感じが、冉々とつめかけて、思はず空を仰ぐと、入日はうすれて、淡い星影が二つ三つかゞやいてをる。

『どうです、釣れますかい』

驚いて、聲した方を見ると、林のやゝ開けた處に釣竿肩にした若い男が立つて、その足もとに、古びた外套きた銀髯の老爺が、竿を前に出して、ぢつと水面をみつめたまゝ坐つて居る。

『え、つれますか』と若いのが、再ひ聲をかける。

『うむ、釣れる』と至つて不愛想な返事をして、相變

らず目を水から離さない。若者は去つた。水面に小さな波紋が、いくつも立つて、それが消える頃、ぐいと竿を上げると、小さな魚がひら〳〵付いてゐる、老爺は嬉しさうな顏もせず、岸に懸けた籠の中に入れた。暫らく立つて見てをる中に、暗はだん〳〵と、あたりの林や野に擴がつて、大空には無數の星が閃めいてをる。魚釣りは相變らず、黒み行く川の面を見つめたまゝ、日の暮れ行くも知らず顏に、端然と坐て居る。

（雨評）前半の行く秋の感興は動きたれど、後半の釣士の狀景は行く秋の感興に關係なくして、思想の統一を欠きたる心地す。

年の暮

東京　藤澤ふゆき

寒風さつと吹いて、野分の候に入つてから、朝夕は綿入の肌にも寒さを覺える。つゞれさせの蟲ではありませぬが、着物着物と只管に唧たるゝは、勞働者と云ふ幸ない人間の上でございませう。下谷に萬年町と云ふ貧民窟があります。貧苦が萬年も續くと云ふ意を現はした理由でもありますまいが、ほんとに此の町は、上のない生活の難澁町です、或人は、此の町をやくざ人間のすてどころと申しました。その貧苦慘憺たる有樣は、まさしく人力浪費とかの結果たることが、歷々として認めらるゝと申しました。或はさうかもしれませぬが、しかし、この不潔極まつた陋巷の眞中にも、なほ正直な、勤勉な勞働者が居りますので、しかも働いても働いても、一家をさゝへることが出來ないで、家族は喰ふに食なく、着るに衣なく、憂いつらい年月を、自からなる餓鬼道に、逍遙ひ行くのもあるのです。

私のこの町に來たのは、逢魔が時と云ふ黃昏時で云ふべからざる冬のあはれさが、一しほ深く感ぜらるゝのであつた。何方も九尺二間の棟割長家で其の不潔さは豕小舍も及ばないほど、眞黑に燻ぶつた入口やら、蛛の巢で閉ちた破窓からは、なんとも云へぬ一種の惡臭ある空氣が出て來て、家內

と云はず、小路と云はずみなぎりまはつて、なか〳〵新しい空氣と變るどころではなく、あの恐ろしいやうに聞いた奴船の中甲板も　これほどではあるまいと思はるゝほどなのです。ふと見るとその一陋屋の中に沈思してる婦人が居る。顔は憔悴れ、姿は歪んで、薄弱と云ふ點をのけては、何處にも女らしいと云ふ處はなく、背は高く肉は落ちて、眼のみぎら〳〵と光つてをるのを、何の因果か恐れもせず、出の悪い乳房にすがつた緣子のこのあはれな生活難の、浮世の苦など知らうはずなく、まどかな夢に憧れ、やせたる頰にちらりと時々笑をのせて居る。これを見るにつけ思ふにつけても、その母親は、明日の米に心配するよりも、この子は、どうしたら滿足にそだつだらうかと、思ひにさぞ悩むであらう。

運命の神に愛せられる、世にもめでたい人達は、新柄を尋ね、流行を逐ふ春着の意匠に、しば〳〵呉服店の番頭を勞して、なほ滿足しないのでございますが、此の町には、又あてがはれの破れ單衣にせうこともなく、燒芋の皮に暖氣をとつて、せんべい布團に一夜入の兄弟もあるのです。

貧富はなせ懸隔(かけへだて)がひどいのでせう。若し敎父のお言葉のやうに、人が等しく神の子であるとしましたならば、神樣は、幸福を分つことが、なぜこんなに不公平なのでせう。貧者は彼等の直覺の觀念から、神樣を信ずることが出來なくなるのです。神も佛もない世かと、この世をはかなむものが多くなるのです。これは强ち彼等ばかりの罪でもございますまい。

人は申します『天は貧者のために、道なき廣漠たる沃野と、未開の海岸とを保存して置くではないか、幾百里の海中にも、人の知らない島嶼を保存して置くではないか、和氣藹然たる原野、而もまだ西班牙人だも侵入しないところがあるではないか速かに起つて幸福なる境を探險し、早く壓抑の窮地から免れよ』と。此の哀むべき眞理は、到る處

に聞える言葉ですが、然も社會は、彼等に蹶起するの氣慨と、向上の勇氣を與へたでせうか。まこと人間の存せん限りは、世に不幸や罪惡は絶えまいと、ユーゴーも申しましたが、ほんとに古今東西、何處も同じ貧民窟の、いともあはれは年の暮でございます。噫々。

（雨評）ホントに同感です。

、、、〇（川邊に憩ひて）

越後　伊倉彌壽子

「さぞ辛からうが、辛抱しておくれ」と、くれ〴〵と姉さんの御言葉、「奉公だつて人並です物。何で辛い事がありませう。母樣や、姉樣に、孝行になる事なら、どんな苦勞も忍びます」と、キッパリと氣丈らしく云ひは云つたが、毎朝此山へ薪拾ひに來る度毎、東の空を眺めては、ホロ〳〵と暫しは足も進まぬのである。されど、此の清い〳〵山下の川、さては、彼の微妙なる、せゝらぎの音樂につれて、唱歌歌ひつゝ仕事を勵みつゝ、業終

へて憩ふ時は、何時も此の川邊に愴然と深い〳〵聯想に沈むのである……問うたとて答へもせねば笑うたとて微笑みもしない、其の川が、妾にはなぜ懷かしいであらう！おゝ、それよ、昨日麓の爺の語るを聞けば、此の山下をうねり〳〵て、野に宿り、里に流れて、遂に我が最愛のふる里へ注ぐのだ、そして二筋に別れて、一筋は我が家の中庭横切る、あの流れなりとか、あゝ、其の言葉、妾が胸を少なからず驚かした。戀しい、懷かしい二人の君の枕邊さゝやく其の川上なるよ。アヽ、親しい庭、美くしい流れ、今も尚、清い影を宿して居るであらうか、やさしい響を立てゝ居るであらうか……」

もう秋も半ば過となつた。女郎花は茶色に枯れて野菊は色褪せた。野は一面に霧に包まれた樣に、穗長い芒が、折々佗しげな秋風に靡いて居る？

噫!!母樣はさぞ不孝の奴と御思し召すらん。輕からぬ御病氣を、姉一人に打ちまかせて、用達し

に出掛けた切り、今だに戻らぬ妾をば……「如何に落ちぶれたりとて、貧苦にせまりしとて、奉公なんて思ひも寄らぬ久さん一層可愛がつて下すつた、お亡父様に申譯が立たぬ』と進まぬ姉を、漸々宥めて、妾は密かに、此處三里の山奥へ、奉公に來たのである!!あゝ一月、長い間、忍ひ明し、泣き明して、漸々受けた、僅かの給料、昨日贈つたが、やさしい姉様の、必ずお袖の涙を添ふる種子となつたであらう、あゝ

(雨評)　筆はまだしきところあれど、情はこもりたり

〇入營せられし兄様の許へ

越後　松永繁子

庭の紅葉は色あせてこん度友となるへきものもなしと、庭を眺めますと、兄様の愛しなされた黄菊白菊咲き初めて、花園は大層見事になりましたが、東都もさぞ／＼花の盛りでせう。御別れ申したかの時は、悲しさに胸一ぱい、けれ共、國の爲めにゆかれるのですもの　自ら心をとりましして、庭の千草の上におく白露を眺めてなぐさめて居ます。さて、御兄様は馬にお乗り遊ばす事が上手になりなされたとの事。それは、日々上官の教へを守つて御出たからでせう。御兩親や私、毎晩爐邊で、兄様の御歸りなさつたら、どんなに、ふとつて、御様子がかはつてと、大笑ひをして嬉しく日をおくつてゐます、冬の初めと申しながら、吹き來る風さへ、一しほ身にしむ様になりました軍人の御兄様れ、病氣にお罹りなさらぬやう御氣をつけて下され。私は御言葉を能く守つて學校では師の君の教へをまもり、家へ歸つては御二たかたの仰せを守つてゐます。だから、御安心下さい。この手袋は、私のこしらへたので、不出來ですけれ共少しは寒氣を凌ぐ事を得ませうから、馬の手綱を取るひまに御用ゐ下され。亦御面倒でも、理科の雜誌、少女界一部いたゞきたいです御兄様、今日はこれで眠りにつくのです、あなたもうでせう…さ…夢でも見ませうて……左様なら。



(雨評)　可憐なる情は先づきこへたり。

〇村の夜

岐阜　長濱關子

拭うた様に美くしい空には、袷も及ばない様な秋の月が高う冴え

渡つて眺めの美くしさは、とても想像し得べきては無い。花壇の方には・小嵐が吹き初めて、萩・菊などをゆらがせてゆく。折りしも、雁が一竿、西から月を斜めに啼き渡つた。萩がはら／＼と散る。村十戸、區長さんのところを除けての外、皆砧の音が今さかりに響いて居る。再び雁が啼きつれると、砧はぱつたりと音を止めた。ハテと思ふ間もなく、大分けぶしが流れてくる。

（雨評）　水彩畫を見るやうな心地がする。

、、〇冬の夜　　和歌山　植木素子

華やかなりし紅葉も、はや名殘りなく散りはてて、寒風ふきすさび、秋くれゆきぬ。綾錦しとやかに、粧ひし野山も、一夜の夢にて、何れも衣をぬぎ、尾花あやしうもうらがれて、枯鴉しきりになき、冬のすがたものすごし。夕日落ちて、獨り燈火をかゝげ、机により、歴史を繙けば、感慨胸にせまり、時のうつるをも、覺えざりしを、更けゆくまゝに、障もる風に膝すゞろ冷え行くにて、傍なる火鉢とりよせ、火掻きおこさんとせば、白くなりて、影もなく、あたりもの淋し。あゝ夜もいたく更けぬらし、いざ寝ねんと、取り亂しゝものともを片付けつ。一枚しめ殘したる雨戸を、とぢんとするに、空冴へ渡り、松の梢に澄みて、下界を照せる月影、心からにや、寒さ一しほ、身にしむ心地ぞする。風は、ざわざわと、前の藪をさわがし宿の松風は、琴の音にかよひ、あはれさ、いはんかたなき折柄、まぎれず聞ゆる、千鳥の二聲三聲。入らむともせず、たゞずみしな、寂寞をやぶりて、高く響き渡る、時の鐘、數ふれば、一つ二つ、はや十一時、にはかに臥床に入りぬ。

（雨評）　文は整ひたれど、ふるきをなしむ。

、、〇旅立　　千葉　吉松ゆり枝子

發車の時間は、のこり一分と迫つた。窓外に立ち給ふ方々の『御機嫌よう』『度々御手紙を』『さようなら』と離別の御言葉に、是迄の御情が、一層懐しく戀しくて思ひの丈を語りたけれど、言ひ得ぬあつい涙が、胸先迄せきあげてゐるので、何から言はうかと、まどふ瞬間、母樣の御袖にすがる妹の視線と、はたと行きあつて、おぼえずほゝゑみを洩したが、心の中の悲さ辛さ、思出しても胸がせまる。やがてピーと一聲の汽笛を最う一度せめては皆樣の御顔なりともと、心許りは早れど、眼は何だか見分けがたい。最後に妹の『姉ちやまと一……に……』と泣きぜがむ聲のした時、堪え止めし涙は、一時にどつと誘ひ出されたかのやうに、胸の奥底まで響いた、あれ程までに纏つて吳れた妹、今日よりはさぞ淋しいであらう。刻一刻、汽車は容赦なく進んで、懐しい人、親しい人、鎮守の森、紅葉が簡も、瞬につゝまれた儘に殘しつゝ、彼所の空にたゞよふ黄雲にさへ名殘惜しまるるを、野を越え、村邑を過ぎ山をくゞり、河を渡り、言葉さへ訛りなかしき土地へ／＼と走つてゆく。小春の日影麗に、大空高くすみ渡り、千里の田面は黄金の波をたゝへたやう。刈り入れに勇む農夫の豐年歌面白く、果ては獨旅の淋さも慰められたが、此所彼所の停車場に、歸鄕の人を迎へる爲に、父母兄弟、友人の嬉げにほゝゑんで、互に恙なかつたのをよろこび語つて居るのを見ては、さすがに羨ましく、又そゞろ思ひは追懐糸を手操り、我身も今歸鄕の人にて、かく悦び迎へられたならば、どんなに樂からうに、末だ行先長い旅路に上りゆく身かと思ふと、又一入故鄕なつかしき思ひに堪へかぬ。心づけば、夕日は早齒のやうな山端に落ちて、七日許りの月影冴えて名も知れぬ原野を照らす色、枯々なる虫聲を聞ては、秋夜の淋し

さが身に浸み渡つて、湧くとしもなき幼なの思ひ、母樣は今宵、神に御燈捧げて、妾の無事を祈つて居られるだらう。妹は紅友禪の夜着の中に、妾を慕つて泣いて居りはしないかしらなど、空想は空想を生みゆく間に、汽笛と共に新橋へ着した。限りない希望をのせて修業に來た地かと思ふと、勇心止めがたう。文の林に深く分け入て、月桂樹手拔り、錦着て歸る日を小車の廻り早かれと、祈りに祈つた。けれども、世の中に故鄕程懷しい、戀しい、所はないのである。

（雨評）これも筆はなほ大に苦心を要する文なれど、其の情はきこえたり。

〇（其日の俤）の一節

相模　柚木とよ子

今日は十五日なので、御寺の鐘がなる、私は急いで起きた。ぶつ〳〵と飯の煮える頃、御隣でポチン〳〵と薪を折る音がした、私は御隣より早かつたので、大層嬉しかつた。

晝頃、糸繰りの暇を見て、浦庭の柿を落した。それが可笑しいのか、柘榴が無造作に笑つて居る。夜、新小說の貴公子を讀んだ、東京子の志摩高夫君が好い、本場だと云ふ半田君が面白く、マーちやんが可愛相で、知らずに泣いて居た。

十六日、前の田に稻叢が出來たので、秋が大層マセて來た等と思つて居ると、ピイ〳〵ヒヨロ〳〵と飴屋が來た。鳥や、瓢が、さも巧みに出來て居るらしく、節も面白い、今日は幾日にない秋日和。秋津子樣へ手紙を書く。遂らぬ內から。御返事が待遠しい。

十七日、神嘗祭。學校では遠足をした。留守に弟の日記を見る。相變らずの亂暴書で、くだらぬ事が書いてある。中には、斯麼處がある「此間御母さんが上げた團子を喰ひ過ぎて、今夜は御月樣が大きくなつた「、それから茲も面白い、「今日は八王子の市だから、商人が「因幡の兎」の所の大黑樣の樣に大きな風呂敷を背負て行く」秋津子樣の御返事が來た。夕暮れ壓だと思て居たら、無數の赤蜻蛉であつた、上へ下への大混雜は、會でも初まつたのであらう、夜は、弟の遠足話で持ち切り。日記も忘れさうであつた。

（雨評）個文の結び方に、筆をかへるやう注意せられよ。さすれば文一段の進步を見む。

〇繪端書にて

飛驒　南峰子

（山家雪景の畫に）降りつむ雪の眞白にみゆるは、一帶の銀世界とも思はる。あゝ壯美？　このさまを形容せん言葉とてはなく、さながら夢乎。

冬の夜のすめる月は、雪にひとしほ美くしき光りをそえ、千里の江山、眞に畫に似たり。あゝ、玄妙？　あゝこの雪景にあたりて、靜子樣いまさばとは、そも誰が胸の內ぞ？

（田園夕照の畫）山々は、入日をうけて、紅に見ゆ。あゝ、淨海ならねば、この日をよびかへすよすがもなき。伴ひつれて塒をいそぐ鴉や、白帆を揚げて入りくる帆舟、影さかしまになりて、山陰と共に紫に見ゆ。光りかへるからには、草いとゞ黃色にぞ見ゆる。時入相告ぐる鐘の音、一つ亦一つ、長き餘韻は、何とはなしに異鄕の空の君戀はさせぬ。

情ある友？　墨堤の流れに落つる、金龍山の夕鐘、いかに聞かせ給ひてか。

（月下奏笛の畫）君ヴワイオリン、妾橫笛、共に曲を合せしも、秋の靜けき夕なりし。あゝ、冴え渡る笛の音、空ゆく雁もつばさとめなん。

その昔、新羅三郎をして、足柄山頭に泣かしめしも汝。無官の太夫をして、須磨の嵐を散らしめ、熊谷直實を泣かしめしも汝。あゝ、斷腸の音深き哉、笛の音。

なつかしき靜子樣、戀しき君よ。鏡の如きこの月を、都の空で誰れと見はやし給ふらん。

（雨評）　情も筆も活き足らず。

○晩秋の夕　　下野　小島白菊

森の彼方に沈み行く夕日のかげ。眺めじとすれど、何となく只何となくなつかしき晩秋の夕ぐれなる哉。それよ、幾年の昔、かくなる身とはつゆ思はで、樂しき未來を胸に秘めつゝ眺めたりしも、此の夕ぐれなりしよ。嗚呼。親しかりし彼の君、榮ゑへ給ひし程もあらせず、理想のホームを作り給ひたりとか、うらやましき音れに世を恨みたりしも、此の夕ぐれ。葉散り、霜積む幾星霜、彼の君は夫よ父君よとかしづかれぬる幸ある御身となられたるを、餘所にきく妾が身は、今も尚小學教師てふ尊き務めに、慰藉を求め、露けき秋の夕ぐれに、袖ぬらす身にぞある。嗚呼思はじとすれど、秋の夕ぐれ！

（雨評）　弱き女子心の御尤には候へど、さる愚痴のお心はやめて一向文章の上に進みたまはんことを希望す。

○家庭日誌　　越後　松永繁子

十月廿二日晴

庭の雁來紅一本、昨夜の風雨の爲め、あはれ倒れたるを、起しやりぬ。空を見れば晴れぬ。一昨日、吉田へ參られたる母君、今日こそ歸り來ませと、いとゞ待たれしが、遂に來まさず。

火ともし頃、妹と二人して食事す。

金鉢山のあたりより鳴き渡る雁のこゑなつかし。

拾月廿三日、雨、

「御飯は出來ました、おきなさへ。」

あまりね心地よさに、よく眠りて、起されたり。

女鑑に得たる賞金、本日つきたり。初めてならねど、いと嬉しくて、母君に示す。

柿の實は、漸く赤く、葉陰より顔出しぬ。

羽黒山への紅葉、色ましたり、

冬服新調す

紅き菊の下に語り合ふ、

雨靜かにふる夕べ、

拾月廿四日

「今日もまたくもつて居ます。」

うかゞひなし居れば、下婢いはく臺所の障子に、あはれ一羽の胡蝶風になやみてとまりぬ、植木にしばし手入す。

野菊の花いたく色あせ、水そばの花あはれに咲く。

一本花瓶にもと願ひしたれど…………しをれ安きもの故、おもひとゞまりぬ。

火ともし頃、夕食はて、……拾八日の月東にさしぼりし頃、床に入る。

りんだうと菊の一本、花瓶に笑ふ。

（雨評）　今少し感情と想像とを活かしてほしき心地す、

○夕暮の二時間　　美濃　傍島みゆき子

日は村上の稻荷の森にかくれて、血の樣な雲は、稻荷山から一面に、津保川を流れる水、假り橋のつないだ針金、薪背負つて歸る女の手拭、川向の長屋、土藏のかべ、皆一色に紅く染めて、常に美くしい紅葉は、一入映えていゝ、かゝるわつかの間、寺の鐘、稻穂山の如くつんで居る馬が、いなゝく聲、水車の音、又一つ川向よりも寺の鐘、淡紫の夕靄は村一面に、總ての音を殘して包んでしまつた、唯、春日神社の奥暗う常夜燈の灯が、まばたきするやうにともつた、辻の婆やさんの糸車の音が、始まつた、いつしか、空は鉛色となつて、まんまるい月が出た。

○消息文（都の友に）東京　平塚白百合

秋風の一なでことに、草の花はいろも香もそひてさき亂れ、虫音もとりぐにおかしくことに慇きはの君が手うゑの白萩は、主のまさぬもしらずがほに美しうさき出てけろ。後の森、椽の木には、ことしもかはらで、一羽のとりとこしなへに平和なる秋のとみをうたふべく。たからかに囀づり候。君、故里こひしとばおぼし召さずや。

昨日、妹君と露子と、ともに、後の山にたけがり致し候。例の尾花のしげみわけて、萩の花影うつす小川をわたりて、落葉の下松の根方など、あちこちとあさりて、鳥のねぐらにいそぐ頃は、籠にあふれて袂にもみち申候。されど、かゝる興も、君いまさねば、何となくうすき心地せられて、去年の此ごろの思ひ出でられ、せめてば故郷の淋秋さも偲びたまはむ料にもと、野草二ツ三ツなほ白萩息ふき入れて、まき込めまゐらせ候。君よ、一日ぐに花はくちて、秋はたけめすきもろ、風肌さむくなりゆくを、かへすぐも夜ふかしなしたまひてそ、老いませる母君のまちまさんにかしこ

○冬の月　三重　大西數子

雪の降りにし冬の夜、木枯らし吹きすさみて、雲はれゆけば、凍らむばかりの月、すごき光りを放ちて、寒けき景色のいやまさるに、犬のほゆる聲遠くより響くなど、いとさびし。あはれに打ち伏したる枯野、草のなかより骨あらはなる枯木の、六つの花を、巧みに粧うて月の光りに明らけく立てる樣、これや無聲の詩なるかも。白妙まとふ山々は、月の光りにいよゝ白く、三々五々の家は、水晶の宮かと眺められて、興いと多かり。または、片割月の影くらく、霜がれたる柳の枝にかゝりたるも、面白きものなり。されど、寒き月影のまばらに照しいろ、茅屋に空うちあふぎて、飢えと凍えとをかこつなる、賤が母子の咽ぶを聞きては、たれかはあはれを催ほさゞらめや。

○天長節　松山　田村多豆子

朝日にかゞやく御旗は、家ごとになびき、君が世うたふ聲は、學やにみちわたりて、いともたふとく、いとも畏こき、天長節になむ、今世陛下の御世しろしめしてより、今年は四十とせになりて、内つ國の大御政は申すも更なり、外國との戰も、いつもぐ海に陸に、百戰百勝の功を修めて、國の光は四方の海にかゞやき、大御稜威は、天地にとほりわたれるは、古よりためしもしらぬわざになむありける。御心にもいかにうれしと思召すらむ。國民もいかに畏しと仰くらむ。いはへやぐ、家ごとに、御酒をさゝげて、人ごとにたなそこうらて、

、、、（リボンの主）　神奈川　服爲八重子

麗子樣。年十八、色白きにあられど、面容清く、頗ろ快活で、幅廣きオレンヂ色のリボンを振りたてて學舍の窓に、反身に操つる言葉使ひ、そと爽に、形こそ小さいけれど、上品な女學生。美島さん。胸元高く、結んだ黑メリンスの丸袴、渺きに過ぎて鼠色に、白く、質素なリホン。四月に五月に、換へるでもなく。運動場へ出れは、あとけなき幼子の群に入つて飛び廻ろ、極穏な保姆で、流石小兒には馴れた者。久保田さん。縹りの艷々しいリボン。白衣鮮に、血の充ちた身體の、動作よく。病室にあつては、丁寧に、親切に、院長さんの信用も淺からず。重きいたづきも、とみに癒へ得させて、いと嬉しき神の御使……人。綠子夫人。三十を一か二を餘す、嚴めしい金緣の眼鏡、化粧に費す一時間、朝に、夕に、香水のプンとして、行く者をして見返らしむ。入つては、下女の笑ひを招き、ひいては良人の破顏を覘

き、出てはふろふ……オリーブのリボン……一入添へぬ………武夫の……妻、天晴!! 交際場裡の花と。

君ちゃん。斯くて新聞に、誌上に、登りし得難き麒麟兒、今に離さぬ紀念のリボン。赤く、長く、御下げの、黒く、光つた、漆の樣な髮。小波先生の伽噺はなか〳〵巧者に、何時もニコ〳〵して愛敬のある、多賀田さんの末つ子。

(タマ)。聞き馴れた鈴音も、一入美しさに、添へた紅白のリボン、首環に結んで南椽に、眠る可愛らしい……猫……大切な………小猫……姿の……。美しい……斑點の……配り……嶄新なので町内きつての、知れもの。

、、、小さい妹の眞心

神奈川　飯田白露子

今年はいつの年よりかも多くとれると、小作の爺をはじめ皆々大よろこび。なる稻稻は穗の重みに堪へかれてか、地につくばかりに低く〳〵なびいてゝ、時折にさと吹き渡る風に、黄金の波をうたせて居る。姉樣、田の眞中に人のすがたして居るものが立つて居る、何でしようと、突然妹は問うた

チヽ、案山子、笠はさけ、衣は破れて、見るかげもない姿であるが、今稻はよく實のつて居るので、雀はよろこんで穗をつゝいて居る。然し、稻の爲には悲しまなければならぬので、この樣なものを造つて立てゝおく。智惠のない雀は、これに欺かされて、傍には來ぬのであると語りきかせました。すると、妹はしばらく考へて居ましたが、あんなにきたない着物をきて、かはゆさうですからといゝながら、家の方に走つて參りました。何することかと、後からいつて見ましたらば、母樣に頂いた幾枚かの千代紙を出して、人形にきせるやうに着物を作つて居ました、妹は、やう〳〵キヌ子と名のかける五つなのです。

、、、友の墓に詣づ

紀伊　茨木とく子

虫の音細る秋の暮、かるかや繁る野路をわけつゝ、友が生前に好み給ひし白菊を、二枝三枝手折りて、奥津城へ詣りぬ。草生ひ茂りて、卒塔婆は朽ち、人を招くらん尾花には、夕日照り添ひて、なか〳〵にものさびし。心づくしの手向の花も、力なく、みはかの前に額けば、有し事ども忍ばれて、獨り落涙しぬ。有る時はありのすさびにつらしといへど、君と妾とは、親のはらからも啻ならず、深く互に誓ひつゝ、春は根來に櫻狩り、夏は紀の川原の夕すゞみ、牛瀧山に紅葉を觀るにも、相伴はざる折はなく、雪降りしける其時は、同じ庭にて、だるまをつくり、さては、日毎の課習をも、必ず君と二人にてなしつるを、天地消長の氣運とはいへ、世は無情なるかな、計らざりき今にして、君が墓前に泣かんとは。一言いらへ給ひてといへど、石は頑として物いはず。名殘はいとゞ盡きせれど、今しつげしは入相の鐘なれば、母人や待ちてますらん故、いざ歸途につかなん、さらば我が友。

、、、運命

大坂　小野はつ枝

慘として暮れ行く秋の空、遠近の山々薄靄立ち罩めて、鎭守の杜に勤行の神鼓響きて微けく、村娘の面晴やかに、お霜が家の瀨戸を覗きて、笑ましげに會釋して急ぎ去りつ、靜寂、陰慘の思ひは坐ろに人の小さき膓を斷たしむ。今し行き暮るゝ野道に、今宵指す可き宿もなく、蹌踉として僅かに辿る、いと老いたる目盲ひの物乞ひ、あはれ運命？人の世の終り近げる身に、まとふは襤褸。破れし胡琴持てる手はワナ〳〵と打顫ひたり。ツト佇みて、寂しげの面擧げて、見えぬ目に空を打仰ぎつ。淺ましや、如何なる罪深き者の成れ果てか、彼が悲しげに打仰げる面、如何なる思びを裹めるにや、はや不覺の涙、そが

眼に濡々として宿すにあらずや。あはれ汝が妻は如何にせしぞ、汝が兒は、日盲ひし汝を、うるさしとて捨て去りしが。あゝ、汝は今日しも日出づるより漂泊ひて一椀の食に胡琴搔き鳴らしつゝ、憐を乞ふを、人は侮蔑と嘲笑な以て報いざりしか。いと年老いし盲人よ、永却に觀念の眼閉ぢし汝が最後の運命は、汝を待てり。そは墓門に非らじか。逝きて、敗殘の身を、そこに靜けく、永へに汝が身を休んぜよ。飢、寒も、なを苦しめざるべき、汝を責むる運命も、汝を苦しめざるべき。

ヽヽヽ秋日故郷を思ふ

鹿兒島　植原廣子

やう〳〵深うなりて、千草かくれに鳴く虫の音、いとあはれに聞ゆる今日今頃、他郷にある身は、淋しさ悲しさ一入まさり、月の夕雨の夜など、思ひは故郷の空のみ。げに秋は淋しきものなり。今日此はあまりの淋しさに、ふと山邊に立出でつゝ、遙か遠き故郷の空を見渡すに、感慨胸にみち〳〵つ。嗚呼、愛らしき弟は今いかになつかしき父母君はいかに、はた親しき友垣はいかに過させ給ふらんなど思ふ折りしも、何に驚きけん、さつと飛立つ山雀數羽。恨めしや、姿も翼あらんには、其のなつかしき父母君のあたゝかき膝元に行かんものを、しばしは我れを忘れてながめぬ。

新體詩

文學士　鹽井雨江先生選

天

名古屋　橘たか子

雛を離れて桃色の、襷も捨てし筒袖や、
工場風もつい馴れて、今日は結ばん手束ねの、
姿をかしき櫛巻も、女工の髮にふさはんを。
山の雲見て筬を取り、栗ゑむ窓に十七の、
春を重ねし身なれども、五色村濃の斑染め
見る目眩き絹機に、若き心の怖ぢもすれ。
糸に疲れし眼を上げて、空にたゞよふ秋雲の、
白きを見れば懷しや、煙りも寒き痩村に、
秋の夜長を糸とりて、母は淋しうおはすらむ。
われは都の檻の扉に、まだ街も見ず姫織の、
にしきゝ織るも人の爲、機の手ぶりの崩れては、
濕りがちたる糸の緒や、長き亂れも恨めしき。

（雨評）想に詩あり、詞に詩あり、めでたくも織り出だされたる文の詞に候かな。

地

○現身

越後　水野屋すえ

現身消えて魂飛びて、思ひのまゝになるならば、
春は早蕨山かげの
暖き、日に萠え出てゝ
なつかし君の遊びます折には、御手に折らるべく。
現身消えて魂飛びて、思ひのまゝになるならば、

夏は涼しき木の葉かげ、　綠の苔と我れなりて、
詩集よまんと來る君の、　御足の下に敷るべし。
現身消えて魂飛びて、　思ひのまゝになるならば、
君が寫生の繪に入りつ、　丹き心をうつすべく。
現身消えて魂飛びて、　思ひのまゝになるならば、
冬は深山の柴となり、　切られて燃えて焰となり、
君が書窓の爐に入りて、　赤き焰を捧ぐべし。

（雨評）　一かどの意匠あるところと、優美なるところ愛すべしと申さんか。

人

辻占賣

土佐　秋月廣江子

降り積む雪に夜は更けて、　只寂寞の天地に、
低き反響傳へつゝ、　辻うらめせの聲の主、
十二の秋を孤兒と、　汝が暖かき夢さめて、
身を切る風に夜な〳〵を、　單の袖のつらからむ。
寂びしくすめる眼ざしは、　誰が面かげに似たるかも、
けづらぬまゝの鬢莖の、　みだれ苦しき昨日今日、
同じ頃なる少女子の、　花の裝ひのぞまねど、

つゞれし衣に其のかみの、人なつかしき跡あらん。
かくていかなる運命ぞも、我れには解けぬ辻占を、
めしませの聲いや寒し。きくにえ堪へぬ闇の中、
とてもつながる薄命の、怨みは我れもある身とて、
今宵はてゝに汝が頰の、　淚はせめて拭はせよ。

（雨評）　言ひまはしの今一いきと、おぼゆるふしあれど、そは寒さにふるへたればと、容して、思ひやり哀れにやしく聞き申して候

秀逸

○村上義清公の墓にてよめる

越後　水野やすゐ

千曲の川の浪高く、　甲斐が根颪吹き荒れて、
眞葛の葉末露もろし、　葛尾山の秋たけて、
今一戰と思へども、　高旗須田を語らひて、
雁は南に歸る日を、　力及ばず兵足らず、
落ち行く村上主從の、　怨をのみて御越路へ、
朝に森の草見れば、　鎧の袖の片時雨。
夕枯林の風きけば、　露に丈夫の淚あり、
馬蹄埋むる落葉の、　音に悲痛の響あり、
目指すは春日山頭の、　昨日のにしき今いづこ、
君の義俠に救はれて、　亭々高き松のかげ、
大星一夜地に落ちて、　國は回せど地は得れど、
しるしの墓に苔むして、　早くもこゝに二百年、

野草荘々雨寒く、　一将の功を嫉まれど、
萬骨惑やつきざらん、　今なほのころ風の聲、
今日なほむせぶ川の音。
（雨評）　思想の組み立て方に、なほ面白からぬところあり。

、、〇晩秋賦　　飛騨　中西よし子

秋の七草色あせて、　虫の音とみに細りゆき、
田おもの稲は刈りとられ、　小笹を渡る夕風さびし、
宮居の紅葉ちりはてゝ、　赤きはひとり鳥居のみ、
流るゝ水に音はなく、　岸に夕霧たちこめて、
雲に又入る月の影、　名残つきせぬ秋のくれ、
秋はひと天となりぬとや、　頻りにいそぐ遠砧、
里の乙女の手すさびか、　打つ音いとゞ亂れつゝ、
（雨評）　情なほ足らず。

、〇若き人　　神谷てる子

松の緑の木の間より、　金色の光りさしそめて、
千草百草咲き匂ふ、　花の園生は輝きぬ、
玉なあざむく白露を、　長き袂に拂はせて、
今日も花つむ若き人、　淡紅の薔薇に似て、
若き血見ゆる軟頬や、　今燃え初めし青春の、
思ひに胸やさわぐらん、　戀にわなゝく兩の手に、
結びてもてる花束の、　一花ごとに接吻て、
胸にいだきて微笑みぬ、　片頬に入りし深えくぼ、
戀の聖やこめるらん、　げに麗はしき憧の人、
（雨評）　感情想像なほ活き足らぬををしむ、結末の句も今一工夫ありたし。

〇懐かしき聲　　名古屋　不破きみ子

あゝ懐かしや今の聲、　母のみ聲に似たる哉、
亡き母様のきませしか、　まろぶばかりに走せ出でて、
呼べどさがせど影もなし、　嗚呼なつかしや今の聲、
たしかにそれときゝにしは、　古郷さして渡り行く、
雁が一聲傳へしか、　道ゆく人のよそ言か、
さても懐かしあのこゑの、　よそ言なりと今一度、
くり返せよとせまる時、　夕日は落ちて山の端に、
時雨の雲のたゞならず、　いつか此處にも訪づれて、
初綿入のわが袖に、　ぽつりと落る一しづく、
（雨評）　今一層深く心と詞とをねりたまはゞ、はじめて其の切なる情もうるはしくあらはれむ。

〇形見の鏡　　千葉　吉松ゆりえ子

瀟々そゝぐ窓の雨に、　そへて淋しく散る木の葉、
音にくれゆく此の夕、　いとゞ亡き母忍ばれつ、
今は形見の姿見に、　母がみ魂の通ふかや、
母に似し我清き影、　かすかに浮ぶ其の面、
（雨評）　末段今一層の推敲を要す。

〇葡萄　　三重　大西數子

夏の女神の乳房より、　垂るゝ雫の紫や、
そも美酒の香くはしき、　染めて嬉しき愛の色、
黎明はらむそよ風に、　緑の影のうごくとき、
鋏もつ手のふるへきて、　袖につめたき雫落つ、
夕雲遠く迷ひ出て、　金線のそや浮ぶとき、
群がる房に映りては、　若き希望も湧き出づる、
あゝ靜寂の夜々を、　栗鼠の子出てゝ食まんとき、
靜にきゝぬその音に、　幽情つきぬ詩あるを、
（雨評）　今一人の歌に候。

○柿と菊

相模　飯沼君代子

見える見える伯母様の、
小川に沿うて眞白にぞ、
カラコロ渡る妹の、
手に持つ柿のいろ紅く、
川端近く伯母様の、
露滿つ竿を拂ひつゝ、
門を南に明け放ち、
取り殘されし頰白の、
亦もや高く駒下駄の、
露野をたゝく妹の、
微に近く眺むれば、
プンと香りて鼻をつく、

家が見えるよ朝寒の、
籬を前に橘の霜、
下駄音高く歩み行く、
枝に振られて危くも、
朝日を浴びて鮮に、
白き衣をほし給ふ、
内に入りける影二ツ、
梢に高くチーイと鳴く、
カランコロンと面白く、
草花携けて歸りくる、
黄菊白菊花の數、
伯母が褒美の香ばしく、

（靜評）　可愛げなるところはあれど、あまりにくだけたる詞は贊成しがたし。

自殺

伯耆　錦織さちよ子

よるや玉藻の波の花、
夢もさだめもしら波の、
岸の小石か振袖の、
去年の今宵の月かげに、
消えし豪者の姫ありき、
月もおぼろにのぼる夜を、
梢の花ともろ共に、
さすらへ人の若き男の、
里の小川の橋かげ、
あらぬ浮名をかなしみて、
岩より谷に身を擲き、
里に一人の花なりし、

よせては返す人の世の、
戀に破れて乙女子の、
双の袂にいと重く、
つらき運命をうらみつゝ
今年彌生の末つ方、
幸も命も細ひもに、
をしき命を春の枝、
名利に迷ひ亡びにき、
しはし語りし若人と、
奥山深く分けのぼり、
乙女二八の身を捨てぬ、
嘗て歎びし其まゝの、

月の夜ごろの波の音、
岩がれ深き谷の底、
運命かなしきうつし世の、
亡ひを誘ひしものなるよ、

おぼろ月夜の花吹雪、
春のけしきはかはらぬを、
さかまき荒ぶ波と風、

（雨評）　思想の組み立てに、發表になほ大に苦心を要す

亡姉を思うて

東京　千秋雅子

春の朝は花に醉ひ、
秋の夕は月に忍び、
なつかしき昔し忍びては、
いかなるえにし先の世に、
身には生れて來たまひし、
もはや此世の人ならで、
君を柱にわがやどの、
風のうき世にたへにしを、
其の姉君をあへなくも、
せめて三年もましまさば、
幸うすかりし姉上は、
二度歸り來まさぬを、
御偲のとゞまりて、
めぐる秋こと月てれど、
思へば花も散りやすき、

香にあこがれて遊びしを、
鳴きゆく雁を數へしが、
いとゞ悲しさまさるなり、
かくもみじかく幸うすき、
十年の時に父上は、
憂をかされし十餘年、
軒はさすかに傾かで、
むごき惡魔はあきたらず、
不治の病とありながら、
樂しき目にもあはましを。
一度行きて音もなく、
いとなつかしきそのかみの、
めぐる春ごと花はさき、
忍ふにあまる袖の露、
思へば月もかけやすき、

（雨評）　やさしき情は思ひやらるるものあれど、心も詞もこれにてば未だし。

秋と精

東京　石田さゆり

霜がれの木梢色まさり、
まれ〱尾花の勢も、
たゆるとか弱るとや、
眞紅の木梢にそよぐ風、

理性の聲もたえ〲に、
よわるか嗚呼秋の精や、
谷間にせゝらく水の響き、
そも何に洞をかささやく、

嗚呼秋の精やそよくとか、
眞紅の木槲玉ぞ結ぶ、
飛びつ舞ひつ秋の精、
歌ふとかやあゝ我胸燃ゆる、
此の眞紅の胸眞紅の底、
嗚呼秋の精や燃ゆるとか、
我が滿身の血は燃ゆるよ、
さむるは幸か然り幸よ、
嗚呼秋の精や滿身の血とか、
天女の戀の甘酒をくむか、
棄てえんや此の柔和の、
甘酒とか棄てえずとや、
遂に甘酒によひて、
痛むとも知らず紅葉、
嗚呼秋の精や燃ゆるとか、

さゝやくとや、
朝ぎりの中にむら〳〵と、
嗚呼秋の精や結ぶとか、
唇かわく、
誰れかは冷やしうべきぞ、
かわくとや、
燃ゆる血の殘りて、
燃えて野は一面の眞紅よ、
眞紅の野とや、
否かあゝ如何で、
女神の酒を嗚呼秋の精や、
あゝ我れ弱きかな〳〵、
かくも燃ゆる後は、
之れぞ精、
紅葉とや、

（雨評）　殊更に工夫せられたる調ならんか、兀々として雕琢なりし。

霜柱

下野　土屋藤花子

琅琊より碧き有明の、
折りから響く寺のかれ、
老杉數多おひ茂る、
弱き乙女のあへぎつゝ、
いたくやつれしおもさしは、
着髓の果と知られたり、
見渡す限り銀の針、
よべの寒さのいか計り、
一入胸のせまるなり、
暫時かしこむその折りの、

空高くもなく鵜、
下界の眠りさますめる、
八幡宮の石階を、
呼吸白く上るなり、
まどろみもせず唯獨り、
上りつむれは神の庭、
うゑてし如き霜柱、
烈しかりしを思はれて、
涙の袖をくひ絞り、
心のうちはそもいかに、

嗚呼そもいかにそもいかに、
似氣なく赤き其の手足、
いと猥雜に霜柱、
月にあさりし山犬か、
雄々しくもわけ入りて、
亂れぬ樣ぞ見えにける、

雪を敷く膚にも、
つんざく風のいろならむ、
踏みにちりたる足跡は、
訪ふ人ぞなきこの深山、
願ふ心の一すぢに、

本欄新體詩の處印刷工場にて組版中原稿を吹舞損ひ幾度探せども發見せず爲めに精確の校正をなす能はず依って念の爲選者に乞ひ其通覽を經て掲載せり故に多少初の意味より變りたる所あるやも測られず幸に諒せられよ

短歌

佐々木信綱先生選

天

山里の秋とへかしともみぢばを
ひとひらいれし乳母よりのふみ

岩代　岸野常子

地

君すめる島のあたりを鷗とびて
夕うつくし秋の海原

美濃　傍島みゆき子

人

水鳥　　兵庫　古東靜子

人の身もかくやとばかり思はるゝ
餌にあらそへる水鳥のむれ

秀逸

名古屋　橘たか子

さすらひの旅の母子が世語を
淋しと聞きぬゆく秋の宿

秋雨看病　　三重　大西數子

母君のそばをはなれておん藥
ぬくめをる夜を雁なき渡る

秋風　　名古屋　山根しげ子

たび僧のひとりすぎ行すゝき野や
夕日なゝめに秋風そふく

山家　　下總　高木美代子

おろかにも山の奥にとまとふかな
心からこそうき世なりけれ

時雨　　岩代　岸野菊子

とふひともなき山里のしばの戸を
たゝきてすぐるむら時雨かな

初冬霜　　東京　河合清子

川水のこほりに冬のたつ見えて
つく息しろし霜のあけぼの

磯千鳥　　常陸　岡田萬子

磯崎の燈臺暗く浪あれて
時雨るゝ夜半を鳴く千鳥哉

横須賀　柏原美奈子

ながめてし籬の菊は枯れはてゝ
心わびしき冬は來にけり

冬月　　飛騨　南みね子

山門も破れはてたる古寺の
庭物すごし冬の夜の月

折にふれて　　兵庫　有村繁子

ほろ〳〵ときりの葉散れる夕ぐれの
木の下かげに君を思ひぬ

看護婦　　淡路　すみ子

國の爲め火花散らしゝ武士も
あつきみとりに泣きやしつらむ

名所冬月
神奈川　鈴木まつ子
そばたてる御山もみえていつくしま
なみま静けく月はいてにけり

田家
美濃　杉山藤枝子
あさかほのつるうちかれし賤か家の
のきましろにもほす綿木かな

名所川
肥後　友永常子
いすゞ川其水上は千早ふる
神のみ杉のしつくなりけり



秋の雨
東京　鴉澤　貞子
雨の夜をこほろぎ姫の落したる
涙をすひてなくと思ひぬ

菊

○菊　千葉　中川千鶴子
硯には雫うけつゝたびにいますわがせにつけん菊のさかりを

○折にふれて　東京　白井峯子
此の夕俄に風の吹きたちて庭は落葉にうつもれにけり

○紅葉　和歌山　植木素子
夕日さす野邊のほそ道行く笠にかぜのまに／＼かゝるもみぢば

○　神戸　今西操子
我やとのやれし籬に色そへて盛り久しき菊の一本

○すゝき　美濃　林こう子
あはれさをますほのすゝきそよぐなりこからしすさふ秋の野末に

○　和歌山　飯沼君代子
川二つ二人が家は朝雨の窓にこぼれて落葉かなしも
○折にふれて　磐城　木幡きよ子
木葉散る心細さは夕月の墨ゑに見ゆる秋の山里
○　神奈川　服爲八重子
錦ひく奥山寺の石磴木の葉踊るよ風のまに〳〵
○冬の月　韓國　原野みき子
小夜更けて木枯すさぶ音高く氷れる如く月かげさえぬ
○時雨　大阪　磯俊子
箕面山紅葉のたよりきかまほし昨日もけふも時雨ふるなり
山家の燈　宮城　大槻初音子
ともしびの木の間をもるゝかけ見ればよるはとなりの近き山里
○松間紅葉　宮城　大槻婈子
立ならふ木々の梢はもみぢしてまつのみ秋にもれしいろかな
○行路薄　埼玉　安部とみ子
夕まくれ野路をいそけは左より右よりまねく花薄かな
○　兵庫　湖東靜子
秋のくれ小春ひよりの空はれてきくの香たかく匂ふ我園
○冬田家　東京　西村直子
もろ人もひかぬなる子に風ふけは落穂につとふすゞめむれたつ
○かなしび　東京　神谷てる子
懐かしきはゝそのかけのきえてよりものゝあはれを知り初にけり
○寄菊懐舊　甲府　名取正代子
松の木にまつはりなからつたかつらなとて千年にならはさりけん
○折にふれて　東京　高橋珍子
初稚子のねかほまもりぬ思はすもいそぐ仕事の手をとゞめつ
○菊　京都　船津澄惠子
我が宿のにはの白菊露をきてかをりゆかしき秋風ぞ吹く
○殘菊　名古屋　中村なみ子
露の上に霜をかされて白菊の月に匂へる有明の庭
○看護婦　東京　牛山粟子
つはものといさをはおなし國のためやもふの床につくすこゝろは
○親を思ひて　東京　中村千代子
朝な夕な風寒きにも父母につゝかなかれといのりけるかな
○折にふれて　土佐　秋月廣江子
疑のまなこに見れば人の世の誠のかけのなとうつるへき
○紅葉如錦　名古屋　山根しげ子
山姫はいつれの奥におはすらん紅葉のにしきとはりにはして
○　神戸　足立あさ子
名取川流れの底のうもれ木はうかふ瀬もなく春や待らむ
○時雨驚夢　兵庫　田淵みき子
芭蕉葉をうつ音高く小夜更けて夢驚かす村時雨かな
○折にふれて　廣島　鈴森きみ子
背の君の病は癒えず旅やかた軒端さひしく秋の雨ふる
○千鳥　越後　水野やすゑ子
夕寒み渡る長橋に月冴えて川島近う千鳥なくなり

乙

○　紀伊　茨木とく子
山ふかき谷間かくれの賤かやにもゆはかりなる秋のもみぢ葉
○折にふれて　神奈川　飯田白露子
○世のうきを知らぬ家にも冬は來て木枯さむくおとつるゝかな
○秋行路　神戸　今西すい子
吹かれつゝ紅葉か溪を訪なへば行手淋しき入相の鐘
○天長節を祝す　美濃　吉田よし子
來ませ友まなひの庭にうちむれて君か千年を祝ひまつらん
○別離の車　美濃　傍島曉子

急けはとのれとも今日の別れ路に早きをうらむ汽車の窓かな
○田舍より　美濃　目島まさ子
めづらしきものなおわしそ訪れませ山路のしめぢ谷のしは栗
○母恩　廣島　平城淳子
たらちねのありし昔の數くさそひれの床に移し植つゝ
○折にふれて　長野　北澤千枝子
みな人の花さへ春やまちぬらむ崩えては枯るゝ年にあきつゝ
○野雪　宮城　末永きゑ子
朝まだきわもじの先に誰ならんあとつけそめしのぢのしらゆき
○　東京　白井春子
まこゝろをこめて文にも思ふことかきえぬ身こそ本意なかりけり
○常磐御前　東京　堤いく子
伊豆のしま牧馬の山を六波羅に母はなみたにくちや果けん
○寒夜月　埼玉　野中まつ子
ちりしける落葉の上に露見えて更たる月の影の寒けさ
○　淡路　湖東すみれ子
吹く風にしたかふやなぎたふとしや人もかくこそあらまほしけれ
○山紅葉　東京　岩谷淺子
神無月紅葉さかりに日數のみ此山もりとなるよしも哉
○離菊　松山　田村多豆子
ませかきの松の木すゑに霜よきて冬しら菊の花さきにけり
○星　和泉　福原菫子
いさり火もいつしか消えて海原に二つ三つよつほしそなかるゝ
○水邊菊　松山　木村ひろ子
なくて世のうつろふこともしら菊の水にうつりて千代もみえけり
○水邊菊　松山　木村芳子
めに見えぬかはりを千代ときくの花さきてうつれる池のきしへに
○水邊菊　松山　松山松子
大君のしろしの菊の千代の香を千代田の庭の水にむすはむ

○寄筆戀　横須賀　高橋つれ子
命毛の筆に言はせし眞心もなとて君には通はさるらん
○看護婦　東京　上杉靜江子
やむ人のいと安すかれと明くれに守る心そましろなりける
○砧　越後　岩本芳子
玉川の流れの音のさひしきにしづか伏やにうつきぬたかな
○旅行　岩代　菅野和子
つゐ一ツ笠ひとつなるさひしさもおのつたのしき草枕かな
○折にふれて　岩城　菅野みの子
雪の日は訪ひませ庭の草も木もつとにはならぬ花さかりなり
○　横須賀　渡邊比佐子
木の下に冬構えたる藁廂脱いて去きぬ炭賣の顔
○福祿壽　埼玉　横田やな子
福祿壽今より千代の友垣におもひなしつゝ物かたりせん
○古稀賀　埼玉　横田秋子
いにしへのまれなる年に齢して今より千代は松にまかせん
○初冬　千葉　海上孝子
山里は冬そさひしき虫の音も千草もかれて木枯のふく
○暮秋　東京　奈良八重子
行く秋の名殘は今や落葉たく煙さひしき時雨ふる夕
○荒屋蟲　東京　高宮安子
月もるゝ日さしのつまにきり〳〵すつゝれさせとはなとかなく覽
○礦山　埼玉　横田政子
君か代は千々の黃金や國の富いたつく人の山にゆくらん
○擣衣　東京　千秋雅子
さ夜ふけてさゆる砧の音きけは袖の涙に月そやどれる
○　東京　平塚白百合子
朝かほにやとかるつゆもあるものを露をいのちの虫もありけり
○水鳥　埼玉　天野ひて子

池水もこほりてすめる冬の夜に寒けくもあるか水鳥の聲

○看護婦　　東京　佐々木直子

こと〻へといらへはなくてみとり婦のものおもはしき心もとなき

○京加茂川にて　　美濃　芳翠敏子

朝もやのうすろ〻ま〻に川束し柳の街をしやの日傘行く

○折にふれて　　美濃　長濱關子

朝もやのうすろ〻まちて親つばめ雛つれていぬかやの軒端を

○旅秋雨　　美濃　西尾靜子

旅衣驛路に入りぬ吹く風もいと〻身にしむ秋の雨哉

○秋雨　　美濃　石原たつゑ子

我庵に虫色みせる柿のみを落してもふる秋の雨かな

○　　神戸　足立ゑい子

界隈に森は無けれと朝な〱落葉をはこふ風そわひしき

○夕風　　肥後　友永章子

二ッ三ッのきはにとへるかはほりのかけをみたして夕風のふく

○折にふれて　　旭川　佐藤央子

いとし子をすかしなからの手すさひや夜はに衣ぬふ年のくれかな

○山家菊　　播磨　田淵きさ子

孤なく山田のくろの賤か家に床しく匂ふ白菊の花

○月前懐旧　　千葉　吉松ゆり枝子

いかはかり月も昔を忍ふらむあさちか原の露にかこちて

●短歌選者小出先生旅行中に付今回丈佐々木先生に選評を依頼す

俳句

内藤鳴雪先生選

天

横須賀　渡邊比佐子

菊薫る庭に兄弟姉妹かな

地

横須賀　高橋つね子

小春日に今戸の竈訪ひにけり

人

兵庫　梶原京子

鴫立ちし音に灯ともす小家かな

うつ〻なの夢結びたる炬燵哉
時雨して蔦の裏風物淋し
無花果の陰に小さき塚一ツ
雪の日は芦のまろ屋ぞ住みよけれ
拜殿に露の足ふく女あり
夕露や小秋がもとの硯箱
秋立つや兜の星のひやゝかに
小春日の一家皆句をものしけり
凩や五六騎走る藪道
日たまりや大根洗ふ賑はしき
提灯につきあたりたる夜寒哉
秋の雨豆腐屋も来て暮れにけり
小春日や門に和讃の尼法師
螢飛ぶ木立となりぬ大慈閣
餅つきて力ためさん年の暮
絹足袋の冷たき朝や長廊下
春を待つ調度も多き一間かな
待つ登れ隔てゝ白き水の郷
寒村の鍬土に入る音淺し
人知れず水流れたる冬野哉
芦狩のあとに穿れあり松の風
四阿に瀧を見下す紅葉哉
踊子や月の横顔美しき
此郷は其貞にして小夜きぬた
平凡の詩に汚された今日の月

横須賀　高橋つね子
東京　松下萬里子
横須賀　齋藤松代子
相模　山中愛子
東京　中川ゑい子
飛驒　南みれ子
同　中西よし子
遠江　岡田いち子
横須賀　柏原美奈子
岩代　岸野常子
東京　鵜澤菫子
下野　土屋そのふ子
神奈川　稲葉千代子
相模　加藤よし子
相模　秋本てる子
下野　土屋藤花子
岐阜　長濱關子
三重　大西歎子

女鑑は次號即ち新年號より
破天荒の發展をなすべし

最も美麗なる雜誌として、實益に富める雜誌として趣味深き雜誌として、奇拔なる雜誌として、面白き雜誌として、優に四十一年の讀書界を飾るに足るべく、體裁の改まると同時に、面目も亦革まり、而も女鑑が十有八年來唱來つた主張は、之を事實の上に證明して、ます〳〵其本領を發揮し、之に伴ふに全紙趣味深き實用文字を以て充たすべし、斯くて非常なる誌面の大發展は、讀者諸孃をして、破天荒の吃驚を呈せしむべし、庶幾くは刮目して之を新年號の發展振に徵せらんことを

女鑑投稿規定

投稿はすべて婦人に限り、〆切は毎月五日と改め翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により爾後締切期日を掲載前々月末日迄とす、兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〴〵別の用紙に認しられたく、又同じ用紙に二人またはそれ以上の名を並べることなきやうに願ひたし。

短文、新體詩の當選者には各天賞二圓、地賞一圓人賞五十錢秀逸繪葉書を呈す。

兼題和歌、雜題和歌、俳句の當選者には各天一圓地五十錢、人三十錢秀逸繪葉書を呈す。

●和歌兼題

一月（梅 新年）

二月（柳 春海）

定價

	前金
一册	貳拾錢
三册	五拾七錢
六册	壹圓拾錢
拾貳册	貳圓拾錢

全國逓送無料

廣告料

五號活字一字二十字詰	四半頁十六行	半頁卅二行	一頁六十四行
特等	……	二十圓	三十五圓
一等	六圓五十錢	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）㊁前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし㊂領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし㊃爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし㊄振込局は東京築地郵便局へ㊅御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年十一月廿八日印刷
明治四十年十二月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　株式合社國光社
東京市京橋區築地二丁目二十番地
右代表者　橋本忠次郎
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷人　守岡功

發行所　株式會社國光社
振替貯金口座番號壹壹七八番
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

女鑑

明治四十年十二月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾七年第十二號　第三種郵便物認可



東京築地株式合社國光社印刷